丶如く、爾來數日晝夜逆襲絶ゆるなし。我は多大の損害を蒙むるも毎次之を斥け、幸に維持すと雖、本來極めて要害の地、敵の企圖し來るべき逆襲に對し更に備ふる所無かるべからず。加ふるに我占領線前面一帶の敵勢、極めて強大なり、故に此際陸戰隊の力を假るの必要あるなり。是に於て黑井指揮官、石川參謀は地形を偵察したる結果、劍山の南東二百四十米突の高地(豬圈子溝)に砲列陣地を占據することに決せり。即ち九日夕刻より、二個中隊の水兵及三十名の陸軍徒步砲兵は、狹路峻坂の厭ひなく、翌十日拂曉迄二百四十米突の急峻なる高地に砲車を曳き揚げ、急速に砲座の築搆に着手す當時之を臨檢したる旅團長山中少將及第十一師團參謀長等は、水兵の精力と熱心とに感歎したりと云ふ。宜なる哉。越へて十六日午後、軍司令官乃木大將、第十一師團長土屋中將、伊地知參謀長等之を巡視し、皆重砲隊の行動を賞讃し、懇篤なる犒軍の辭を與へしことや。されば我が第一の砲壘既に成り、其準備は既に整ふ。此處より見渡せば、敵の陣地は指點すべく、鮮生角以南の海面に出沒する敵艦の動作は手に取る如く見ゆ。我築城中敵は時々散彈を送りつゝありしが數日來沈默し我は重砲を用ゆるに及ばず。我攻圍軍は此間大に劃策する處ありしもの丶如し。廿三日青泥窪に駐屯せる重砲隊四中隊の十二斤砲四門は、豬圈子溝と劍山との中間高地に配備することゝなれり。乙砲隊附金崎大尉之を指揮す。攻圍軍は又更に渤海方面を警備せん爲め、重砲の增遣を聯合艦隊に請ひ、夏家河子の山腹にその據付工事を開始せり。而して黑井指揮官は部下參謀等と共に劍山に登り、敵艦隊の動作を觀測して之を艦隊に報告し、偏に活動時機の來るを待ちたり。

第五節　要塞外の總攻擊準備

金州陷落以來、敵は次第に壓迫せられ、旅順要塞內に退却し、籠城の目的を達せんとし、爾後數旬は前衛前哨の衝突戰のみあり。然るに今や我軍は、既に要塞外廓を包圍し、茲に第一回の總攻擊を開始せんとす。即ち第一師團は右翼に、第十一師團は左翼に、第九師團は中央に占位相聯繫す。海軍重砲隊は第十一師團長の麾下に屬し、軍の左翼に配列したり。十万の貔貅は久しく無聊に苦めり、十數里に亘る全線の大活動は、今や一令の下に躍出せんとす。七月廿五日の夜陰を以て我重砲隊は、左翼軍の左右翼、第一線の後方に於て敵地に臨み、特に王家店南北高地の敵砲臺を射擊し得る如く陣地を占領したり。明れば廿六日東天紅を呈して、步兵は早くも豫定の前進を開始す。此の時濃霧稍や深く敵壘指點し得ず、午前十時天漸く快明、茲に於て重砲隊乃ち先づ砲火を開きたり。目標の地は王家店の南方高地にして、距離六千米突の點にあり。而して野砲亦た一齊に砲門を開き、以て步兵の突擊を掩護す。敵

亦熾に之に應砲し、殷々轟々天地爲めに震撼す。我砲の威力の大なるは勿論なるが、敵の抵抗亦甚だ頑强にして、照準又侮るべからず。敵は其猛烈なる砲火を以て、我が掩護砲に抵抗すると共に、死力を盡し我歩兵の突進を猛撃したるを以て、如何に勇敢なる突撃隊も、容易に前進するを得ざりき。而して敵は掩蓋散兵壕に潜伏し出沒自在なるに反し、我歩兵は進路一帶の斷崖絶壁の險岨を辿り、身を隱すに一の地物なし。其損害の過多なる又自然の數なり。かくて强硬なる敵の抵抗に遮ぎられ、我は午後八時砲撃を中止し、夜陰を利用して更に數回の突撃を決行し、銃聲拂曉に及びて尚止まず。而して各方面の戰況は其の進捗の度甚だ狹少にして漸く營城子、偏石棚子附近、及び大白山附近を占領したるに過ぎず。我が占領隊は之が地點の角に隱れて戰鬪隊形の儘夜を撤し、翌日再び重砲、野砲の砲火を以て更に戰鬪を開始す。敵は我砲撃に對しては沈默して毫も應せず、歩兵の前進接近するを見るや、忽ち猛火を以て之を迎ふ。此間我歩兵は傾斜急峻なる高地の斜面を登攀せざるを得ざるが爲め、一進一退毎に苦戰にして、幾回の攻撃も豫定の効を奏せず、死傷者叢間に堆かし。左縱隊方面に當りては、敵の艦艇數隻龍王塘附近の海上に現はれ、猛烈に我側面を砲撃したるを以て前進運動頗る惱み、爲に晝夜の苦戰、未だ幾何の功果を見る能はず、恰も好し我驅逐艦數隻、老鐵山沖に出現するや、敵艦隊は倉皇砲撃を中止して港内に遁入せり。歩兵の前進を完全ならしむるは、一に砲隊動作如何にあるを以て、我重砲隊は全力の勇氣を皷舞して照準發射に努めたり。砲撃の効果空しからず、敵の掩蓋、散兵壕、砲壘等續々破壞し、重砲隊の攻撃地點たる王家店北高地十六門の砲壘は、夕刻に至り稍や沈默の兆候あり。由て此夜歩兵の吶喊を試むるため砲撃を中止したり。尋いで二十八日拂曉、再び砲火の威力を以て攻撃を續行す。各方面の敵は前日來の抵抗力を消耗し、午前九時頃より、退却を始む。我各縱隊は、鬱然猛進して午前十一時、敵の陣地を奪取し、茲に重砲隊の砲撃を中止せしめ、尋で敵を追撃し、午後四時過、豫定の如く長嶺子、安子嶺一帶の線を全く占領するを得たり。茲に一と先づ進撃中止の命は全線に傳へられ、日章旗は諸所に翻々として飜り、萬歳の聲又山嶽を震動せしめたり。

第六節　總攻撃の餘力と重砲隊の功績

我總攻撃に敗走したる敵は、第二線たる鳳凰山、干大山、大孤山の線に據り、俄かに防禦工事に着手し、急速熱心に之を經營するもの丶如し。我若し攻撃一日を緩ふせば、彼は如何なる防禦工事を施し、以て我軍を惱まさんも知るべからず。故に我は連日苦戰の痕跡未だ癒へざるも、敵の防禦未だ完からざるに乘じ一氣に之を攻撃するの策を立て、廿九日は隊伍の

整頓、敵狀の偵察等に費し、翌三十日未明より全軍等しく前進を開始し、前日の如き苦戰を嘗めずして豫定の如く敵陣を奪取し、此日午前十一時を以て、全く敵兵を掃蕩したり。即土城子南一帶の地より、大孤山東方一帶の高地に至るまで、悉く之を占領内に収むるを得たり。敵は今や旅順要塞内に遁入し去る蓋し此總攻撃に際し、敵の占據したる陣地は、最も險峻なる地形を利用し、約二ヶ月の日子を以て築設したる半永久の堡壘にして、旅順守兵の殆んど全部を擧げて之に據り、砲約六十門、内少くも十四門の重砲を以て之を守りたり。我攻圍軍が此等の天險と戰ひ、半永久の防禦や、不眠不食の艱苦と戰ひて五十四時間の長きに亘り、死傷二千を出して、遂に此偉大の勝利を得たるが如きは、其壯烈眞に鬼神を泣かしむるものあり。然れども攻圍軍が此成蹟を収めたるは、海軍陸戰隊の援助與かりて力あり。名譽の一部は、之を重砲隊に頒たざるべからず、蓋し敵は其防備に於て、重きを我が中央縱隊の左方より、左縱隊全部の前面に置き、就中、老坐山、大白山附近一帶を防禦するに最も力めたり。海軍重砲隊は夙に之を認知し、終始此等の敵前に暴露して直接射撃を行ひ、前後二千四百發を送り、其全部を沈默せしめ、克く歩兵の爲めに突撃の道を開きたり。歩兵が全線等しく突進して、豫定の敵陣を奪取することを得たるは此に由れり。即ち海軍重砲隊の運動が、全局の利害に及ぼしたる影響此の如きものあり、其功勞豈に之を閑却すべけんや。士屋中將は、重砲隊の功勞を多として左の感謝狀を寄せたり。

拜啓去る二十六日以來の戰鬪に於ける貴重砲隊の射撃は大に敵に損害を與へ終に優勢なる敵を撃退し以て豫定の陣地を占領し得たるは大に本職の滿足する所にして實に感謝の至りに不堪候此戰鬪に於ける貴重砲隊の勇敢なる動作に就きては早速軍司令官閣下へも詳細報告可致候右不取敢感謝の意を表し候敬具

明治三十七年七月三十一日

第十一師團長陸軍中將　土屋光春

海軍陸戰重砲隊指揮官海軍中佐黑井悌次郎殿

第七節　攻圍軍の發展と重砲隊

我包圍線の前進すると共に、重砲隊も又其陣地を前進せざるべからず。是に於て乃木軍司令官は包圍線右方に陸戰重砲を据付るの必要を認め、双臺溝及劉士茂方面に若干門を至急配列すべきを命じたり。抑も砲臺の撤去前進は、たゞさへ困難の事業なるに前進陣地に到る進路には、山岳の起伏するあり、到底其の直接運動を許さず。是を以て、一度青泥窪に引揚げ、更に鐵道の便に據らんとし、萬難を排して引揚を決行せり。是より先二十九日、第六中隊の重砲三門は、旅順に通ずる占領鐵道守備の爲め急行出發せり。蓋し敵の驅逐艦水雷艇の時々海岸に出沒して、我が運搬中の軍隊列車を砲撃するに依り、之を防がんが爲なりき。

卅一日午前八時、豫定の如く重砲隊は大上屯を出發したり。青泥窪に殘留し居たる陸戰隊員四十名、途中應援し來るに會ふ。戰線の發展に伴ひて重砲隊の規模擴張を促進し來るは自然の數なり。我海軍は夙に此事あるを知り、先きに內地に請求する所ありしが、八月四日十二斤野砲六門抵る。依て之を七、八中隊として編成せり。これよりさき第一回攻擊の際十二珊砲一門砲身破裂せし爲、假裝巡洋艦熊野丸の大砲を引卸し應急代用せり。かくて日々砲門彈藥の運搬に餘念なかりしが、八月八日に至り全般の器具を汽車に托し一面には砲員の一部をして目的陣地に向け徒步先發し、重砲隊前進準備に着手せしめたり。而して此頃內地より再三重砲の輸送を得て、十二珊及十二斤砲數十門新に增加し、重砲隊は最も優勢なるものとなれり。八月十日一切の準備を了して重砲隊は青泥窪を出發せり。而して兵員は三回の列車を以て輸送することゝし、此夜十二時營城子迄の汽車の運搬を終り、陸兵三百餘人の應援により夜を徹して、重砲其他の運搬に從事し、翌十一日午前十一時漸く之を了したり。之より直ちに各野砲を曳引し、午後二時土城子に着す。此夜より陸兵と協同して各砲列陣地の築城に勉めたり。夜陰と雖も、終始敵彈飛來して若干の負傷は絕ゆることなし。十二日全く陣地の構造及砲座の据付を結了したり。

海軍重砲隊の主力は火石嶺高地の東西兩地に置く。火石嶺は土城子の南方旅順街道と鐵道線路との中間に位し、敵の本防禦砲壘を距ること僅かに一里半、正面に白玉山を望み右に椅子山、大案子山、小案子山、左に松樹山、二龍山を控へ、實に敵壘背後の樞要たり。此要地の東方約四百米突の鞍部に設けたる陣地は海軍少佐山口泰次郎の甲砲隊之に據り、其の西方高地旅順街道に左翼を接したる鞍部陣地は乙砲隊少佐田代愛次郎之に據り、此の兩陣地より直ちに敵の背後を壓せんとす。西方海岸に在りては曩きに黑井指揮官自ら調査して渤海灣幷に沿岸鐵道警備の爲め、重砲配置の必要を認め、之が增遣を聯合艦隊に請求し、既に据付を了したるあり。今又更に司令官の命に依りて、劉士茂にも若干門の重砲を配列することゝ爲り、之が据付を終りたり。此兩陣地は頗る包圍線に遠ざかるを以て、直接に敵壘を砲擊するにあらざるも、專ら鐵道及西部海岸を警戒し、攻圍軍の背面を掩護せんとするものにして、丙砲隊は樋口義雄之を指揮す。東方海岸にありては敵の艦艇續々、鮮生角鹽廠附近に出沒して我左翼を側擊するを以て、郭家屯附近の海岸高地に砲臺を据ゑ、以て海上正面の警備に任じたり。此砲臺の警備は甲砲隊一部隊を以て之に充つ。是に於て火石嶺一帶の海軍砲臺は中央縱隊第九師團長の麾下に屬したり。海軍陸戰重砲隊の規模は此の如く著しく擴張せられたり、曩きには僅かに少數の砲門を以て左翼地區隊の前進を掩護するに止まりしもの、今や多數の砲門を三方に配列し包圍線の最要地に主腦隊を据ゑ以

て敵壘を壓す。陣形既に整々たり、威風又堂々、其活躍して特有の威力を發揮するは目睫の間に迫れり。

第八節　陸戰隊の敵驅逐艦砲擊

攻圍軍の總攻擊は準備未だ完からず、期日亦確定せざるに、陸戰重砲隊は準備全く成り、何時にても砲門を開くを得べし。八月七日拂曉、間接射擊により、先づ一彈を旅順市街に送り、連續射擊す。午前十時に至る頃は、敵の海軍貯油庫に火災を起し、鴨綠江伐木會社を燒き、炎々天を焦し、午後一時に至り鎭火す。翌九日復び發砲し、益敵に損害を與へ、午前九時四十分頃、我の放ちし一彈は港內に潛伏せる戰艦**レトウヰザン**に命中し、非常の混雜をなさしめ、又約二千噸の滊船一隻を擊沈し、白玉山麓の火藥庫に火災を起さしめたり。此より先き重砲隊が火石嶺高地東方に砲兵陣地を構成するや、其北方後夾子山の前面平地に堅固なる砲塔を作り、以て旅順市街を間接射擊するの用に供したり。今次の砲擊は此陣地に据付けたる重砲を以てせる間接射擊にして、我は特に標的を照準するに非ざるも、着彈一々命中し、當時輕氣球より瞰下したるに、市民艦員等の狼狽混雜名狀する能はざりし、海軍重砲隊が攻圍軍に先だち、獨り砲火を開きたる所以の者は、啻に攻圍軍の爲に嚮導の任に當らんが爲のみにあらず、他に大なる目的あればなり。當時敵艦隊は我が嚴重なる封鎖を被り、時に小艦艇の出港するとあるも、大に出動するの計を爲さず、港內に潛伏して、艦隊の安全を保たんとす。我艦隊は乃ち百方熟慮の末、背面より港內を砲擊し、彼れをして一日も潛伏するを得ざらしめ、之れを港外に驅逐し、一擧殲滅せんと計劃したり。是れ陸戰重砲隊が背面砲擊に全力を注ぎし所以なり。此計策は着々奏功して、潛伏艦隊は我が重砲隊の猛火に會ひ一刻も其居に安んずること能はず、斷然意を決して翌八月十日の早朝、大擧港外に奔出せり。黑井指揮官は既往三日に亘る砲擊頗る効果ありたるを自覺し、敵は港內に安んずる能はざるべしと認め、岩村參謀と共に試に輕氣球に駕して港內を瞰下したるに、果然市街の狼狽は甚しく、非戰鬪員は相率ゐて老鐵山方面に遁れ、從來旗檣林立したる港內は、唯々小艇、滊船の東西兩港に點在するのみにして、一も巨大なる艦船の影を止めず。而して敵艦は出港を餘儀なくせられ、大擧旅順口外に出で、遂に我艦隊の爲に大打擊を蒙り、四分五裂、或は中立港に逃れ、若くは重傷を負ひて再び旅順口に引返したること、別に記載する所の如し。夫れ旅順艦隊の運命をしてかくの如くなるに至らしめたるもの、豈に陸戰重砲隊の威嚇にあらずや。其功赫々として永く沒すべからず。これを以て東鄕司令長官は、黃海海戰終了の後、左の感謝狀を重砲隊に寄せ既往の功勞を賞し、併て將來の希望を述べたり。

陸戰重砲隊は前進以來防守頑堅なる旅順の攻戰に參加し其與力顯著なるのみならず特に頃日連日港内の敵艦を猛射して海戰にも劣らざる大打擊を之に加へらる深く貴隊の勞を多とし併て益々奮勵陸軍と共に終局の成果を收むるに努め以て此聯合作戰に於ける海軍の重任を全うせられんことを期望す、

陸戰重砲隊指揮官黑井悌次郎殿

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

第二十九章　八月十日黃海の大海戰

第一節　大海戰前我驅逐艦の奮鬪

我海軍は一面旅順背面に如上の大活動を演ずると共に、本隊は依然封鎖監視を嚴重にし、時々猛激なる奇襲を試み、又脫出敵艦を攻擊し、徐ろに大決戰の時機を待ちつゝありし。折しも八月五日敵驅逐艦は又々脫出し、我驅逐艦に向つて突進し來り、熾に砲火を送れり。初め我驅逐艦曙(艦長九津見少佐)朧(艦長竹村少佐)の兩艦は、五日午後四時頃、敵狀偵察の爲め旅順口外にありしに、俄然敵驅逐艦十四隻我に向つて急進し來り、其彈着距離に入るの頃、四隻は南西に七隻は正南に、他の三隻は東南に針路を取り、三面より我を包圍せんとするものゝ如し。かくと見たる我兩艦は、午後四時四十分頃、約五千米突の距離より、敵と猛烈なる砲火を交換しつゝ、針路を北東に取り、東鮮生角の方面に進みたる敵驅逐艦の前面に出で、之を壓迫猛擊したるに、敵は此勢に怖れ、急遽艦首を轉じて港口に逸走す、我は直に進擊したり。時方に午後五時過にして夕陽赫々たり。恰もよし我驅逐艦雷(艦長篠原少佐)來り會し、三艦一隊となり、更に南方に分離せる敵の驅逐艦十一隻に近づき迫りたるが、是又港口に向ひ逸走せるを以て、我は攻擊を中止したり。敵は六時頃港内に入り、港外敵影を見ず。此戰鬪中、我には一の損傷なく、敵の損害は未詳なり。當時聯合艦隊は此報告に接し、附記して曰く『我三艦が、敵の十四隻を壓迫邀擊して、其活動の目的を達せしめざりし勇猛の動作は、全軍の歎美して措かざる所なり』と。三艦の光譽と謂ふべし。

第二節　旅順艦隊大擧出動

我攻圍軍が背面よりする壓迫は、八月に入りて愈々急劇となり、且つ、海上よりする我艦隊の活動も、亦た層一層の劇甚を加へたれば、姑らく港内に蟄伏して、餘命を繫ぎつゝありし敵艦隊も、八月十日遂に大擧して脫出を企てたり、これより先き、敵は屢々驅逐艦を港外に派して、我封鎖線の强弱を偵察せしめ、又艦艇を鹽廠、大小孤山沖に進めて、我攻圍軍の左翼を攻擊し、我艦隊の力を牽制し、以て脫出の隙を作らんとせるものゝ如し。平生退嬰を事としたる敵艦が近時往々にして勇敢なる動作に出づるが如き、到底蟄居の道なきを悟りた

るに由るなからんや。五日我驅逐艦曙、朧、雷の三艦が、敵驅逐艦十四隻を猛擊し、其目的を達せしめざりし後と雖、敵は依然出動を圖るが如く、八日の如きは敵艦隊及驅逐艦隊大擧出動せんとせしが、我日進、春日幷に第五戰隊の遊弋しつゝあるを見、愴惶港内に逃避せり、翌九日も亦た敵驅逐艦は鮮生角の東灣に迫りしも、我第一驅逐隊の突進し來るを見て退却せり、敵は港外に於て此く充分の目的を遂ぐる能はず、而して港内亦一刻も安居する能はざるに至り、即ち斷然として意を決し、十日黎明を以て出港を始めたり。同日午前七時卅分我第一驅逐隊は旅順港口に近づき敵狀を偵察せしに、敵の掃海船隊は鋭意掃海に從事し、附近に敵艦**アスゴリッド**、**ノーウ井ック**及數隻の驅逐艦碇泊し居りて之れを掩護する者の如し。須臾にして敵艦**ポベーダ**型を先頭に主力艦隊全部出港を始む。午前八時頃**バヤーン**及砲艦の數隻を除く外悉く港口を出で、蠻子營の砲臺下に整列す。例により敵は掃海艇及**ノーウ井ック**を先に主力之に從ふ。午前十時敵主戰隊の先頭**ツエザレウ井チ**は老鐵山南東に出で。漸次洋中に出づ。此日彼等の目的は飽く迄も日本の封鎖線を突破して、浦鹽艦隊に聯合せんとするにあり。若し能はずんば附近の中立港に竄入し、脱出により蒙る損傷の多大なるを辞柄として暫く餘命を保たんとするにあり。現に進み來る敵艦は、殆んど旅順艦隊の全部にして、當時我哨艦の展望する處によれば、**ツエザレウ井チ**。**レトウ井ザン**。**ポベーダ**。**ペレスウ井ツトポルタワ**。**ゼバストポリー**の六戰鬪艦、**パルラダ**。**デイヤナ**。**アスゴリッド**。**ノーウ井ック**の四巡洋艦、及び八隻の驅逐艦是なり。ウキットゲフト中將は**ツエザレウ井チ**に坐乘して全艦隊の指揮官たり。海軍陸戰隊指揮官として英名ありし少將マツセウキツチも亦同艦にあり、巡洋艦、砲艦等の千五百噸以下の劣等艦は港内に留り、巡洋艦**バヤーン**は、僚艦と共に一旦港口を出でたるが、途上敷設水雷に罹りて轟然爆發し、多大の損害を受けて港内に引き返せり。

第三節　我聯合艦隊の出動

是より先、我主力艦隊は哨艦の報を得て、敵艦大擧出動の形勢を察知し、之を前回六月二十三日の敵艦脱出港外戰に於て、未だ十分に敵の死命を制するを得ざりしは、之れ敵艦が要塞掩護を恃みて遠く出でざりしと、甚た港口に近かりしを以て能く其威力を示すを得ざりしに鑒み、豫め運籌せられたる作戰計劃により、必ず敵艦を塵滅せんことを期せり。既にして十日午前七時二十分、哨艦は愈々敵艦大擧して旅順港口を出動せるを報せり。是に於て我主力艦隊は麾下驅逐艦隊其他を統率して根據地を進動し、遇岩の東南方に隱れ、徐ろに敵艦隊の南下し來るを待つ。正に是れ滿を持して未だ放たざる强弩の如く、殺氣蔚然とし

第一圖　八月十日我第三戰隊ハ敵ヲ南方ニ誘導シ來ル又我主力ハ根據地ヲ發シテ圖ノ如キ陣形ヲ以テ西南ニ進行シ來リ午前十一時頃始テ敵ニ遭遇ス敵ハ此時迎圖ノ如キ陣形ニアリシカ俄ニ變形シテ第二圖ノ如ク先頭ノ「ウイラク」ヲ病院船間ニ廻シ「ツエサレウイッチ」先頭トナル巡洋艦ヲ左舷ニシテ二列縱陣ヲナシタリ

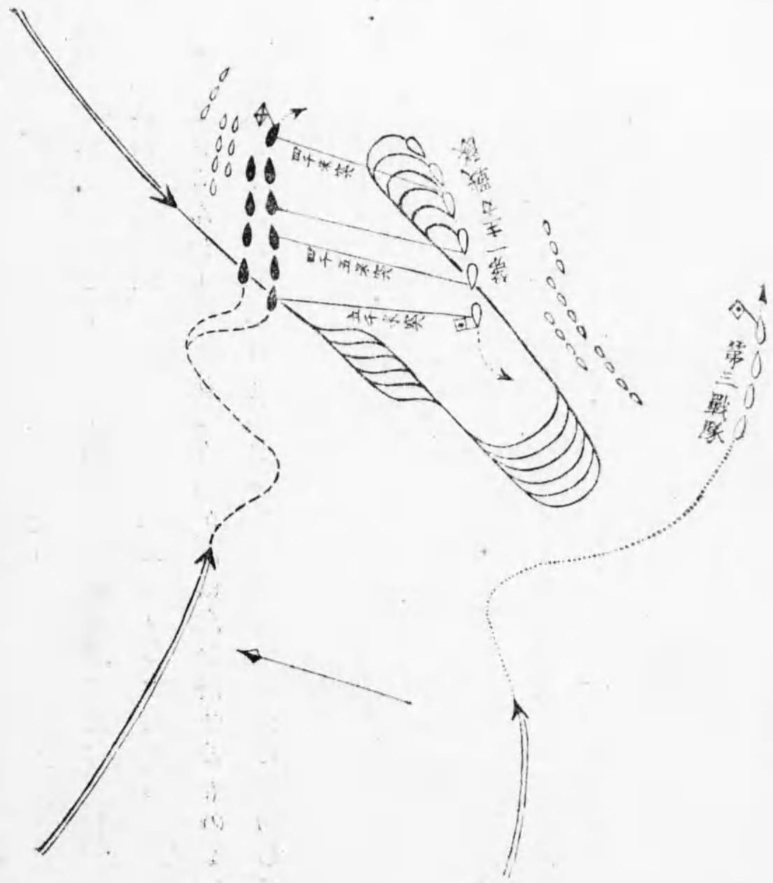
て渤海灣頭の海面を壓せり。然れども敵艦隊は毫も我艦隊の配置を偵知せざるものゝ如く、首尾能く脱出を遂げんとして、悠然隊伍を爲して出港したり。此時港外遙に我哨艦及驅逐艦の遊弋せるを認めて、漸く進航を躊躇せるものゝ如かりし。且つ巡洋艦**バヤーン**の敷設水雷に罹りたる等により或は港内に引還さんとするの傾向ありしを以て、我艦隊は切りに焦慮し、或は快戰の機を失せざらんかと氣遣ひたりしが、敵は意を決せるものゝ如く、**バヤーン**獨り港内に引返し、他は悉く出動し來れり。之を待てる我艦隊は直に出動して戰鬪部署に就けり。

第四節　大接戰、敵艦を包圍す

正午過ぐる頃、我第一戰隊は新に日進、春日を加へ、遇岩の南東より西南西に向針し、威風堂々前進せり。此時先頭たる旗艦三笠は檣頭高く、戰鬪旗を翻へし、各艦も齊しく之に倣ひ整々肅々として續航す。此時敵艦隊は既に旅順口を距る約三十海里の沖合に出で、益々南航を繼續す。敵は旗艦**ツエサレウイッチ**を先頭とし、各艦其後方に單縱陣をなし、更に病院船一隻は遙に後方に從ふ。我第一戰隊は尙ほ益々敵を洋中に誘致せんと欲し、午後一時左八點に回頭して横陣を作り、更に南々西に進航せり。敵は一意南東に向つて、逸走せんとするが

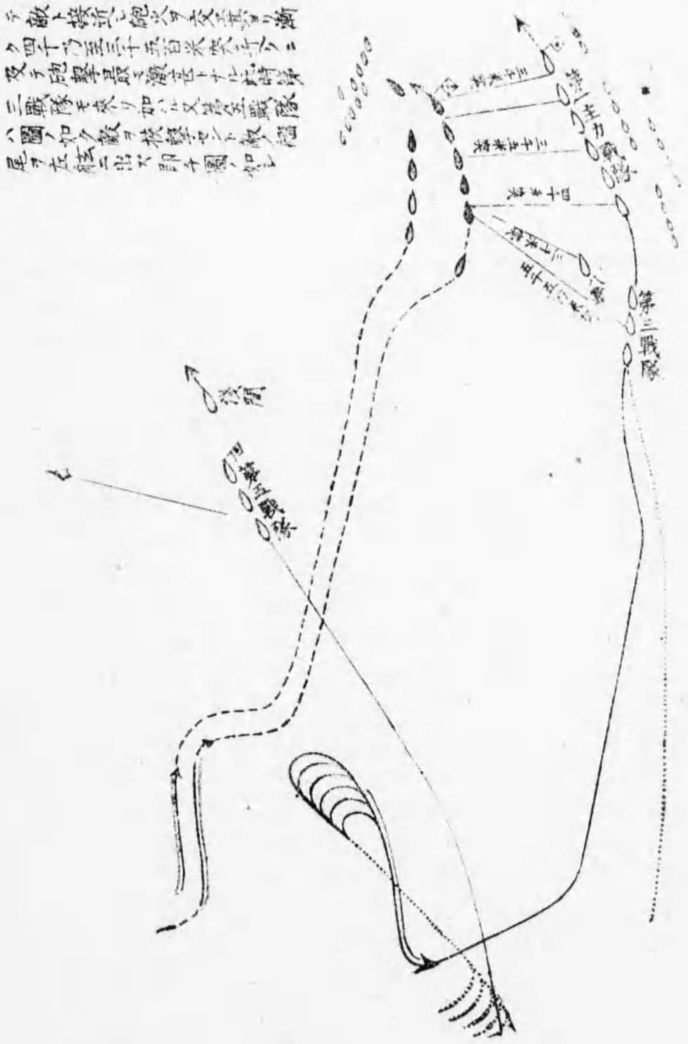
第二圖

圖、如ク我主力艦隊ハ敵ノ先方ヲ通過シ、清翌、轉ヲナシ、更ニ反轉シテ四千五百乃至四千米突ノ距離ニ於テ反航戰ヲナス敵ハ此時針路ヲ變ジ南方ニ取リ我モ同ク南針シテ敵ノ前路ヲ壓セントス時ニ午后一時三十五分



如くなるを以て、我艦隊は更に左十八點に回頭して、逆番號單縱陣となり、日進の嚮道に依り漸次東方に轉首し、以て敵の先頭を壓せり。此時三笠に紫電一閃するや、各艦齊しく砲火を開き、敵又直に之に應せり。砲火は漸次猛激となり。彼我の砲彈は雹霰の如く飛び交ひ、砲烟漠々海上を壓し、轟聲殷々霹靂の落下するが如く、海波爲に覆らんとす。時將に午後一時十五分なり。幾ばくもなく敵は針路を右轉し。南方に向ひ、我後方に出でんとする者の如し。仍て我艦隊は敵前に丁字を畫かんと欲し、午後一時三十分右十六點に一齊回轉を行ひ、約六千乃至八千米突に近づき、更に敵の先頭に向つて猛烈に集彈す、我砲彈命中する極めて多く、其都度敵艦は黑煙を噴出し、光景頗る悽慘なり。敵は俄に狼狽し再び左方に轉針して東に向はんとす。此時敵の陣形は波狀を呈して重疊し、混亂名狀すべからず、我艦隊は尙ほ之を掩擊せんと欲し、北方に轉針して益々猛擊を加ふ。敵の後列巡洋艦は非常に狼狽した る者の如く、味方戰鬪艦の左側に隱れたり。爲に敵の陣形は全く不規則となり、相混亂して唯々戰鬪を避けんとし、南東に向つて逸走するに努めたり。是に於てか我艦隊も右に回轉し、敵と暫く反航戰をなして再び針路を南東に轉じ敵艦の前路に出んとす。此時我先頭艦は、敵の中央と殆んど並頭しつゝ姑らく並行の航路を取りつゝありしが。敵は漸次に針路を左方に取り、彼我の距離漸く遠ざかる。是に於て我は午後三時二十分砲擊を中止せり。此

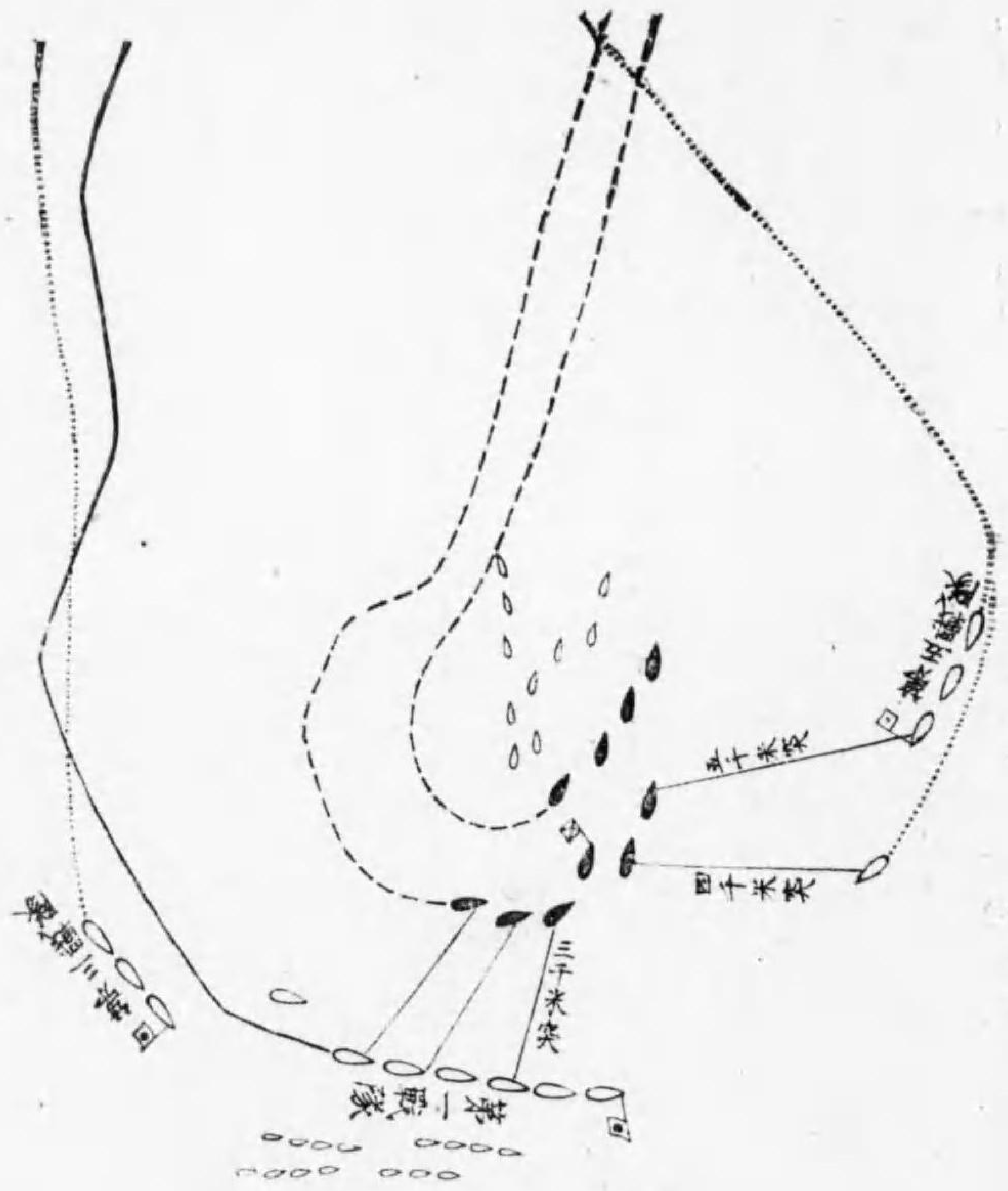
圖三第



戰鬪は約二時間に渉り、其間我の發射したる砲彈は、着々敵艦に命中すると同時に、轟然たる音響を以て爆裂し、敵に多大の損害を與へたり。就中午後二時半頃、我砲彈は敵艦**アスコリッド**に命中炸裂し、著大の損害を與へたるものゝ如く、一時は黑白の煙烟同艦の周圍に渦狀を作り、悽絶なる光景を呈せり。反之、敵の發射する砲彈は概ね命中せず、空しく我艦の四邊に落下し、無數の水柱を擧ぐるに過ぎず、偶々命中するも炸裂力極めて微弱にして、損害甚だ尠少なりき。

第一回の接戰に於て、我第三艦隊は、敵の後方約八浬に占位し、敵の退路を阻止し、第三戰隊は、第一戰隊の右後方約五浬にありて、第一回の接戰に參與せざりしが、第二回の接戰に至りて俱に共に奮鬪せり。初め我第一戰隊は、尙ほ依然として彎きの隊形を保ち、午後三時三十分に至り、十六浬の高速力を以て敵の前方に進み、同五時三十分山東角の北方約四十五浬の地點に於て、彼我の先頭約七千米突に入り、敵の殿艦**ボルタワ**とは七千五百米突の距離に達せり。此時**ボルタワ**先づ砲火を開き、我又直に應戰し、茲に第二回の戰鬪は開かれたり。我は漸次接近して敵の先頭を壓迫し、我砲擊頗る猛烈なり。敵亦必死に砲火を送りたるも命中せず、我砲彈は着々として敵艦に集中し、効果顯著なるが如し。恁くて激戰約一時間の後、敵の砲火稍や衰へたりと見る間に、午後六時四十分頃、我十二吋の巨彈は敵旗艦**ツエ**

ザレウ井ッチの司令塔に命中し、激烈なる音響を發して炸裂したれば、何かは以て堪ゆべき、同艦は急に右舷に傾き、同時に舵機を損じたる者の如く、急に左舷に一回轉して味方の列中に突入せり、此時敵の陣形全く紊れて各艦或は右し或は左し、殆んど混亂群集せる者の如し。かくと見たる我第一戰隊は益々猛進し、敵を左三千五百乃至五千米突の近距離に見、砲擊最も努めたるを以て、敵は愈々潰亂し、各自思ひ々々に西方に逃れんとす。恰も好し第三戰隊は八雲を第一着に進行し來り、同時に第五戰隊も淺間を先頭に後れ走せに戰場に到達し、直に敵の北方に出でゝ之れを挾擊したるを以て、我勢力愈々益々强大となり、續いて第一戰隊は左四點に回頭し梯形を以て東方より追擊し、第三戰隊の笠置以下は南東方面より此に三面包圍の形勢となる。我艦隊は終始整々の陣形を以て敵に對し、全力を擧げて猛擊を加ふ。敵艦に集中する彈丸は恰も迅雷の如く落下し、間斷なく命中して炸裂する音響は轟然、亦爆然殷々たる砲聲と相和し、壯絶言語に絶せり。幾ばくもなく敵艦隊は四分五裂し、**アスコリット**、**ノーウ井ック**及驅逐艦數隻は先づ血路を南方に開きて遁走せんとす。豫てより待ち設けたる第六戰隊は此の處ぞと思ひ、直に前路を遮りて猛擊し、次いて第三戰隊も左回して之を追擊す。敵は多大の損害を蒙り右往左往の醜態を演じつゝ、鋭意南方に遁れんと躁せる者の如し。時會ま夜陰となり、彼我の艦影を識別する能はざるに至る。故を



第四圖

此圖ハ午后六時ヨリ七時ニ至ル戰況ニシテ敵ハ我猛擊ニ堪ヘ兼ネ [illegible]

以て各戰隊は爾後の戰鬪を驅逐隊及び水雷艇に讓り、而して豫定の航路に向へり。時正に午後八時二分なり。如上の戰鬪中、敵艦艇は孰れも多大の損害を蒙らざるはなし。凡そ是等の損害は包圍中に受けたるものにして、第一回の接戰に於て、裝甲巨艦の陰に隱れ、暫時我砲火を避けたる巡洋艦も、第二回接戰に於ては包圍攻擊を受け、再び免るゝを得ざりしなり。若し夫れ戰鬪艦の損傷に至つては全艦六隻中、稍や輕傷なりと認むべき者は**セバスト**ポリ一隻のみ。**ホヘータ**の如きは、檣二本共に挫折し、砲門は全く破壞せられ、殆んど軍艦としての能力を喪失せり。**レトウ**并ザン及び**ツエサレウ**并ッチの如き、近距離より我集彈を蒙り、**ホヘータ**に讓らざるの大損害を蒙りたり。旗艦**ツエサレウイ**ッチの損害は第六節に記盡しあり。

第五節　旗艦三笠の奮鬪

凡そ海戰に於て最も多く敵の集彈を受くべき者は旗艦なり。我戰鬪艦三笠も亦此例に漏れず。此晝間の海戰に於て三笠は終始先頭に立ち、勇戰奮鬪最も努めたる結果は、比較的多數の敵彈を蒙り、隨て多數の死傷者を出したり。其負傷者人名中、博恭王少佐宮の尊命を見るは實に恐懼に堪へざる所なり。此日第一次の接戰を開始するや、殿下は三笠の分隊長として同艦の後部十二吋砲塔下に於て勤務に服せられ、頗る御奮戰あらせられたるが、第二次の接戰中亦同じく、午後五時五十六分砲戰最も酣なるの時、敵巨彈一發殿下の指揮せらるゝ十二吋砲筒の中央に破裂するや、激動したる空氣と、砲丸破裂の爲め發生したる瓦斯は殿下を壓迫して、胸部に打撲を與へ、同時に御軍服の右袖を擄り去り、御ヅボンも右大腿部より膝下に至るまで甚たしく裂け、御軍帽及び望遠鏡等も著しく破損したり。當時殿下の左右前後には多數の死傷者を出し、其鮮血迸りて殿下の御軍服を汚し參らせ頗る慘憺たる光景を呈したり。而も殿下には極めて輕微なる御負傷に止まらせたまひしは、御幸運と申し奉るも賢し。

午後六時十二分彼我の距離益々接近し、砲戰愈々激烈を加ふるや、又々敵巨彈一發三笠艦橋の左舷前部に命中し、悽しき音響を以て爆發せり。危い哉其高所「コンバス」安置の附近には東郷司令長官、島村參謀長、伊地知艦長等八人相集りて敵狀を視察しつゝあり。敵彈の炸裂したるは恰も其下邊海圖室にして、藤浪中尉、信號長、信號兵、軍樂手等を斃し、破片飛揚して上部「コンバス」の附近に落ち、茲に艦長、參謀官二人及び少尉二人を傷けたり。然るに八人集團の間に落ちたる彈片が、爾かく其四人を傷けたるに拘はらず、同じく其側にありたる東郷司令長官始め島村參謀長に何等損傷を與へざりしは、眞に天佑と謂ふべきなり。尙ほ

東郷司令長官は、此日開戰以來終始艦橋上に屹立し、毫も危險の身に迫るを知らざる者の如く、從容として指揮を執れり。部下の士卒咸な其赤誠に感激し、一死國に酬ゆるの念を益々深からしめたりき。今此節の記事を終らんとするに當り、特に附記すべき一美談あり、東郷大將の從僕に日渡某なる者あり、其大將に仕ふるや頗る忠實にして、古義僕の風あり、常に意を大將の身邊に用ゐて怠らず、殊に戰鬪斯の如く猛烈にして、砲彈の飛來急霰雷ならす、危險甚しきにより、屢々大將を諫めて司令塔に入らしめんとす、而も大將之を聽かす、依然艦上に在りて泰然たり、其焦慮措く能はず身を以て大將を蔽はんと擬せり、偶ま彈片の爲に股部を射られ、けられて治療室に入るに到れり、而して猶大將を思ふて已まず、永田副官其の誠意に感じ、遂に大將を拉するか如くして一時司令塔内に入らしめたりと云ふ

第六節　敵旗艦の損害敵將の戰死

前節に於て叙述したるが如く、我艦隊の砲擊は最も激烈にして砲彈は照準極めて正確なり。我は斯の如き熟練せる技能を以て、敵旗艦**ツエザレウ井ッチ**に向て砲彈を集中したるを以て、巨彈は連續同艦に命中し、其都度幾多大小の損害を與へたり。同艦は常に敵艦隊の先頭に立ち、距離亦近かりしを以て、標的として最も便利なり。夕刻第二次の接戰に於て、我より放ちたる十二吋砲彈は**ツエザレウ井ッチ**の司令塔に命中し、同時に其舵機を損ぜしむ。且つ我はその他幾多の致命傷を與へしかば、該艦は急に右舷に傾き、グル〳〵旋轉して將に沈沒せんとし、後遂に味方の列中に突入せり。此刹那、同艦は將に後續艦と衝突せんとして幾に脱るゝを得たり。同艦は沈沒と衝突とを免れたるも、軍艦としての勢力は全部滅盡せられ、悲慘の運命に陷りたり。我艦隊は翌朝其附近の海面を檢し、同艦の救命浮標、其他の器具多く浮流するを見て、一時は全く轟沈したるものと認定したる程なりき。後同艦乘組士官により確めたる處によれば、『同日午後五時半頃、山東角附近の海戰に於て、日本の砲彈一發旗艦**ツエザレウ井ッチ**の司令塔に命中し、司令長官ウヰットゲフトは其身體を粉碎せられ、僅に脚一本を殘して悲慘の最期を遂げたり。亦傍にありし參謀及多數の士官も之に死し、參謀長マセウッヰチ少將傷き、艦長亦腕に重傷を負ひ、單り航海長のみ異狀なくして全艦を指揮したり』と。右我巨彈の命中點及び其時刻に關しては、多少の差違を保し難しと雖、**ツエザレウ井ッチ**が甚大の損傷を受けたる事、總帥ウヰットゲフトの身體を粉碎せられたる事、其他多數の戰死傷者を出したるは事實なり。以て我艦隊が如何に敵旗艦と接戰して、以て之を惱ましたるかを知るに足るべし。

第七節　水雷夜襲と敵艦隊の潰亂

八月十日の晝戰に於て敵艦隊は我れの大打擊を蒙り、司令官ウキットゲフトは遂に戰死せしかば、少將公爵ウクトムスキーは代て全艦隊の指揮を爲せり。敵の新指揮官は味方の損害餘まりに甚大にして、到底南方に逸出するの不可能なるを認め、各艦艇に對して旅順退航の命を傳へたり。而かも各艦は多時の激戰に其の信號器を損したる爲め、長官の命令到達せず、陣形全く潰亂して各艦空しく右往左往するのみ。時既に日沒に際し、水雷攻擊の時機正に熟したれば、東郷司令長官は驅逐隊水雷艇隊に命ずるに敵艦襲擊の事を以てしたり。先是、我驅逐隊及水雷艇隊は晝間は彈着距離以外にありて、味方の聲援をなすのみにして、殆んど傍觀の地位にありたるが、日沒に至り襲擊の命に接するや、直に踴躍して發動し、夜陰淼漫たる海上を蹴破して敵艦を搜索し、各艦艇個々に猛烈なる襲擊を始めたり。今當時の光景を叙すべし。此夜暗澹たる洋中一點の燈火を認めず、而も彼我混亂の戰場を縱横に蹴破して敵艦を索めんとす。其任務の困難なる、其行動の危險なる門外漢のよく窺知すべき所にあらざるなり。然れども勇敢比類なき我驅逐艦水雷艇は鋭意索敵しつゝ幾回となく襲擊を加へ、終夜彼處にも散々たる砲聲を聞き、此處にも轟然たる水雷の爆發を聞く。

眞に壯絶悽絶を極めたり。時恰も敵は終日の苦戰に困憊疲勞の極に陷り居るのみならず、多大の損害は早や已に戰鬪力を喪盡し居るを以て、迅雷の如き再度の襲擊を受けては甚だしく狼狽し、各艦個々に分離し海上を逃げ迷ひ、或者は旅順を目蒐けて退航し、或者は南方に、將た東方に互に死力を竭して遁れたり。我は此敗退艦に對して間斷なく追擊を加へたるを以て、敵艦の損害一層甚しく、特に**ツエザレウヰッチ**の如きは、晝間既に悲運に迫り居りたる上、當夜亦南方に遁走せんとする途中に於て、又々我水雷を受け、更に其損害を增大し、辛ふして艦體を保ち、我の視界を脱れ出でたり。第五驅逐隊の叢雲(艦長松岡中佐)は四百米突の距離に於て**パルラダ**型巡洋艦に水雷を發射し、確に其命中を認めたりと云ふ。斯くて我は適度に水雷の攻擊を中止したり。翌十一日第五戰隊、第七戰隊の諸艦、第一驅逐隊及び海岸望樓等の諸報告により綜合すれば、戰鬪艦六隻の內**ツエザレウヰッチ**を除くの外五隻、巡洋艦四隻の內**パルラダ**一隻、及び驅逐艦八隻の內僅に一隻、幷に病院船は同日早朝辛ふして旅順口に再歸し、他は何れも南方中立港に遁竄したり。要するに當夜の襲擊に於て、敵は死力を盡して奔竄したるが爲め、我は多くの敵艦を擊沈するに至らざりしと雖、此襲擊により著しく敵艦を惱ましたるは掩ふべからざる事實にして、彼等は之が爲め出港の目的を達する能はずして空しく旅順の舊居に歸りたるなり。中立港灣に竄入したる者は

彼聊かその目的を達したるが如しと雖、是又多大の損害を蒙らざるはなく、然かも奔竄後、捕獲又は武裝解除に終りたるを以て、敵の軍略上些の効果を與へたる者にあらざるなり、此等奔竄艦の運命に關しては、更に章を改めて精叙すべし。

第八節　海戰の成果と我損害

黃海に於ける八月十日の彼我交戰顚末は此の如し、我は固より敵艦隊を殲滅すべく期せざりしに非ずと雖、我艦隊には尙ほ遠大の目的あり、卽ちバルチック艦隊の東航に備へ、我損害を可及的低度に止むるの必要あり。故に我は必ずしも强いて奇勝を制せん事を急がず、唯々敵の他方に逸出するを抑止すれば足るとせり。是を以て其中途に彷徨する者に對しては、重砲の威力を以て之を遠捲にせん事を力めたり。爲に戰鬪は一晝夜の多時に亙り、而して其間十分に敵艦隊を惱まし、之をして四分五裂、遂に南方逸走の目的を捨てゝ再び旅順に引返すの已むを得ざるに至らしむ。此の如く我は多數の敵艦を擊沈するの壯擧に出づる能はざりしと雖、而も敵の計畫を挫折するの目的は十分に之を達したり。而して敵が其計畫を挫折するの已むを得ざるに至りたるは、畢竟我攻擊の激烈にして、爲に受る處の損害著大なりし爲なるを知らば、我艦隊は此戰鬪に於て十分の目的を達し、十分の成果を收め得たる者と謂はざるべからず。故に我　天皇陛下深く其功勞を嘉賞せられ、左の優渥なる勅語を東鄕長官に賜はりたり。

聯合艦隊ハ敵艦隊主力ヲ旅順口沖ニ邀擊シ、大ニ之ヲ破リ、多大ノ損害ヲ與ヘタリ、朕深ク其勇武ヲ嘉賞ス。

東鄕長官の奉答電文、左の如し。

旅順ノ敵艦隊ニ對スル戰捷ニ對シ、玆ニ復タ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ、臣等感激ニ堪ヘズ敗殘ノ敵ノ主力ハ再ビ旅順ニ竄入シタルモ、各方面ニ於ケル作戰尙ホ進行中ニアリ、臣等奮勵有終ノ戰果ヲ收メン事ヲ期ス、右謹テ奉答ス。

我戰捷の効果を認むると共に、交戰期間殆んど一晝夜に亘る激戰なりしに拘はらず、意外に尠少にして、三笠外數艦を除きては何等の損傷を受けざる者すらあり。其の損害を受けし各艦もいづれも戰鬪航海に支障なし。又驅逐艦及水雷艇にありては、朝霧、霞、及び第卅八號、第六十七號の兩水雷艇に多少の損害を蒙りたるのみ。朝霧は進退の自由を失ひたるを以て東雲をして靑泥窪に曳行かしめたるが、其他は損害として記すべき者なし。死傷者にありては全艦隊を通じて將校以下二百二十八名にして、內三笠の分百二十名の多數に及び、全數の過半數に當れり。今各艦艇別並に死傷者の氏

名を擧ぐれば左の如し。

艦名	死亡 即死	死亡 傷死	負傷 重	負傷 輕	負傷 微	合計
三笠	三一	一	三五	三五	一二〇	
八雲	一二		七	三	二二	
日進	一六		六	二四	四六	
春日			三	八	一一	
鎮遠			一	五	六	
和泉				一	一	
朝日				二	二	
朝霧	九				九	
三十八號水雷艇			一	三	五	九
六十二號水雷艇					一	一
合計	六九	一、一	五五	一〇四	二、二三〇	

軍艦三笠乘員戰死

海軍中尉　藤浪眞三郎
海軍少尉　畑定安
海軍少尉　澤本齊
上等信號兵曹　深田太郎
一等信號兵曹　山本佐太郎
一等軍樂手　山口朝藏
二等信號兵曹　渡邊欽吉
二等軍樂手　古田金一
一等水兵　日比野彦一
一等水兵　天田高起
一等水兵　德承治郎兵衛
一等水兵　阿部久吉
一等軍樂生　進藤市太郎
一等軍樂生　早川貞承
二等水兵　鈴木熊治郎
二等水兵　佐々木源治郎
二等水兵　若井與三郎
二等水兵　服部注進太郎
二等水兵　牧源藏
二等水兵　花本忠三郎
二等水兵　田村嘉一郎
二等水兵　西村與之松
二等水兵　平澤長吉
二等水兵　黑板鐵次郎
二等信號兵　深澤半治
二等軍樂生　堀內宗一
二等機關兵　水野榮次郎
三等水兵　中村彌吉
三等水兵　林小三郎
三等機關兵　安藤榮次郎

（負傷後死亡）

一等軍樂生　山本覺
海軍少佐　殖田謙吉
海軍少佐　小山田伸之丞
海軍少佐　小倉貫一郎
海軍少尉　市川節太郎
海軍少尉　中澤久貞
少尉候補生　高田廣七
上等兵曹　宮本清次
上等機關兵曹　上村莊次郎
一等兵曹　齊木岩次郎
一等信號兵曹　大河原藏之助
二等兵曹　山口鋭
二等兵曹　三谷重五郎
二等兵曹　畠山國次郎
二等兵曹　長谷川泰三郎
二等機關兵曹　柘植末吉
三等兵曹　三上龜一郎
一等水兵　牧野八郎
一等水兵　井上幸三郎
一等信號兵　伊藤小太郎
一等信號兵　信太榮藏
二等水兵　伊藤忠治

二等水兵　中島傳作
二等水兵　濱野定治
二等水兵　野入房內
二等信號兵　淺野昇太郎
二等機關兵　片山直治
三等水兵　高橋猪太郎
三等水兵　水岩清太郎
三等水兵　舟貝清太郎
三等水兵　小山彌助
三等水兵　石森藤五郎
三等機關兵　小泉恕
三等機關兵　遠藤松次郎
三等機關兵　山本瓦平
從僕　日渡宗俊
艦長　大佐伊地知彥次郎
分隊長少佐　博恭王
少尉候補生　長谷川清
少尉候補生　加島松太郎
兵曹長　境五次郎
一等兵曹　八澤虎三郎
一等兵曹　西本榮太郎
一等軍樂手　佐々木門藏
一等軍樂手　田中豐明
二等兵曹長谷川市太郎

輕傷者

二等兵曹　錦織茂一郎
二等軍樂手　沼田市之亟
三等兵曹　細井新作
三等兵曹　曾田德次郎
三等機關兵曹　佐々木政藏
一等水兵　太田直吉
一等水兵　山科德治
一等水兵　大脇鐵三郎
一等水兵　四方政吉
一等水兵　渡瀨由太郎
一等信號兵　中川岳松
一等信號兵　三浦忠
一等信號兵　柏森源次郎
一等信號兵　秋本玉太郎
一等軍樂生　三品政
一等軍樂生　長渡清兵衛
二等水兵　高藤末治郎
二等水兵　後藤喜佐治
二等水兵　石井德次郎
二等水兵　境長七
二等水兵　上田忠治
二等水兵　上村忠太郎
二等水兵　西田龜次郎
二等水兵佐々木佐一郎
二等水兵　八百松濟助
二等水兵　山田作藏
二等信號兵　高橋發太郎
二等信號兵　下口友吉
二等機關兵　青池茂三郎
三等水兵　田中喜一
三等水兵　村本常次郎
三等水兵　村瀨定三郎
三等水兵　長沼英司
三等水兵　草野與次郎
三等水兵　山口玉次郎
三等水兵　金井孫三郎
三等軍樂生　島崎光之助
三等機關兵　瀨倉隆太郎
三等機關兵　山口新一
三等機關兵　今西文五郎
三等機關兵　關屋龍次郎
給仕　青木留吉
割烹　板倉次郎

軍艦朝日乘員微傷者

海軍少佐和田幸次郎
三等兵曹　長崎市太郎

軍艦八雲乘員戰死者

船匠長　町田信五郎
一等兵曹　工藤亮三
一等兵曹　深澤源重

一等兵曹　花澤　信藤
一等兵曹　進藤鎭三郎
一等兵曹　濟邊敬四郎
一等兵曹　村山　末吉
一等厨宰　淺野榮四郎
二等兵曹　高橋　平治
二等水兵　小宮　信吉
三等水　渡會岩次郎
三等機關兵　六鄕悦太郎
一等兵曹　山形　豐吉
一等兵曹　度瀨藤次郎
重傷者
一等機關兵曹　遠藤五代三郎
二等兵曹　菅原　愍平
二等機關兵曹　尾崎吉之亟
二等兵曹　中山　宗平
三等機關兵　鈴木延之助
重傷者
一等機關兵曹　米內昌次郎
二等兵曹　伊藤　又藏
三等兵曹　大島　强平
輕傷者
軍艦日進乘員戰死者機關大監齊藤　利昌
海軍少佐　高橋　雄一
海軍少佐　松本　直吉
海軍少佐　横山　傳
大主計　倉田　順
海軍少尉　川本　幸雄
筆記長　桑原垣之助
上等信號兵曹　內田　政助
二等信號兵曹　松崎清八郎
二等軍樂手　伊藤　蕃
一等水　木村　寅吉
一等信號兵　野中　久三
一等信號兵　加藤睦五郎
一等信號兵　影山　彌吉
三等信號兵　尾高豐次郎
海軍少尉　村松　定短
少尉候補生　新久田　齋
一等信號兵　川上　龍觀
二等水兵　鶴岡　茂平
二等水兵　渡邊　欣重
二等水兵　長谷川藤藏
一等兵曹　堀內　作平
一等機關兵曹　福間岩太郎
二等水兵　下川萬治郎
一等信號兵　日永田鹿吉
一等機關兵　野津友太郎
二等水兵　外山卯兵衛
一等水兵　白石　忠七
二等信號兵　鳥羽　清一
三等主厨　山本　龍二
（外に下士卒負傷十五名）
軍艦春日乘員重傷者二等水兵南元　岩松
三等水兵　菅原　秀
艦長從僕　藤山　鶴丸
一等水兵　南原伊次郎
輕傷者
二等水兵　佐藤　國松
二等機關兵　阿部　芳治
三等機關兵　澁田　守清
三等水兵　松岡　庄吉
三等主厨　坂川伊勢松
三等水兵　四十萬彦松
剃夫　池田　信一
軍艦鎭遠乘員重傷者　剃夫　赤間文五郎
輕傷者　一等水兵　嘗野　盛吉
一等信號兵　赤間久之進
三等水兵　松尾　德治
三等機關兵　里中　吉松
給仕　星田　歌吉
軍艦和泉乘員輕傷者二等水兵鈴木　清吉
驅逐艦朝潮乘員戰死者
上等機關兵曹　吉田　駒吉
二等機關兵曹　加藤淺治郎
三等機關兵曹　加藤　長太
一等機關兵　鈴木　辰藏
一等機關兵　山本伊太吉
一等機關兵　伊藤久太郎
二等機關兵　中山田三郎
二等機關兵　堀　幸平
三等機關兵　恒松利三郎

第三十八號水雷艇乘員戰死者
一等水兵　安井　知道
海軍中尉　江守　久
一等機關兵曹　平塚　實司
一等機關兵　岩藤　吉藏
輕傷者
上等兵曹　田川定之助
一等兵曹　今野今朝三郎
二等筆記　中島　鐵次
一等兵曹　乘田　孫市
（外一名）

開戰以來我聯合艦隊は嚮に凛烈なる渤海の寒威を冒し、今又た熾盛なる炎熱を凌ぎて、屢々勁敵と奮鬪し、連戰連捷毎回多大の戰果を收めざるはなし、殊に黃海に於ける今次（八月十日）の大海戰の如きは、酷烈なる暑熱を忍び、連續一晝夜に亘る激戰に堪へ、敵をして、殆ど潰滅せしめたり。此間將士の困苦艱難、蓋し豫想の外にあり。我　聖上皇后兩陛下には深く此勞苦を御軫念あらせられ、大城侍從武官を聯合艦隊に差遣せしめらる。同武官は二十三日、艦隊所在地に到り、東鄕長官以下に對して、優渥深厚なる御慰問の御沙汰を傳ふ。乃ち艦隊の現狀如何、炎暑の候、乘員一同の健康は如何なりや、傷病者の容態經過は如何等と深く御軫念あらせらる。特に戰鬪久しきに亘り各員益々奮勵し、毎回戰勝を收むるは、深く御滿足に思召され、御慰問として御菓子料を御下賜あらせられたる旨を傳ふ。皇太子殿下にも亦た特に黑水東宮武官を遣はされ、同じく優渥なる御慰問の令旨を傳へしめらる。艦隊の將士皆齊しく感泣拜謝し、士氣一段に旺盛を加へたり。

第九節　敵側の公報

八月十日の黄海々戰は、殆んど一晝夜に亘る一大劇戰なりしだけ、それだけ彼我艦艇の行動複雜を極めたり。故に敵側の行動幷に損害に至りては、到底我艦隊の報告のみにより其全豹を盡す能はず。乃ち茲に露國參謀長少將マツセウイチの露帝へ致したる電奏を掲げて、彼我參照の資料に供すべし。

八月十日早天我旅順艦隊は、外海に出港し、午前九時に至りて悉く港外に出でたり我艦隊は戰鬪艦六隻、巡洋艦**アスゴリッド**、**デイヤナ**、**パルラダ**、**ノーウ井ック**の四隻、水雷艇八隻より成れり。日本艦隊は左の勢力より成りて我艦隊に追尾せり。即ち其第一分艦隊は、戰鬪艦朝日、三笠、富士、八島（先に五月十五日沈沒せり）敷島、及び巡洋艦日進、春日より成り、其二分隊は巡洋艦八雲、笠置、千歳、高砂より成り、其三分隊は巡洋艦秋津洲、出雲、松島、嚴島、橋立、及び戰鬪艦鎮遠より成り、外に水雷艇約三十隻ありたり。我艦隊は敵艦の戰列を通過せんとして運動したり。其間敵の水雷艇は、我前面に浮動水雷を敷き、我回轉をして極めて困難ならしめたり。午後一時、我艦隊は四十分間交戰の後、敵の戰列内を通過する事を得て、山東角方面に向ふて針路を執る敵は全速力を出して我艦隊を追尾し、徐々我を控制す。茲に彼我再び戰鬪を交へ、數時間に亘りしも、彼我何れも何等の利益を占むるに至らざりき。此會戰中、我艦隊、司令長官は戰死し、戰鬪艦**ツエザレウ井ッチ**艦長負傷して知覺を失したり。殆んど同時に同艦は機關及び舵機を損傷し、已むを得ず四十分間停止したり。他の諸艦は之が爲に**ツエザレウ井ッチ**を圍繞して回轉するの已むなきに至る。依て司令官**ツエザレウ井ッチ**(?)艦長ウクトムスキー公は司令長官の職を執る。**ツエザレウ井ッチ**は既に艦隊に隨伴する事能はずして、其瞰視を失するに至るを以て夜に入りて後南方に針路を取り、我瀛力を以て浦盧斯德に到達せんと企てたり。同艦は夜間敵水雷艇より攻擊を受け、翌早朝山東角附近に出づ。艦隊司令官は、同艦の損傷を檢査し、其程度を確認して、其遂に浦盧斯德に到達する能はざるを斷定し、同艦長に修繕の爲に膠州灣に進行する事を許したり。戰死者中には司令長官ウ井ットゲフト少將、航海長アザレフ大尉、航海士官ドラグイシエウ井チ少尉あり。微傷を負へるは本職（參謀マツセウイチ）及び外八名なり、下士官中には死傷若干名あるも、今之を確知するを得ず。本職は十一日午後九時膠州灣に達したり。港内には既に巡洋艦**ノーウ井ック**及び水雷艇**ベスチユンニー**ありたり。此激戰に於て、將校下士卒の驍勇を目擊して之を陛下に奏上するを得るは臣の自ら悅ぶ所なり

と、此報告はマツセウイチが參謀長として旗艦に乘組み居て記したるを以て、艦隊出動以後の經過歷然たり。然れども**ツエザレウイッチ**破損し、已れ亦傷き、本隊に分れて獨り膠州灣に竄入したる者なるを以て、爾來本隊の行動に關しては記す所なし。ウキットゲフトに繼で艦隊司令長官の任を執りたるウクトムスキーは、爾後の經過を報告したり、曰く、

午後七時三十分**ツエザレウ井ッチ**は舵機を破壞せられ、同時に「大將は今傳令す」云々との信號を爲して戰線を脱したり。時に恰も**ペレスウ井ツト**の檣二本折られ、信號機は晝間及び夜間の分とも破壞せられたるを以て、余は餘儀なく單に「余に伴へ」の信號を與へたり。全艦隊が果して之を識了せしや否やは予の知らざる所なり。余の乘組中には多數の死傷を出し、且つ艦腹の武裝及び電氣機械は甚しく破損せるを以て、余は已むなく旅順口へ歸航せんと決意せり。**レトウ井ザン**、**ポペーダ**、**ボルタワ**、**セバストポリ**、**ツエザレウ井ッチ**等の鋼鐵艦は成な余の背後に附隨せり。我々は皆平均速力にて進航せり。然れども暗夜と云ひ、特に頻繁なる水雷攻擊を受くる事とて、我々は絶へず進路を變ぜざるを得ずして、遂には各艦一時に皆離散せざるべからざるに至れり。日沒頃には**レトウ井ザン**、**セバストポリ**、**ペレスウ井ツト**、**ポビーエダ**、**ボルタワ**、及び**パルラダ**の六隻は水雷艇を從へて港内に在りたり。我軍の損害は、戰死將校二、兵士三十八名にして、負傷將校二十一、兵士二百八十六なるが、内五十は重傷なり。艦長ボーイマンは數箇所の負傷を爲せるも、其戰艦が港内に入れるまで二十時間も艦橋に立てり。我艦船はそれ〴〵修繕を加へ、或は船渠に入れるものあり。余は今ウ井ットゲフト少將不在の爲め、自ら旅順艦隊を指揮し居れり云々、

此二個の報告を接續通觀せば、當日の戰況を知るに於て餘りあり。敵は自ら明白に敗北を認めたり。平時も敗報を掩護する敵側の報告として此の如く明白直截なる者は蓋し稀に見る所なり。

第三十章　膠州灣の露艦處分

第一節　遁竄港灣と處分例

八月十日黃海に於ける我海軍の大捷は、全然敵艦隊の計畫を挫廢せしめたり。同日旅順口を脫出したる敵艦中、再び旅順口に歸還したるものは、戰鬪艦五隻、巡洋艦二隻(內一隻即ちバヤーンは出港の際、敷設水雷に罹りて港內に引返へす)驅逐艦一隻、及び病院船一隻にして、他は南方に逃れたり。其南航諸艦艇の行衞は左の如し

戰鬪艦ツェザレウヰッチ、膠州灣に入る、巡洋艦アスゴリッド、始め膠州灣に竄入し次いで上海に逃る、巡洋艦ノーウヰック、始め膠州灣に遁入し、後北海に航して(コルサコフ港に入る)巡洋艦デイヤナ、始め膠州灣に入り、次いで西航して佛領西貢に入る、驅逐艦レシテリヌイ、芝罘に入る驅逐艦グロムボイ、上海に入る、驅逐艦ペスシユチヌイ、ベスボチヤドヌイ、ペストラシユヌイ、膠州灣に入る驅逐艦三隻、威海衞に入る

敵艦隊が始め旅順口を脫出したる時の計劃に付、爾後各艦長の談話其他の報告等を綜合すれば、彼等は遠く浦鹽斯德に進航するの目的なりし事明なり。而して小型軍艦は時の事情如何により、或は附近中立港に竄入するの已むを得ざる事あらんも、大軍艦は萬難を排して必ず目的地に達すべしといふにありし。然るに我が猛烈なる攻擊と、嚴密なる遮斷とにより、遂に其目的を挫折せられ、四分五裂していづれも中立港に竄入するの已むを得ざるに至りしなり。蓋し我海軍の成功何時もながら多大なりといふべし。飜つて是等遁竄露艦の處分如何と見るに、其已に相率いて中立港に入る以上は、之に對して適當の處分を爲さゞる可らず。竄入したる場合に於ては、該港灣を領有する中立國は出入艦に對して二十四時內に出港を命ずべく、若し天候の不良、乘員の不足、食糧炭水の飲乏等により、實際二十四時間內に出港する能はざる事情あるものは更に二十四時間の猶豫を與へて出港せしむべく、艦隊損傷して眞に航海に堪へざる場合に於ては、航行に堪ゆる丈けの小修理を許し、修理後速に出港せしめざるべからず。反之戰鬪力回復程度の大修理を施し、若しくは中立港を以て苟くも作戰の根據地となすが如き事あらば斷じて之を許すべからず。是れ近時國際法の認むる原則にして、各國概ね皆之を採用せざるはなし。されば露艦竄入せる港灣を有する中立國は、宜しく此原則を以て露艦に對すべく、此旨義に反して露艦を庇護し、以て一方交戰國の利益を害し、感情を傷ふが如き擧動に出る事なかるべきなり。若し否ら

ずして露艦の竄入を以て恰も窮鳥懷に入るの想を爲し、强いて之に出港を命ずるに忍びずとなし、之を庇保するが如き事あらんか、是れ明かに中立違反たるを免れず。事の玆に至る時我は固より決然として自由の行動に出でん。中立國に於ては露艦にしてその出港命に應せず、自ら通則を破るが如きことあらば、斷然武裝の解除を命じ、戰爭の終結まで之を抑留せざる可らず。是れ嚴正に中立を守る邦國の宜しく盡すべき手段なり。假令佛、獨の內實露國に同情を寄すると雖、既に局外中立を宣言したる以上は漫然露艦を庇護するを許すべきに非ず。淸國官憲も亦その力如何に微弱なりとはいへ、獨立國として中立を宣言したる以上は中立の義務を怠るを許容すべきに非ざるなり。幸に各中立國は前記各竄入艦に對して適當の處置を取り(レシテリヌイは帝國自ら手を下せり)澁滯ながらそれ〴〵處分を終るに至れり。

今參考として從來の實例を擧げんか、武裝解際は千八百四十八年より同五十年に至るまでの丁抹とシユレスウイグ、ホルスタイン間の戰爭中、並に淸國が日本の承諾を經て露艦マンジュール號を處分したる件あるのみ。中立國が一切其港灣に交戰國の軍艦投錨するを禁じたる例は、一千八百六十二年米國南北戰爭に際し、英國は交戰國双方の軍艦をパナマ諸島の港灣に入るを禁じ、同七十年獨佛戰爭に際し、瑞典は絕對に其五ヶ所の港灣を封鎖し、又同戰爭に於て、英國も現實に戰爭の繼續中兩交戰國の各兵艦が英本國及び其殖民地又は領地にある灣津、又は英國の主權に屬する水面を、交戰上の目的の爲め、若しくは艤裝の便宜の爲め、碇泊所又は避難所として使用する事を禁制せし等あり。其他尙ほ二三ありと雖、一々枚擧するの遑なし。蓋し以上の各國宣言條規は皆國際法上の原則例規と爲り居る者なり。

第二節　旗艦及其他の處分

始め膠州灣に竄入したる露艦は、旗艦**ツエザレウ井ッチ**、巡洋艦**アスコリッド**及び**ノーウ井ック**、幷に驅逐艦三隻にして、都合六隻の多數なりし。膠州灣を擇びたるは遁竄の初めより、敵艦隊の夙に避難地として私かに期せし所なると、且つ其地八月十日の交戰地に近邇せるを以ての故なるべし。然るに**アスコリッド**及び**ノーウ井ック**の二巡洋艦は、自己の快速を恃みたるとと、獨逸官憲の命令督促とに依りて同灣を去れり。殘るは一戰鬪艦三驅逐艦の四隻なり。抑も戰鬪艦**ツエザレウ井ッチ**は、敵の旗艦丈けありて奮鬪最も力めたる爲め、自ら我艦隊の集彈を蒙るもの多く。艦體と將士とを損ずること極めて多大なり、即ち「マスト」折れ、煙突破れ、艦橋破壞し、水線上の巨孔亦甚だ多し、此を以て外觀憐れなる光景を呈し、內部の損傷亦甚大にして、乘組員は皆急に修理を施すも、到底出港に堪へざるを明言せり。同艦は入港後先づ重傷者を陸上病院に移し、輕傷者は艦內に於て之れを治療せり。當時乘組員の語る所によれば、戰死者十二名、負傷者四十三名なりと、果して此く少數なりしや否や疑ふべし。亦入港後重傷者の死亡したるものも少からず。初め同艦の我視界を離れて遁竄するや、速

力僅に四五浬を以て南航し、十一日午後九時を以て膠州灣に竄入したり。此時灣内には已にノーウ井ック及一驅逐艦の避難するあり。ツエザレウ井ッチは入港後獨逸巡洋艦ヘルタ號近く埠頭に横はり、其の憐なる姿を萬人の目に曝らしたり。同艦は急に修理に着手せんとはせず、數日の間、空しく埠頭に横はり居りたり。然れども、二十四時間内出港の督促若しくは武裝解除の定例は、中立國として是非共斷行せしめざる可らざる責任あり。獨逸國如何に露國に同情を寄すと雖、此中立の條規を無視する事能はず。此を以て膠州灣の獨逸官憲は、先づ一應露艦に出港を要求し、其之を肯んぜざるや、兎も角も同艦の戰鬪に從事するを防がんが爲に大砲の一部を取外し、爾後の處置に關しては本國府政の指揮を待てり。然るに獨逸政府は、ツエザレウ井ッチが一定の時間内に修理を完成する能はざるを認め、又艦に出港の意なきを看取したるに依り、即ち同艦をして武裝を解除せしむるに決し、其の旨を傳達したり。依て同艦は八月十五日朝より武裝解除に着手し、日ならずして之を終へ、戰役の終結まで、膠州灣に抑留せられたり。同じく膠州灣に竄入したる露國驅逐艦三隻は、始め浦鹽斯德に逃走せんことを豫期し、朝鮮沿岸まで進航したるに、突如我巡洋艦の爲に針路を遮斷せられ、加之淺瀬に追込まれ、遂に其目的を達すること能はず、漸く濃霧を利用して虎口を脱し、十三日朝膠州灣に遁入したり。此三隻中、ベスシユムヌイは機關部に損傷を受けたるも、二日間の日子を要すれば修繕を竣ゆるを得べく、他の二隻は格別の損害なし。彈丸は缺乏せしも大砲は完全なり。獨逸官憲は一應各艦に出港を促がしたるも肯んぜず、遂に獨逸本國の訓命により、ツエザレウ井ッチ同樣三艦の武裝を解除し。是を膠州灣に抑留することとなれり。

第三十一章　芝罘竄入の敵艦捕獲

第一節　芝罘竄入のレシテリヌイ

敵の驅逐艦レシテリヌイは、十日の黄海海戰に參加し、同夜味方艦隊の四分五裂に乘じて逃走を企て、辛うじて我が水雷攻擊を免れ、翌十一日午前四時を以て芝罘港に竄入したり。而して同艦の芝罘港に投錨するや、艦長は直に碇泊中の米國軍艦に赴き、其艦長に面會を求めて下の如く言へり。今回本艦が芝罘に來りたるは、アレキセーフ、の妾、及びステッセルの妻子等を避難せしむる爲め旅順を出でたる者なりと。又曰く此使命を終へたる上は直に旅順へ引還へすべしと。時に黄海々戰の報粗々同港に達したるを以て、芝罘道臺は同艦を敗竄軍艦と認め、露國領事に對して二十四時間内にレシテリヌイを退去せしむるか、然らざれば武裝を解除せしむべしと交渉したり。然るに露國領事は言を左右に托して要領

を得ず。一方**レシテリヌイ**の艦長は、日本軍艦の必ず港外に到着して監視嚴重なるを豫想し、恐怖して出港するの色なく、亦た武裝を解除するの模樣もなし。且つ艦長は詭言を弄して曰く、本艦の大砲及銃器は已に破壞して用を爲さず、又彈藥も既に發射し盡したりと。斯くして武裝の儘依然港内に碇泊せり。此を以て我水野領事は芝罘道臺に向つて强硬なる警告を與へ其旨我が政府へも急報せり。清國官憲は水野領事の督勵により、屢々露艦幷に領事に對し、交渉を重ぬると雖、その徵力なる、逡巡して、更に斷乎たる處置に出づべくも見えず、物論漸く起らんとせり。

先是、我海軍中佐藤本秀四郎の指揮せる第一驅逐隊は、朝潮(艦長松永少佐)霞(艦長大島少佐)白雲(艦長狹間少佐)を以て八月十日の海戰に參加し、同日日沒より水雷襲擊の目的を以て、四散せる敵艦艇を搜索巡航し、已に數回の襲擊を敢行したる後、同夜十時頃又復敵艦の西航するを認め、直に襲擊の準備を整へ、疾風の如く追窮し、夜陰の爲め其踪跡を失したり。驅逐隊は尙ほ搜索を續行中、前夜の敵艦が遙に芝罘に遁入したる形迹あるを認む。乃ち港外にありて之を監視したるに、敵艦は港内深く竄入して輙く出港すべき模樣なし。既にして同日午後三時四十分第三艦隊に邂逅し、敵艦は尙ほ武裝を解除せざるのみならず、却つて石炭を積込みたる事實を確むるを得たり。依て驅逐隊司令藤本中佐は朝潮、霞の兩艦に炭水等の補充を爲さしめ、適宜敵艦の處分を爲さんと欲し、同夜八時二十五分芝罘に入港したり。時に暮色蒼然として臻り、碇泊せる諸外國軍艦は明白に鑑別するを得たりと雖、商船及支那「ジャンク」等の間に碇泊したる**レシテリヌイ**は之を認むるを得ず、我驅逐隊は更に港内深く漂泊し、**先づ**原田中主計を我領事館に派し、敵艦の所在及之に關する情報を問はしめたり。午後九時清國軍艦「海折」の一士官來艦し、提督薩鎭永の名刺を出して面會を求め、而して曰く露國驅逐艦は已に武裝解除に着手し、且つ乘員は總て上陸せりと。已にして同「海容」の一士官來艦して右と同樣の事を陳辯す。我は之に對し何等の意見を吐露せず。十時二十分原田中主計は、森海軍中佐、水野領事を伴ひ歸艦し、左の情報を傳へたり。即ち(一)露國驅逐艦は武裝を解除せりと稱するも、大砲は尾栓を脫し發射管は各扉を除くに過ぎず、又機關は主要部を解けりと稱するも其證迹なし。(二)乘組員は其儘乘組み居るが如し。(三)本日英炭六十噸を搭載せり。

藤本司令は乃ち朝潮乘組の中尉寺島宇瑳美をして、更に敵艦の動靜を偵察せしむ。敵艦は燈臺船の側に碇泊し、頗る靜肅なるが如しと雖、甲板には電氣の碇泊燈を點ずるあり、且つ室内よりも燈火漏れ出で確に乘員の存在を認めたり。依て司令は愈々適當の交渉を爲さしむべく、再び寺島中尉に命じ阪本機關兵曹長、清水通譯生、及び下士卒十一名を引率せし

め、十二日午前三時五十分敵艦に赴かしめたり。繇つて敵驅逐艦に於ては、嚮に我驅逐艦の入港したるを知り、艦長ロシチアコフスキーは事の萬一を慮り、大に警戒を加ふると同時に、乘員一同をして救命具其他の浮動物を用意せしめ、各々枕頭に置きて一夜を明かすべく命せり。我寺島中尉の乘艇は敵艦に近けり。彼之を誰何す、我答て曰く『我は日本海軍の軍使なり、貴艦長と面談を要する件ありて來れる者なり』と。彼快く之を迎ふ。寺島中尉及び通譯生は敵艦に移乘せり。彼に先づ敬禮を施し然る後自ら艦長なりと宣言す。我乃ち之に告げて曰く、『一昨十日戰鬪に引續き、我海軍は貴艦を追迹したるに、貴艦は昨日午前四時當港に入れり。故に我海軍は港外にありて監視したるも未だ出港せず。依て今より速に出港するか、又は降伏するか、其一を撰ぶべし。其降伏するに於ては責任を以て生命を保護せん。若し出港もせず、降伏も肯んせざるに於ては、我は斷然適當の手段を執るべし』と。露國艦長は之に答へて曰く『本艦は前夜既に支那官憲によりて武裝を解きたり。蒸汽機關は全く破壞して其用を爲さず。出でゝ戰を交ゆる能はず。現に我等は支那官憲の命令の下に立ちて其保護を受くる非戰鬪員なれば、我は今國際公法上斯くの如き事を迫らるゝの理由なし』云々。依て我は、現に戰鬪繼續中なれば斯かる國際法を適用するの理由なきこと、武裝解除は之を確認するを得ざること、幷に種々得失利害を說き力めて穩便に處置せんとせり然れども彼尙ほ頑として從はず、談判一時間に涉りて要領を得ず、寺島中尉は遂に議論の果てしなきを見て自由の行動に出でんとす。是に於て敵艦の乘員大に周章を極む、我及敵艦長之を制止して靜肅ならしむ。此時寺島中尉は決然として身を起し、率ゐ來れる下士卒十一名を招きて乘艦せしめ自ら武裝檢査に着手せり。

第二節　甲板上の格鬪と捕獲の光景

寺島中尉の決然として身を起すや、敵艦長は非常に狼狽せる者の如く、顏面に苦慮の狀を現はしつゝ、自ら後部發射管及び砲に尾栓なきを示し、又水雷頭部等を示して連りに陳辯する所ありしが、狼狽苦心の度は益々高まり、言語非常に急調となり、殆んど通譯の暇なきに至れり。我は尙ほ精密に各部の檢査を進行す。此の時彼艦長は遂に陳辯の餘地なきを悟りたるにや、寺島中尉に對し突然腕力を以て壓迫し來れり。此一刹那中尉は奮然として部下に格鬪を命じ、且つ敵艦長と甲板上に格鬪し、幾許もなく相組んで海中に墜落したり。中尉は幸にして同艦の舷側にありし我ギグに其足を支へしを以て、直に身を舷側に保ち敵のみ全く水面に落ちたり。此に於て亦復一場の活劇となり。敵艦長は中尉を水中に引入れんとして指を中尉の口中に挾む。中尉之を嚙み切る。中尉はそれより再ひ艦上に登攀し、勇

敢に捕獲動作を進めたり。敵艦長は遊泳しつゝ、執拗にも上艦を企てしが、先きに水中に陷りたる際、右足に重傷を負ひたる爲め遂に果さず。空しく海上に漂流する内、「ジャンク」に泳ぎ付かんとして亦た及ばず。氣力全く衰へて漂流すること約一時間に及び、暗中殆んど溺死せんとしたりしが、偶清國軍艦に發見せられ、幸にして其救助を得たり。

先是敵艦長は、我寺島中尉の斷然として武裝の檢査に着手したるを見、急に部下に對して自爆の命令を傳へ(機關室に準備せる爆藥裝置は我機關部員發見して未發に防ぐを得たり)且つ日本水兵に抵抗を命じたる者の如く、敵の乘員は艦長に倣ひ、我が坂本機關兵曹長、通譯生、其他に攫み付きたり。是に於て甲板上幾組の格鬪は演ぜられ、相擁したるまゝ海上に墜落し、或は溺沒するもありたり。斯くて寺島中尉の再び上艦するや、我は直に軍艦旗を掲揚して捕獲の作業に着手せり。時に午前四時三十三分なり。折りしも我驅逐艦霞より更に十名の兵員應援し來る、寺島中尉は之れを率ゐ、敵を捕へ又は驅逐しつゝ前部に進めり。而して敵の信號書類等を手早く押收すべく部下に命じ、甲板にありては之と同時に錨鎖の切斷を命じたり。此くと聞きたる一等水兵石塚源兵衛は身を挺して前部彈藥庫上部兵員室に降り行けり。折しも前部彈藥庫の邊に當りて轟然たる音響を發し、火炎亦熾に起り、我は多數の死傷者を生じ、先きに衆に先ち艦内に降り行きたる石塚一等水兵は、最も悲慘なる最期を遂げたり。艦橋上にありし寺島中尉は此時跳ね飛され、背部及ひ足部を挫傷せり。時方に四時四十八分なり。海上にありては尚ほ双方の兵員多數漂泳しつゝありたるを以て、我は齊しく之が救助に從事せり。敵は我に救助せらるゝを厭ひたるにや、多く附近の燈臺船「ジャンク」商船等に泳ぎ附き支那軍艦に收容せられたり。恁くて寺島中尉は本隊より更に應援を得て鋭意火災の消燼に努め、又應急修理を施して沈沒を防き、手續全く了りたる後敵艦を捕獲せり。時方に五時十分。天漸く黎明に近く、四顧の展望鮮かなり。捕獲艦頭高く旭旗を掲げ、朝潮之を曳きて、港外に出でたり。

右戰鬪中、我は總員二十一名中、十餘名の死傷者を出したりと云ふ、亦以て如何に我將士が奮戰健鬪したるかを知るに足るべし。我死傷者は左の如し

朝潮乘員

輕傷者	中尉 寺島宇瑳美	輕傷者	一等水兵 田村 峰吉
輕傷者	機關兵曹長 阪本 常次	重傷者	一等水兵 山田 熊吉
輕傷者	二等機關兵曹 谷田市次郎	重傷者	二等機關兵 堀部 保吉
輕傷者	二等機關兵曹 廣澤 靈澄	輕傷者	一等水兵 石塚源兵衛
輕傷者	三等兵曹 淺川末次郎	輕傷者	一等水兵 山崎 勇一
輕傷者	霞乘員	輕傷者	一等水兵 江藤 幸吉
輕傷者	一等機關兵 永友 新八	輕傷者	一等機關兵 嶺村元三郎
輕傷者	一等機關兵 永川松右衛門	輕傷者	一等機關兵 馬場 次吉
輕傷者	一等機關兵 川畑 爲助	戰死者	一等機關兵

第三節　捕獲事件と國際問題

レシテリヌイ號捕獲の顚末は右の如し。然るに本件に關しては端なく天下の物論を惹起し、露國政府は我國の處置を以て清國の中立を破りたりとなし、在日本佛國公使に依りて帝國政府に抗議せんと擬し、一般局外國及び我が同盟國すら、一時帝國の處置に對して多少の非難を挾むに至れり。然れども是れ畢竟事の眞相を知らざるの過にして、當時の事情は我にして捕獲權を行ふの已むを得ざるに至らしめたり。我政府は列國の異論漸く囂しからんとするや、一片の辯明書を公表して、我艦隊の處置決して不法にあらざるを辯じたり。此辯明によりて眞相判明し、列國は皆帝國の處置を諒認し、露國の抗議も何時か消へ失せたり。蓋し其辯明書を一瞥せんか、一切の事情自ら判明する者あり。依て左に全文を掲ぐ。

日露戰爭に於ける清國の地位は全然異例に屬す、各般の戰鬪行爲は殆んど擧げて清國の境域內に行はれつゝあり、清國は戰爭の當事者に非ず、而も境土の一部は交戰地にして、一部は中立地たり、此種の事態たる國際法上より云へば、一の變体にして理に於て矛盾せる者なるも、現下の場合に於ては、全く兩交戰國が同意を與へたる一の特別協定に依り創造せられたるものなりとす。帝國政府は清國の外交通商並に一般靜謐の爲め、交戰區域を局限するの趣意を以て、露國に於ても同一の約束を爲し、且つ之を誠實に履行するに於ては、現に戰爭に關係ある地方以外に於て、清國の中立を尊重せん事を約束せり。帝國政府は以爲らく、右の約束は帝國をして、自ら戰場たる地域以外の清國の土地、又は港灣を占領し、若しくは之を何等戰爭上の目的に使用するを得ざらしむるものなり。何となれば帝國にして一たび其擧に出でんか、帝國の占領し、若しくは使用したる地點は、當然中立地より交戰地に化すべきを以てなり。之れと均しく露軍にして、中立なる清國の土地、又は港灣を占領し、若しくは戰爭の目的に使用するに於ては、帝國政府約束の附帶條件は爲めに其効果を生じ、帝國をして右の土地、又は港灣を以て交戰地と見做さしむるを得べしと。之を概するに帝國政府の所見を以てすれば、清國の中立は完全なるものにあらずして、單に交戰國孰れかの兵力により占領せられざる地點に適用せらるゝに過ぎず、隨て露軍は合意にあり條件位中附とせられたる清國の領域內に其陸軍、又は海軍を移動し以て敗戰の禍害を免るゝを得ざるなり。今夫れ**レシーテリヌイ**は旅順を逸出し、芝罘港內に於て其既に自國の港灣に於て得べからざる避難所を求め、以て我攻擊を免れんとしたるものなり、是即ち交戰國双方の合意に依り、定められたる清國の中立を破りたるものにして、帝國が芝罘港を以て此事件の關する限り、交戰地と看做したるは固より其の所なりとす。而して此事件の終結と共に芝罘の中立は爰に復活したるものなり、夫れ然り芝罘に於て、日本の採りたる措置は、露國が其約束を無視したるより生ぜる直接、且つ當然の結果なりとす。然りと雖露國が清國の中立に對し、重大の傷害を加へ、以て自家の約言を無視したるは單に此事件に於てのみに非ず、又た芝罘のみに限らざるなり、旅順の包圍に陷りて孤立するや、幾もなく露國は同地の要塞と、芝罘に於ける自國領事館との間に無線電信を開始し。而して此通信機關は帝國政府累次の抗議にも拘はらず、依然運用を存續し居れり。又上海に於ては、開戰の當初露國砲艦マンジュールは清國の中立を無視して、清國官憲より出港の豫告を受けたる後、數週の久しき港內に碇泊し、曠日彌久幾回かの談判を重ねたる後、漸く其武裝解除を承諾したり。今又巡洋艦**アスコリッド**及び驅逐艦**クロゾウオイ**は上海に碇泊する事既に週日を超へ、然かも依然として出港又は武裝解除を肯ぜざるに非ずや。清國の中立は、露國に於て之を尊重する限り、帝國政府に於ても是れを無視するの意更に之なしと雖、露國軍艦が露國の與へたる約束を破り、清國の中立を侵害し、清國の港灣に避難して、以て捕獲、又は破壞を免かるゝを得べしとは、帝國政府の容諾し能はざる所なり。**レシーテリヌイ**艦長は、芝罘到着後該艦の武裝を解きたりと云へり、然れども是れ事實に反す。本月十二日の拂曉、寺島中尉が該艦に臨みたるとき、該艦は十分に武裝し、且つ全兵員を搭載し居りたるなり、且つ夫れ武裝解除は、未だ以て清國中立規則の所要に應ずるに足らず。況んや出港に代ゆるに武裝解除を以てし得べきや否やを決すべき者は清國にして露國にあらざるをや、世上動もすれば、今回の事件を以て**フロリダ**號事件と同視するものあり、然れども帝國政府は兩者の間截然たるの區別存するあるを見る。**フロリダ**事件に於ては、伯利西爾國の中立は完全、且つ無條件にして、パタビヤ港は戰場より遠く相離れたり。然るに今回の場合に於ては、清國の中立は不完全にして、條件附なるのみならず、芝罘港は戰場と近く指顧の間にあり、**レシーテリヌイ**は先づ自ら手を下して、抗敵行爲を開始し、其結果捕獲せられたる者なることは、芝罘事件に干與したる日露兩國士官の報告の共に一致する所なり。此事實たる帝國政府の見る所を以

てするに、捕獲の合法なるや否に關し、他に疑を容るべき餘地ありし場合に於て、露國の或は有したるべき異議の根據にして消滅せしむるものなりとす、此點に於て今回の事件は、米國捕獲船艦ゼ子ラル、アームストロング號事件、及英船アンヌ號事件と酷似すと云ふべし。抑々レシテリヌイ事件は、其自身に於て細事に過ぎずと雖、主義の繫る所は極めて重大に屬す、清國が自家の中立規則を勵行するに適當の措置を採る事なかるべきは實驗の示す所たり、是等の事情に於てレシテリヌイ號にして、芝罘を以て避難港と爲すを得べしとせば露國海軍の巨艦も又是れが擊に倣ふべく、而して何物か能く之等の軍艦が日本を攻擊せんが爲に復たび脫出するを防遏し得んや。商船の事變に對し、豫防の措置を講ずるの必要は又是れ至大にして、固よりレシテリヌイをして之が俑を作らしむるを允さざるなり。是れを要するに今回の事件たる亳も清國の外國貿易を阻礙し、又は該國に於ける一般の事態を亂すものに非ず、其結果は偶々以て露國に示すに將來自淸の約束を遵守せざる可らざるを以てするに効あるべきなり。

第三十二章　浦鹽艦隊の擊滅

第一節　對馬海峽の警備

玄海に殘虐を敢てし、津輕海峽に兇暴を逞し、更に太平洋上に我國及び諸外國の船舶を擊沈し、隱顯出沒、而も我艦隊の追擊を脫れ、逸して浦鹽に遁逃せる、世人の謂ゆる蠻行艦隊は、尙且つ對馬海峽を通過し、而して旅順艦隊と連絡を通ぜんと欲し、日夜焦心苦慮して、此の無謀を企圖せしものゝ如し。然れども我旅順攻圍軍の背面攻擊は、着々として進捗し、將に彼等の頭上に最後の大鐵槌は下らんとす、若夫れ我陸海兩面の攻圍及び封鎖にして成熟の時機に達せんか、彼のクロパトキン將軍の旅順救援策の如き、單に一場の放言に過ぎざらんとす、是れ嗤笑を世界に買ふのみに止まらず、祖國の運命も亦知るべきのみ。宜なる哉、敵の陸海兩軍は漸くにして茲に活動を始めたり、乃ち之を海にしては八月十日の旅順脫出、乃ち黃海の大海戰となり、之を陸にしては、八月末より九月初頭に於てせられたる遼陽の大會戰となれり、而して浦鹽艦隊が、茲に活動を始めしも、抑又偶然たらざりしなり、然るに我第二艦隊の將士は、頃來幾度か海上濛氣の障礙を蒙り、先に敵艦の遁逃を逸してより怨恨鬱結且つ憂悶殘懷の情に堪へず、殊に輕浮なる世論は、誤て惡罵嘲笑を妄りにし、亳も第二艦隊將士の心情を掬ざるあり、茲に於てか速に彼艦隊を擊碎し以て後顧の憂を除き、特に戰局の發展を期すると同時に、世論の誣妄を戒飾すべく絕大の技能を發揮せざる可らず、然れども時運未だ到り難く、戰機尙熟せざりしを以て、空く脾肉の嘆と嘲罵の聲とに悶々の時日を送りき。而して我第二艦隊は我東海の海面に敵艦の搜索を試み、遂に得るところなかりしを以て、恨を呑みつゝ根據地に飯着せしは、實に八月四日の事なりとす、爾來連日對馬海峽の近海を警戒して、一に敵艦隊の北上南下に備へたり、果せる哉、我嚴密且つ奇謀なる封鎖線を破りて旅順港を脫出し、黃海圓島の附近に於て、我聯合艦隊の爲に大打擊を蒙り、四分五裂して或は港內に或は各方面に逃竄したる敵艦は、必ずや浦鹽艦隊に合

せんことを欲すべく、浦鹽艦隊亦進で之を迎ふるなるべしとの推定は洵に自然の結論なるべし、是を以て上村第二艦隊司令長官は、特に配意して警備更に嚴なるものありき、尋で八月十一日午前十時四十分、乃ち行動を開始すべく根據地を發しぬ、而して此警備の重任に膺れる第二艦隊の司令長官以下艦艇長は左の如し。

第二艦隊司令長官　中將　上村彦之亟
第二戰隊司令官　少將　三須宗太郎
　參謀　中佐　佐藤鐵太郎
　副官　少佐　舟越楫四郎
吾妻艦長　大佐　藤井較一
磐手艦長　大佐　武富邦鼎
高千穗艦長　大佐　毛利一兵衛
對馬艦長　中佐　仙頭武央
第九艇隊司令兼蒼鷹艇長中佐矢島純吉
雁艇長　大尉　坂本重國
燕艇長　大尉　庄野義雄

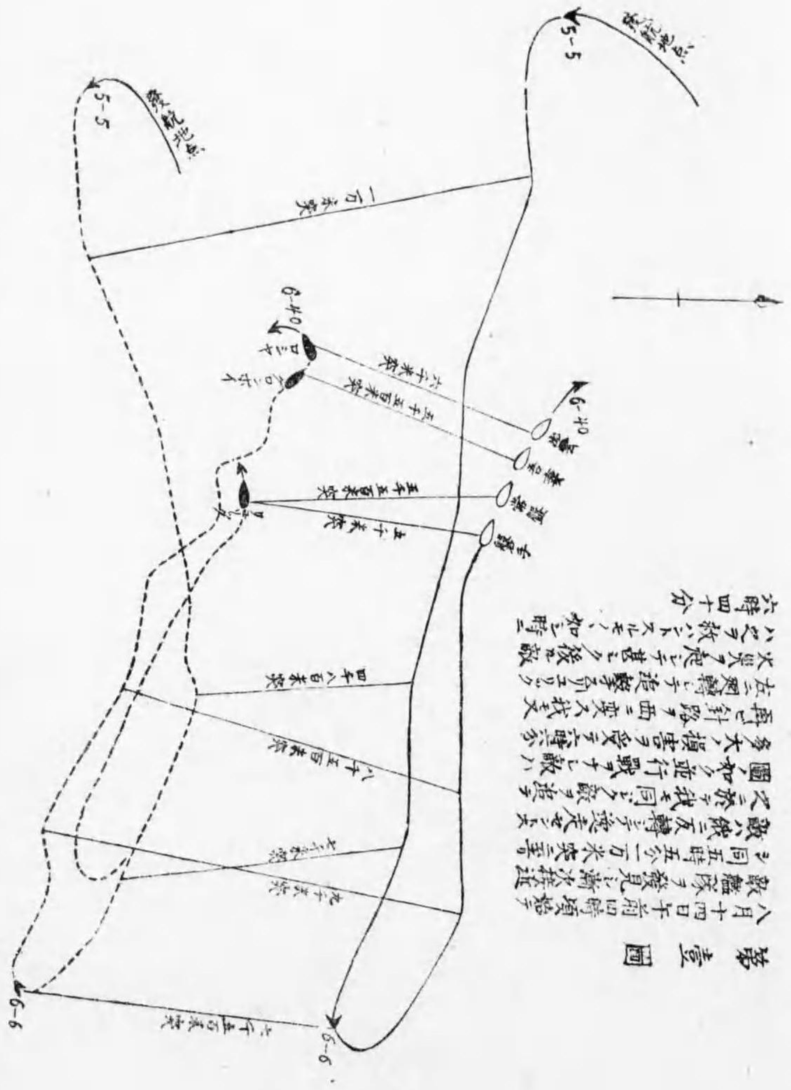
第四戰隊司令官　少將　瓜生外吉
　參謀長　大佐　加藤友三郎
　機關長　大監　山崎鶴之助
出雲艦長　大佐　伊知地季珍
常盤艦長　大佐　吉松茂太郎
浪速艦長　大佐　和田賢助
新高艦長　中佐　莊司義基
千早艦長　中佐　福井正義
第十五艇隊司令兼雉艇長中佐笠間直
鴿艇長　大尉　原田松次郎
雲雀艇長　大尉　島内桓太
鷺艇長　大尉　森駿藏
鶴艇長　大尉　藤原英三郎

上村第二艦隊司令長官は旗艦出雲に坐乘し、三須第二戰隊司令官は磐手に在り、通報艦千早を率ゐて出動し、浦鹽艦隊が、必ず妄動を開始するに至るべきを推想し、各員の警戒を促し八方に目を配りて索敵運動に努めつゝ蔚山沖を航行し、軈て十四日午前一時三十分、北緯三十五度三十八分、東經百三十度九分の位置なる海上に於て、針路を南三十五度半西に變じて進行す、斯くて午前四時二十五分我艦隊は蔚山の南方沖合、約二十海里の地點に達したる頃、右舷「バウ」に當りて、海上遙かに三個の燈光を認む、之れ或は浦鹽艦隊の出動して來れるにはあらずやとの疑問起りしが、燈火は又忽然として消へ失せぬ、衆怪むこと益々甚だし、因て速力を早めて其方面に進めり。かくて四時五十分、愈々敵艦三隻**ロシヤ、グロムボイ、リユーリック**は、例の單縱陣を作りて南航するを發見せり、『敵艦見ゆ、氣を付け』の令は旗艦出雲より各艦に傳へらる、此時に當り南方對馬海峽方面には、瓜生司令官、旗艦浪速に坐乘して、麾下の三艦を率ひ、水雷艇隊と共に警備の任にあり、是を以て、上村中將は各艦に命じて十分の警戒を加へつゝ、此度は必ず敵を逸走せしめざらんことを注意し、尙敵艦に接近すべく、速力十七海里を以て進航せしむ。されば我艦の將卒は百年欝結の仇敵に邂逅したるにも同じく、『敵艦見ゆ』との信號を得たる時は、一種無限の感慨に打たれ、遙に白まむと

する東天を拜して、大元帥陛下の御稜威の赫々たると、列聖遺烈の崇高なるを感謝し奉り、蠻行艦隊を擊滅し、無涯の君恩に酬ひんは、正に此時にありと、何れも雀躍して、戰鬪開始を翹望せり、

第二節　蔚山沖の大海戰（其二）

時に午前五時五分、旗艦出雲の檣頭には戰鬪旗勇ましく飜れり。各艦皆之に效ひ、出雲を先頭に吾妻、常盤之に續き、磐手を殿艦として進む。此時敵艦は對馬海峽方面より浪速の進航を見たるもの丶如く、直に取舵に轉進して例の如く、東北方に向ひ遁走せんとす。是に於て、我艦隊は直に針路を東南東に定め、敵の前路を扼せんとし、午前五時二十分の頃、彼我の距離約一万米突に接近す。既にして午前五時廿三分、漸く彈着射界内に入れり、旗艦出雲は『打方始め』を令すると同時に各艦齊しく八吋備砲の砲擊を始めたり。更に近づいて敵の殿艦**リユーリツク**號と我が先頭艦と相距る約八千四百米突に及び、六吋砲を發射す。敵艦亦たこれに應戰し、茲に劇烈なる大砲戰は開始せられたり。此戰や我艦隊は屢々「イ」字形の陣形を畫きて、敵の先頭艦を壓し、最も能く集彈するの利を得たり。抑も敵に先頭を壓せられて、イ字陣形を作りし時は、敵の集彈を受くるの不利なると共に後續の各艦は先頭艦に遮ぎら



第壹圖

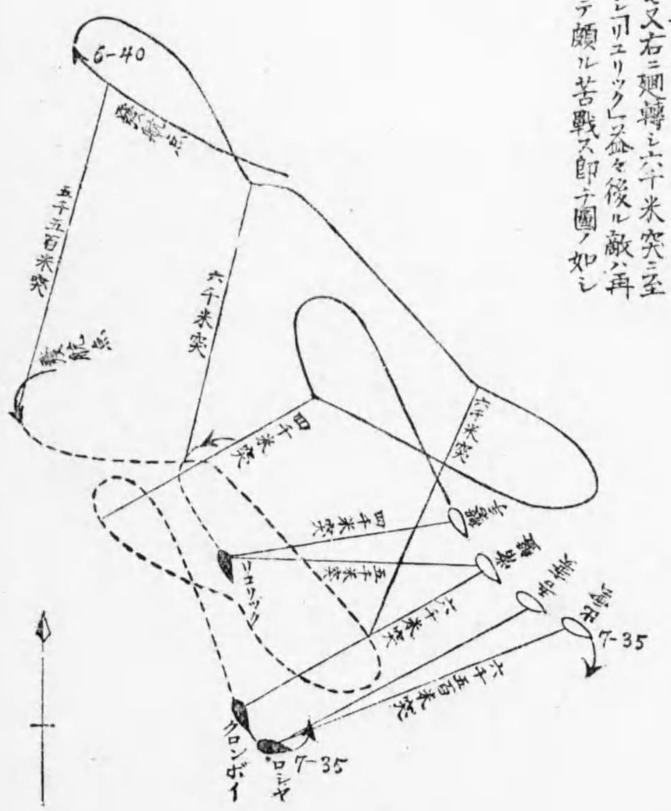
八月十四日午前四時廿分頃始まり次第に敵艦隊に近接し同五時五分二万米突を距て初めて敵の殿艦リユーリツクに發射す敵は我に對し左舷を向け我は敵の前路を扼せんとし針路を東南東に定め敵の先頭艦を壓し我は敵の後尾を追擊す

六時四十分

れて、意の如く發砲する能はず。其不利思ふべし。我艦隊は斯の如く最も有利なる陣形を取りたるが上に、背後には朝暾一竿鮮麗なる光輝を帶びて登る、敵艦隊は正面の旭光に眼も眩むが如き、不利の地位に立ちぬ、漸くにして七千八百米突の距離を保ち、砲擊頗る熾に、轟々殷々たる音響乘員の双耳殆ど聾せんとす。今や明け渡れる天空は、漠々たる砲烟に包まれ、其光景實に壯觀を極む。敵彈の時に命中するものあるも、多く爆發するに至らず。然るに我砲彈の猛烈なる敵の各艦に大損害を與へ、砲擊僅かに十分時なるに、一番艦**ロシヤ**の要部に命中するもの二彈、二番艦**グロムボイ**の左舷に命中爆發する數彈、殿艦**リユーリック**は常に他の二艦に後れつゝありしが、五時三十三分彼我の距離七千八百米突を保ちて我艦は針路を東微南に變じ、敵と殆ど並航し砲擊頗る猛烈を極む。是に於て敵艦は少く面舵に取りて逃走せんとす。我が艦益々迫りて後れたる殿艦**リユーリック**に集彈す。彈着頗る正確、爲に**リユーリック**の後檣に命中したる巨彈は「トップマスト」を切斷せり。我將卒意氣益振ひ、次第に急射猛擊を加ふ。我巨彈は又敵の旗艦**ロシヤ**に命中爆發し、黑煙濛々の中に大火災を起せり。次で**リユーリック**亦火災に罹り敵は頗る狼狽して苦戰の狀に陷れり。斯くて我艦隊の砲擊愈々急にして、六千七百米突に進む、時に敵の砲火稍々衰ふ。我彈着の正確は益々敵を窘め、五時四十分頃、又復敵の旗艦前部甲板に火災を起したり。既にして距離漸次に接近し六千二百米突に至り、砲火更に激甚を極め、艦内の傳令すら之を爲すに苦む。隨て我砲彈の命中するもの益々其の數を加ふ。此時艦首の方向遙に一條の煙を見る之れ第四戰隊の一艦なりしを以て、士氣彌よ振ふ。斯くて日の御神の末裔なる神州健兒が不倶戴天の仇敵なる露艦を擊碎するに際し、昇る旭日を背後に負いて奮戰す。眞に是れ絶好の活畫なり、而して彼我の距離約六千米突に接近するや、我一彈又もや、敵旗艦**ロシヤ**の烟突を破壞し、二番艦**グロムボイ**は大火災を起せり。更に五千米突に進むや、右舷水雷は發射の用意をなす、十二斤の砲火は開かる、五時五十五分、敵は面舵に取り漸次相遠ざからんとするものゝ如し、我れも亦た少しく面舵に轉針して砲擊を連續す。既に疲れ果てたる**リユーリック**は又復火災を起し黑煙全艦を包めり。敵艦は益々面舵に遁げ去らんとするを以て、我艦隊は取り殘されたる殿艦**リユーリック**を一齊に砲擊したるが、此の時敵は益々面舵に開きて、彼我の距離漸次に遠ざかり、七千三百米突を隔つ、是に於て我艦隊は右八點の齊動横陣を取りて之を逐はんとせしも、六時六分、敵は右十六點の正面變換をなせしを以て、我艦隊も左十六點の正面變換をなし、右舷の砲門を鎖して、左舷砲に就かしむ。此時敵は右に廻轉し、我は左に回轉せし故、彼我の距離非常に遠隔し、八千五百米突より九千米突に及ぶ故に彈着の効果を慮りて我艦隊は緩徐に砲擊したるに、敵の砲火は頗る猛烈を極めたり。斯くて又漸や

第二圖

第一圖ニ示シタル如ク敵前ユリックヲ救ハント反轉シ來ル我モ又右ニ廻轉シ六千米突ニ至テ砲戰最モ激シ前ユリックヲ從ヒ後ル敵ハ再三之ヲ救ハントシテ頗ル苦戰ス即チ圖ノ如シ



く近づき六時三十分頃、八千六百米突に及ぶ、敵の殿艦**リユーリック**の破損甚だしく、恰も舵機破壞せられたるが如く、遂に列外に去れり、尋いで敵艦は**リユーリック**の續航を待ち、頻りに舵機を繁轉し、舵行運動を爲して進む、我艦次第に迫り、面舵五度に取りて距離六千五百米突に及び、砲擊又復盛なり、敵艦**ロシヤ**はまたも火災を起して黑煙の中に隱る、**リユーリック**は次第に他の二艦に後るゝを以て、我砲彈は當然同艦に集中す、時に六時四十分**ロシヤ**は火災に惱みて砲火を避けんと努め、**リユーリック**の刻一刻、悲運に沈まんとするを見たる**グロムボイ**は、獨り取舵に回りて僚艦**リユーリック**を救はんとして引返せり、此形勢を察知したる我艦隊は、直に右十六點の正面變換を爲し、右舷砲を以て七千四百米突の距離より、**リユーリック**に猛擊を加ふ、此時午前六時五十分、**リユーリック**は殆ど航行を停止するに至り、破損殊に甚だし、是に於て六時五十五分、僚艦の運命愈々窮したるを見て、一番艦**ロシヤ**は、面舵に取り、**リユーリック**の傍に引還し來れり、此時恰も彼我陣形丁字形を作り、敵の三艦相重なり、**リユーリック**は我砲火に露出せられ、其距離五千六百米突なり、我艦隊の砲彈は、敵の三艦に集中し、着彈正確我八吋巨彈は、**リユーリック**の前部艦橋に命中爆發して之を破壞す、時に午前七時なりき、斯くて二艦は**リユーリック**を捨て、右十六點に回轉して走る、我亦反轉し、尋いで左舷砲を開けり、斯くて敵艦**リユーリック**は全く停止せるが如く毫も動かず、既に

して我砲彈はリユーリックの中央要部に命中爆發して火災を起し、續いて前部甲板に又々火災起る、此時我彈丸益々雨注せしにより、リユーリックは殆ど沈默するに至りぬ。

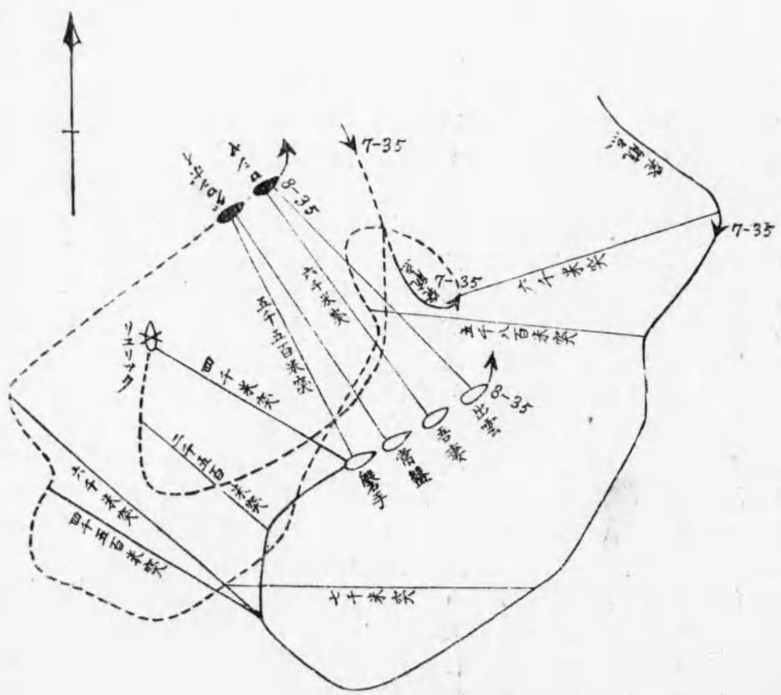
第三節　蔚山沖の大海戰（其二）

敵の殿艦リユーリックは、幾度か僚艦二隻の援護救助を煩はせしも、破損甚だしく、既に艦部の沈下せんとするに至り、指揮の高級將校殆ど戰死し、砲彈も亦た盡き、到底僚艦と共に敏速輕快なる運動を爲す能はざるを以て、遂に沈默停止するに至れり。是に於てロシヤ、グロムボイの二艦は尙も僚艦リユーリックの危急を救はんとし、七時十五分、又復勇氣を鼓して面舵に取り、リユーリックに近き、彼我の距離益々接近して、四千六百米突に薄る、此時我砲彈の命中爆發するもの多く、殊にロシヤは火災を起し、猛焔甲板に燃へ、苦戰の狀を極めたり。是に於て、敵は又面舵に取り、反轉して逃げ延びんとし、距離漸やく遠かり、六千三百米突となりしも、我艦隊は愈々追ふて五千五百米突に近づき、猛射を加へたるが敵の二艦は破損著しく稍々速力を減じたる如かりしに、又更に取舵に回りて、執念くもリユーリックを助けんとするものゝ如し、七時三十分、殆ど停止したるリユーリックは、茲に再び運動を始め、後れながら他の二艦に尾して進む、此時第四戰隊を南々東に認む、敵艦隊の狼狽甚だしく、ロシヤ、グロムボイの二艦は北々西に進航すれども、リユーリックは太だしく後れ、我一番艦出雲との間隔五千五百米突に迫る、是に於て同艦に雨注する砲彈は前部烟突の附近に爆發して、盛なる火災を起せり、然るに敵の一番艦ロシヤは、既に遠く離れて八千五百米突にあり、南西½南に針路を轉じて益々追擊す。此時敵艦又々リユーリックの苦難を救んとして接近し來り、次第に近づき五千五百米突となる、時に七時五十分、ロシヤ號の左舷水線部に發火せるを認めたり。斯くて敵艦は取舵に回りて又も敗走せんとす、此時二番艦グロムボイに集彈頗る多し、我も亦た面舵五度にて之に逼る、敵は針路を北々東に取り、全くリユーリックの救援を斷念して逃走するもの丶如し然るにリユーリックは又復火災を起し、遂に進退の自由を失ひ、時々緩漫なる發射を爲すのみにして、其艦尾は著しく沈み、且つ少しく左舷に傾斜するを見たりしかば、上村司令長官は遙か南方より來れる第四戰隊の二艦に之を委し、敵の二艦を追擊すべく北微東に變針し、敵の一番艦と相距る七千米突の頃、敵の砲火漸く衰ふ、我は益々近づき六千米突に進みて猛射を注ぐ、此時我は取舵に回り、敵は面舵に取り、互に回轉して砲火を交換す、然れども敵は最早戰ふを好まざるもの丶如く、次第に北東に走る、既にしてロシヤ號は、中央部に大火災を起し、尋いで最後部の煙突を破壞し、又我巨彈全艦の前部艦橋下に爆裂す、時に午前八時四十五分、此時我第四戰隊瓜生司令官は、浪速

高千穂の二艦を率ゐ來り、氣息奄々たる、**リユーリック**に向ひ砲擊を開始せり、此の時敵の二艦は益々此方に逃げつゝ緩徐なる砲火を送れり、上村司令長官は『是より大事なり、各艦精確に指示射擊、一艦を剩す勿れ』と令し、皷舞策勵して追擊せしむ、彼我の距離大抵七千米突內外を以て並航し行く々々之を砲擊す、敵も亦た劣らず能く應戰し、命中彈少からず、既にして九時三十八分、我第二番艦吾妻は左舷機に故障を生じ、列外に出で、曩に故障の爲め、後れたりし常盤は、猛然として追及し二番艦となる、吾妻、磐手は少しく後る、斯くて我先頭艦出雲は、敵の二番艦**グロムボイ**を相距る五千三四百米突となり、爰に又復猛烈なる砲擊を爲す、彈着益々確實にして敵の苦戰甚だし、尋いで吾妻列に入りて三番艦となる、我軍勢益々振ふ、時に九時五十三分、我二彈敵の一番艦に命中す、敵彈亦來りて旗艦出雲の第二瀛艇「アクタルダビット」の下に命中して、三番分隊の傳令二名を殪せり。此時恰も敵の二番艦は大火災に罹れり、而も敵は巧に防火に努め、應戰しつゝ益々北走す、午前十時最後の砲火として、各艦六吋砲及八吋砲、各數發を發射せしめ、敵の一番艦**ロシヤ**に命中三發を認め、茲に『面舵、打方止め、戰鬪中止』の令は下れり、尋いで針路を反轉して、遙に後方に殘したる、**リユーリック**の位置に歸れり、斯の如くにして敵艦二隻は、全く敗走して浦鹽に歸航するを得たるも其の損害の著大なる、到底戰鬪力を回復することを得ざりしと云ふ我各艦も亦た多少

第三圖

七時三十五分ヨリ八三時十五分ノ間六千米突ヨリ七千米突ノ間ニ盛ニ砲戰シツヽ敵ヲ逐ヒ敵ハ「リユリツク」ヲ全ク捨テ北方ニ遁走テ始メタリ全圖ヲ參照ス可シ



の損害を受けたりと雖、毫も戰鬪航海に支障なし。此戰や五時間の長に亙り、砲身爲に熱し、砲手双耳を聾し、幾度か砲彈の窮乏を見るに至れり。斯る大激戰は多く戰史に其例を見ざる所なりと云ふ。

第四節　リューリックの轟沈

我本隊は敵の三艦と交戰約三時間の後、恰も好し第四戰隊の高千穗、浪速の進み來れるを以て、上村第二艦隊司令長官は、リューリックの處分を瓜生第四艦隊司令官に委し、本隊を率ゐ、遁走敵艦を追躡して北航す。此に於て午前八時四十五分、瓜生司令官は、浪速、高千穗の二艦を以て、直にリューリックの攻擊を開始す。然るに同艦は先に我本隊より大打擊を被り、將に沈沒に亟んとせるにも拘らず、前面に現れたる我二艦の威力微弱なるを侮り、俄に勇氣を回復し、十二海里の速力を以て進航を起し、極力應戰したるは健氣なる振舞なり。然れども前に被れる損害著大にして、到底我二艦に及ぶ可くもあらず。されど我二艦は愼重の態度を執りて、次第に接近し、四千米突内外の距離に於て、猛烈なる砲擊を爲せり。我彈着最も正確一々命中爆發す。延て火藥庫を爆發し、艦部に大孔穴を生じ、浸水甚だし。十時三十分、敵の砲火は全く止みたりしが、同時に艦體後部より次第に沈沒し始めたり。敵は最早其支ふべからざるを知り、自から「キングストン」を開きて沈沒を早め、艦員の海中に飛び込む者續々たり。既にして艦部の水中に沒入するや、艦身は急に逆立し、驚くべき勢を以て水底に沒したり。時に午前十時四十二分なりき。其沈沒の場所は韓國蔚山と、長州角との間より少しく北方に位し陸地より約四十五海里の地點にあり。幾多無辜の船舶を擊沈し、掠奪を擅にしたるリューリックは、今や日本海底の藻屑となれり。其末路實に憐むべしと雖も、彼が奪鬪勇戰して、充分に其任務を盡し、特に最後の瞬間に至るまで、應砲を絶たざりしは、歎稱に餘りありと云ふべし。是に於て我第四戰隊は直に海上に漂へる敵兵の救助に着手したり。

第五節　敵兵六百の救助

リューリックの處分に任じたる浪速、高千穗の兩艦は、敵艦の全く沈沒したる後、直に溺者救助に着手し、多數の救助艇を出して、之に從事したり。折柄追擊より歸來せし上村第二艦隊司令長官は、直に信號して曰く『既に戰鬪力を失ひたる敵兵は力の限り之れを救助せよ、苟も私怨を懷きて接する勿れ』と、各艦の將卒皆其旨を體して從事す。新高、對馬、千早及び水雷艇隊も亦來り會し、共に救助に努力したり。此時附近一帶の海面は木片、ハンモック等幾多の物品に掩はれ、數多の敵兵は是れに取縋り、波間に浮沈しつゝ漂へり。我が救助艇を望むや

直に泳ぎ來りて助けられ、或は悲鳴を揚げて逃げんとするあり、或は手を合せて哀を乞ふきへあり、我艦隊は極力彼等を救上げたり。其數六百二十四名、負傷半を超ゆ。如何に彼等が苦戰健闘せしかを想察するに足る。之を各艦に分乘せしめ、負傷者には應急手當を施し、且つ衣類及び牛肉、粥、パン等を給與したるにぞ何れも任俠、仁慈なるに感激し、感極つて涕泣するに到れり。斯くて彼等は六百餘名の多數戰友の救助せられ居るを聞き、初めは信せざりしほどなりしと云ふ。敵が曩に玄海洋上に、我常陸丸、和泉丸等の乘員を虐殺したるに比し、我軍の仁義深きに感せしは寧ろ至當の事と云ふべし。斯くて十五日午後各艦は捕虜を搭載して佐世保港に凱旋したり。

第六節　彼我の損害

捕虜の言に依れば、敵の三艦中リューリック號最も早く破損し、殊に艦長は開戰の初期に於て腿部を射られて先づ仆れ、副長次で死す。其他高級士官悉く死傷し、捕虜將校大尉以下二三名に過ぎず、乘員總計八百七十二名の内二百五十餘名は戰死し、他は悉く捕虜となる。尚ほ捕虜負傷の模樣を見るに、上甲板に居りしものに少く、下甲板に在りし者に多し、就中機關兵最も多く傷きたるに依れば我砲彈は多く機關部に向て發射せられたるを知る。他の二艦も大なる損害を被りたるが、中にも兩艦の屢々起したる火災は、非常なる苦痛にして、兩艦とも裝甲部以外の個所に無數の彈痕を印し、孔口六尺四方大に及ふもの幾多を數ふ、特にロシヤ號は、前艦橋を微塵に破壞せられ、内部諸機關も大なる損害を受けたりと云ふ。今敵帥の報告を引證して、如何に其三艦が苦戰奮闘したりしかを説明し、併せて其損害の程度如何を見んと欲す。敵の司令長官海軍少將エッセンが、アレキセーフ總督の執奏を經て露帝に致したる報告に曰く

『八月一日曉天、ロシヤ、グロムボイ、リューリックは釜山を距る四十二浬對馬の北燈臺を距る三十浬の處に到着したるに、西方に當つて裝甲巡洋艦より成る、日本艦隊の北方六里の處に、我と同針路を執て航走し來るを認めたり、同艦隊は新式の裝甲巡洋艦四隻より成り、全速力を以て滬走せり、本職（エッセン）は外洋に出る目的を以て、北方に針路を取りしが、敵は速度我に優るを以て、直に回轉して同一針路を遮りたり、此に於て本職は戰を交ゆるの止むを得ざるに至り、而して會戰は午前五時を以て開始し、彼我艦隊の距離は六千「ケーブル」（一「ケーブル」は約五十「ヤード」なり）なりき。此時朝鮮海峽の方に、浪速型の二等巡洋艦一隻の敵に參加するを認めたり、我諸艦は朝鮮海峽に接近し往かん目的を以て、機を見て急に右方の艦首を轉じ、速度を增加して十七節と爲し、略々我目的を達せんとせしも敵は此時我意圖を察し、急に我方に向て航進し來り、我意圖を妨碍せんとす、斯くて僅に五分時を出でずして、リューリックは隊列を脱し、其操舵機を破壞したるを信號せり、本職は標圖を以て推進せよと答信して、前針路を續進せしが、日本の各巡洋艦は、皆リューリックに向て砲火を集中したり、本職は之を見て、リューリックをして、間を得て其破損舵機を修理せしむる唯一の目的を以て運動を行ひ、而して本職は、リューリックを掩護せんがために、自ら進んで敵火を誘致せり。（エッセンはロシヤに坐乘）本職は此時三等巡洋艦一隻の來りて敵に參加するを認めしが、リューリックはは推進する能はず」と信號したり、正面線に於ける我諸艦の運動は、リューリックをして朝鮮灣方面に航進するの機會を得せしめたるが、八時本職は「東航せよ」との信號を揚げたり、リューリックは此信號

に應じ、所要針路を進めり、其艦首より波を破りて進む樣は、全速力を以て航進するものと想はれたり、結局ロシヤ及びグロムボイは四十二「ケーブル」の距離を以て、北方に針路を取り、リユーリックは、三浬の距離に在て、略々東南方に針路を取れり、斯くして戰鬪は二時間に渉り、我諸艦は大損害を受け、ロシヤは三本の煙突に砲彈を射貫せられ、十分の瀛力を出すこと能はざるに至り、又其瀛罐二箇も全く用ゆべからざるに至れり、九時三十分に至り、リユーリックは徐行して著しく後れ、重れて海岸方面に艦首を轉じたるが、尙敵艦隊に加はり來りたる、二等巡洋艦二隻と交戰し、幾干ならずして我視界より脫するに至れり、上村中將は裝甲巡洋艦四隻を以て、確實に我が二艦を制壓して交戰し、我をしてリユーリックを援助する能はざらしめたり、我二艦はリユーリックが交戰を繼續せる中、又交戰を繼續して、成べく敵を北方に誘致し、以てリユーリックをして其比較的弱勢なる二敵艦を處分せしめ、且つ其損處を修理して、獨力浦鹽斯德に到達せしめんことを希望したり、十時少しく前、敵砲火は、此會戰中最も猛烈を極めしが、以外にも敵の全艦隊は、五時同に渉れる最大激戰の後、忽ち我を棄て去れり、ロシヤ當時水線に彈孔十一を受け、グロムボイは六を受け、兩艦とも其將校半數以上を失ひ、下士卒の死傷は二百以上に上れり、今や我二艦は復た還り戰ふこと能はず、又リユーリックを救ふこと能はざるに至り、而してリユーリックは、此時南方三十二浬の處に在りたり、戰鬪の休止を利用して、我二艦は機關の運轉を止め、留まりて汎速に艦内の破孔を修理し、以て浦鹽斯德に達するを計りたり、ロシヤ艦長ベルリンスキー大佐は戰死し、其部下將校若干名は負傷し、グロムボイ艦上には、大尉二名戰死し、他の諸將校負傷し、兩艦の戰死者百三十五名、負傷三百七名なり、ベルリンスキー大佐は水葬に附したり」云云。

敵帥の報告としては忌憚なく戰歷の實況を寫したるものと云ふべく、從つて如何に戰鬪の激烈なりしかを知るに足る、敵艦の損傷、或は更に之れ以上なるを察すべし。而して我艦隊に在りては、旗艦出雲最も苦戰し、磐手之に次げり、出雲は常に先頭に立ちたるを以て、敵彈の集中するもの最も多く、頗る危險を極めたり、然れども敵彈多くは照準を誤り、其命中したるものも、概ね要部を外れ、兵員の死傷極めて尠なし、彈痕數十、外側を貫通せしも、內部に入りしは少し、十五珊彈二個、中甲板炸裂して、器物を破壞し、他の一室に十二吋砲彈破裂し、飛んで酒保室に入り、商品を燒失し、又一彈は左舷外壁を貫き、參謀室を通過し、遂に炸裂して一水兵を殪し、他の一彈は艦長室に入り、室內の諸器を破壞し、又同室內に安置したる稻田姫の神像の臺座を破壞したるが、神像には毫も異狀なかりき。其の他上甲板を始め、艦內諸處に砲彈の大小破片、飛散して頗る壯烈を極む。同艦は死傷僅に九名、內戰死二、負傷後死亡一、重傷三、輕傷二、微傷一なりき。次に磐手は本隊の殿艦にして、司令官三須少將の乘艦なりしを以て、自然敵の集彈を受け、比較的多數の死傷者を出すに至れり。午前七時頃、前桁を破壞せられ、尋いて多數の砲彈は各處に炸裂したるが、中にも八時頃、半死のリユーリックが、放ちし巨彈は、磐手の上甲板に命中爆發し、板上十餘坪を破り、砲門を毀ち附近に在りたる乘組員四十餘名を死傷せしめ、其他中甲板にも多數の彈痕を印せり。又敵彈の爲め原口大尉、野田少尉は壯烈なる戰死を遂げ、砲術長少佐野村房次郎は後頭部を負傷しぬ。同艦には即死三十九、負傷死亡一、重傷七、輕傷二十八、總計七十五名の死傷者を出せり。其他の各艦、何れも奮鬪せざるはなかりしも、多く敵彈を蒙らず、艦體及人命の損害頗る少し。吾妻には重傷一、輕傷七、常磐には重傷一、輕傷一、浪速には即死二、重傷一、微傷二、高千穗には重傷二、輕

傷九を出したり、今其名譽ある死傷人名を列記すれば左の如し。

軍艦磐手乘組員　戰死者

少佐　原口鶴次
少尉　野田三夫
一等機關兵曹　岩下彌次郎
一等兵曹　中村佐一郎
一等兵曹　立木德夫
二等兵曹　吉川　涉
二等兵曹　吉永末藏
三等兵曹　北村竹一郎
三等兵曹　近藤謂三郎
三等兵曹　井澤秀雄
一等水兵　成枝五郎左衛門
一等水兵　岩本保太郎
一等水兵　坂本嘉吉
一等水兵　渡邊淺次郎
一等水兵　廣瀨常太郎
二等水兵　井手又作
二等水兵　矢野房吉
一等水兵　竹村繁太郎
二等水兵　吉田與四郎
二等水兵　長瀨　正
二等水兵　脇所藤之助
二等水兵　立川鎌藏
二等水兵　岡別府傳歆
二等水兵　入江榮藏
二等水兵　樹本覺一
二等水兵　力石一郎
二等水兵　西尾惠助
二等信號兵　大島卯二郎
三等水兵　原田東十郎
三等水兵　上野　盛
三等水兵　松宮權藏
三等水兵　今村庄兵衛
三等水兵　內堀六兵衛
三等水兵　野中權六
三等水兵　林田和三
三等水兵　岡田治平
三等水兵　松岡友吉
三等水兵　達海豐吉
三等水兵　恒松正次

重傷者

大尉　兼坂　隆
一等兵曹　川添善歆
一等筆記　赤木貞一
一等兵曹　橋爪健次郎
一等機關兵　前田榮作
二等機關兵　木部高司
二等水兵　晟　幸愛
三等水兵　山崎休助

輕傷者

少佐　野村房次郎
少佐　菅野勇七
少尉候補生　松村和介
上等筆記　吉富　哲
一等兵曹　山崎七右衛門
一等兵曹　坂原善次
一等兵曹　田代三郎
二等筆記　西豐源十郎
三等兵曹　福永八太郎
三等厨宰　秋山孫三郎
一等水兵　酒井繁太郎

一等水兵　懸谷岩次郎
一等水兵　牧野庄之助
一等機關兵　溝田平吾
一等水兵　添田作太
二等水兵　西善七
二等水兵　秋山語市
二等水兵　原寛二
二等水兵　倉田乙市
二等水兵　猿渡鞍藏
二等水兵　山下次右衛門
二等水兵　野口惟英
二等機關兵　三浦八代次
三等水兵　小園與助
三等水兵　龜井伴一
三等水兵　田淵信行
三等水兵　篠原丑太郎
三等機關兵　加賀田光次

軍艦出雲乘組員戰死者

二等水兵　高須來太郎
三等機關兵　上地平助
重傷後死亡　一等水兵　高橋五十馬

同　重傷者

一等水兵　中川萬次郎

第廿二章　浦鹽艦隊の擊沈

一等水兵　川內清兵衛
三等機關兵　百崎改藏

同　輕傷者

一等水兵　島崎龜馬太
三等水兵　中野斗助

同　微傷者

一等水兵　中島源太郎

軍艦浪速乘組員戰死者

一等水兵　坂野萬次郎
二等水兵　柴田文四郎

同　重傷者

一等水兵　中村鐵之助
三等水兵　伊藤善太郎

同　輕傷者

一等信號兵　森　佐一郎
一等信號兵　伏見由松

軍艦高千穗乘組員重傷者

一等船匠手　櫻井清松
三等水兵　小林正一

同　輕傷者

大尉　淺川範麗
大軍醫　一千一
上等機關兵曹　堀尾ノ雄

一等兵曹　大野題次郎
二等機關兵曹　長井　操
一等機關兵　梅原辰五郎
一等機關兵　杉本善六
一等機關兵　大野長之助
一等機關兵　高橋太藏
二等水兵　切替彦三
二等水兵　今井孫四郎
三等機關兵　相川半三郎

軍艦吾妻乘組員

給仕　脊田信一郎

同　輕傷者

一等信號兵曹　岡本治三郎
二等船匠手　松永直太郎
三等水兵　森　全治
一等信號兵　吉永久一
三等水兵　水島菊次郎
三等水兵　小川辰藏
二等機關兵　富岡忠吉
軍艦常盤乘組員給仕　川崎富太郎

同　輕傷者

三等水兵　藤井清次郎
剃夫　大塚淺雄

此捷報一たび天聞に達するや　大元帥陛下には深く嘉尚し給ひ、直に優渥なる勅語を賜ふ左の如し。

第二艦隊ハ萬難ヲ排シ、朝鮮海峽遮斷ノ任ニ當リ、遂ニ大ニ浦鹽方面ノ敵艦隊ヲ擊破シ、其一艦ヲ沈メ、偉功ヲ奏セリ、朕深ク將校士卒ノ勤勞勇武ヲ嘉尚ス。汝等益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ。

上村第二艦隊司令長官は、直に左の奉答文を電奏せり。

本艦隊ハ浦鹽方面ノ敵ニ對シ、戰勝ヲ得タルハ一ニ　大元帥陛下ノ御稜威ニ據ル然ルニ特ニ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ恐懼ニ堪ヘズ、臣等奮勵以テ、聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス、臣彦之丞誠惶謹デ奏ス。

と。山本海軍大臣、伊東軍令部長も亦た上村中將等に祝辭を寄せ、曩に同艦隊の行動を非難痛罵したりしもの、皆一齊に讃辭を以て傳頌し、朝野何れも此一擧によりて大なる安堵を爲すに至り。從て上村艦隊に信頼するの念と感謝の情とは、勃然として起り、延て我海軍の聲價は一段その高きを加ふるに至れり。

第三十三章　哥爾薩克布の敵艦擊破

第一節　ノーウ井ックの遁逃

八月十日黃海海戰に敗走したる敵の巡洋艦ノーウ井ックは、僅に三千噸の二等巡洋艦に過きずと雖、快速力を利用して、常に敵の先頭に立ちて奮鬪したるものにして毎次に我將士の歎稱する處となれり。蓋し同艦が斯る大膽なる行動を敢てしたるは、揣るに艦長其人を得たると、其艦型亦敏捷なる行動を爲すに適したるが故なるべし、抑も同艦は露國海軍第二期擴張に際し、マカロフ提督の理想通り設計せられたるものにして、其排水量は三千〇八十噸、長三百四十七呎四分の三、幅四十呎二分の一、馬力一萬八千、一時間二十六海里の速力を有し、其武裝は、七吋砲六門、四十七ミリ砲八門、三十七ミリ砲二門、水雷發射管六個を備へ、其載炭量は六百噸、乘組員は三百四十八なり、此艦の設計せらるゝに際し、効力如何に疑を抱くものあしりと雖、今次の實戰に於て其輕快なる速力と自在なる操縱とを以て、幾回か大膽不敵の行動を演じ敵味方をして共に感歎措く能はざらしめたり。彼は八月十日の海戰に於ても、頗る目覺しき奮鬪を爲し、同日夕刻に至り、味方の陣形全く亂れて殆ど支離滅裂するや、我猛烈なる水雷襲擊を受けたるが、同艦も亦た水線上に三個の砲彈を蒙れり。而も彼は砲火を冒して南方に航し一度膠州灣に入りたるも、獨逸官憲より二十四時間內

に退去を命せられ、若干の炭水を補充して同港を退去せり。かくて同艦の膠州灣出航後は、其踪跡姑く不明に屬し、頗る我軍をして搜索に苦ましめたり。然るに彼は大隅沖を經て太平洋に入り、快速力を利用して巧みに視界を遠ざかり、漸次北航して國後水道を通過し、十九日を以て薩哈嗹島のコルサコフ港に入りたるなり。蓋し同艦は始め浦鹽に到るの希望を抱きたるも、石炭搭載の爲め膠州灣に寄港し、再び航行中北海に近づくに及んで、炭水の缺乏を告げ、即ち途中コルサコフ港に入りたる者なり。されど運命竟に窮まり、其地に於て我搜索艦の爲に發見せられ、遂に花々しき最後を遂ぐるに至れり。

第二節　我艦隊の遁竄敵艦搜索

我第二艦隊司令長官上村中將の旗下に屬する、千歲(艦長高木大佐)對馬(艦長仙頭中佐)の二艦は、對馬海峽附近の警戒中、八月十日の海戰後、敵艦**ノーウ井ック**の膠州灣に竄入したるを以て追擊すべしとの命を受け、兩艦相携へて同方面に急航せり。然るに未だ兩艦が膠州灣に着せざるに先ち、敵艦は同灣を出でゝ濟州島附近を南下したるの報に接し、引還して對州海峽を扼すべく進航せり。此の時敵艦は既に膠州灣より東南太平洋面に出で北走せしものゝ如し。かくて十四日午後、兩艦は更に敵艦の北海に逸走したる形迹あるにより、津輕海峽を警戒すべしとの命を受け、全艦員欣び勇みつゝ直に竹敷を發航し、日本海を直航して十八日午後一時函館港に着したり。兩艦は函館着港後は益々索敵に奮勵せしも、未だ敵艦が津輕海峽を通過したる形迹を見ず。仍て翌十九日午前函館を發し、更に北海に航して十分に索敵に努めたるが、果然敵艦は同日午前七八時の交、千島のアトエヤ岬燈臺沖を北西に向ひ通過したりとの急報に接したり。因て兩艦は之を宗谷海峽に扼せんと欲し、急航す。然るに此日北海一帶の海面濃霧濛々として咫尺を辨せず、故に敵艦の搜索上極めて不便を感じたり。加之宗谷の水道は幅員二十海里に亘り、索敵行動に頗る困難を感じたるも各員は毫も警戒を怠らず、高木千歲艦長は、敵艦の速力と其國後海峽通過の時刻とより推測して、敵艦は未だ宗谷海峽を通過せざるものと認定し、又同艦の石炭及び飯料水の積載量に稽へ、最早缺乏を告ぐる頃なりと判斷し、同艦は十四日の蔚山沖に於ける海戰の事は未だ之を知らざる筈なれば、浦鹽艦隊と交渉する爲め、必ずや電信の架設ある地に寄港すべく、而して其寄港地はコルサコフならんと推定し、遂に同港を指して進航せり。斯て兩艦は相離れ、千歲は二十日未明に禮文島の北西二十海里に達し、宗谷海峽の中央に進みしも敵影を認めず、時に天候尚不良にして展望意の如くならざるを以て、八時二十四分宗谷岬に近寄り、位置を確かめんとする際、恰もよし對馬は禮文島の西方六十海里より索敵しつ

ゝ來航したるを以て、千歳は直に宗谷岬とシレトコ岬との一線上に進みて監視の任に膺り、對馬は進んでコルサコフ港方面を偵察せり。

第三節　敵艦發見と對馬の奮戰

斯くて對馬はコルサコフ偵察の任務を以て、午前十時三十分、千歳と離れ、同日午後四時二十分、コルサコフ灣南方約二十五海里の地點に達したる時、遙かに陸岸近く三本烟突の一艦を發見したり。是正しく敵艦ノーウ井ックにてありしなり。是に於て累日搜索の効空しからず。艦員雀躍して喜べり、仙頭對馬艦長は直に戰鬪準備をなし、港口近く進行したり。敵も漸く之を覺りて、煤烟を揚げつゝ急に港外に突進し來り、更に艦首を南方に向け、宗谷海峽を脱せんとするものゝ如し、斯と觀たる我艦對馬は直ちに敵の進路を遮りつゝ、四時三十分彼我の距離一萬米突より、漸く近いて八千米突となるや、我對馬の右舷に紫電一閃、續て各砲門は一齊に開かれたり。砲烟漠々、巨彈急霰の如く、敵艦に集中せり。此時敵艦も亦死力を盡して應戰し、彼我砲聲轟々として耳を聾せん許りなり。敵は殆んど死者狂となり、亂射猛擊最も力む。特に敵は快速力を利用して、我運動を妨げんとせり。而も其操縱の巧妙なる又賞歎に價す。斯くて彼我砲戰約一時間に及ぶ。其間我砲彈は一々敵艦に命中し、鬱からざる損傷を與へたるが、最後の一巨彈は、敵艦尾の上甲板に命中爆發し、同時に黑煙濛々として全艦を掩ふ、是れ即ち敵艦に致命傷を與へたるものなり。是に於て敵艦は俄かに艦首を回轉して北方コルサコフ港に引返さんとせり。此を以て我も亦同一方面に針路を取り、敵艦を壓迫しつゝ、猛烈に追擊したり。敵は其快速力によりて遂に再び港内に遁入す。此時我艦に於ても敵の一彈右舷に命中し、六番、八番の炭庫を傷け、浸水甚しく艦體漸く傾斜せんとしたるを以て、已むなく追擊を中止し、直に應急の修理に着手したるが、幾ばくもなくして戰鬪航海に支障なきに至れり。

第四節　千歳の進擊と敵艦自爆

是より先き、千歳は對馬と別れて宗谷水道監視の任務にありたるが、午後四時二十分對馬より『敵艦見ゆ』との無線電信に接したれば、直に針路を轉じ全速力を以て同方面に疾走したり。此時日已に沒し四面模糊として敵艦を認むる能はざりしを以て、姑らく港外にありて敵艦を監守することゝなり、又對馬は退いて宗谷海峽の警戒に任じたり。翌廿一日東天漸く白むに方り、千歳はコルサコフ港内に進みて敵艦を偵察したるに、同艦は市街陸岸近き淺瀨に擱岸し、艦體は著しく右方に傾き、艦尾は上甲板に至るまで浸水するを見たり。是

れ敵は前日の我砲擊により、多大の損害を蒙り、遂に免るべからざるを自覺し、擱岸爆發したるものなりしなり。然るに敵艦にては我が千歳の港口に現はるゝや、周章狼狽して、小蒸氣又は端艇に乘じ、陸上を指して逃走せり。而して更に市街を展望せしに、各戸皆な扉を鎖し、殆んど人の往來するを認めず。茲に於て千歳は敵艦に止めを刺さんと欲し、六時二十五分より砲擊を開始し、遂に全く廢艦に至らしめ、七時十四分にして砲擊を中止す。それより對馬と合し、長驅追擊の目的を達し、威風堂々凱歌を奏して根據地に歸還したり。この戰に付き敵艦長の語る處によれば敵は『水線上に二彈、水線下に一彈を受け、海水破口より浸入して忽ちに舵機を浸す、我を砲擊したる敵艦は新高型の一隻なり、戰鬪の末期に於て舵機幷に機關を損じたるを以て、修理の爲め港内に入り、夜陰に乘じて逸出せんと期したり、然れども無線電信と探海燈光とに依り、附近に多數の敵艦あるを知れり、依て斷然意を決して本艦を擱岸せしめ、先づ艦載物を陸上に移し、乘員を上陸せしめたる後爆沈せしめたり、同艦は八月十日の海戰に於て兵卒二名戰死し、軍醫一名微傷し、今次の戰鬪に於て兵卒二名戰死し、同二名重傷を負ひ將校一名兵卒十四名輕傷せり』と其末路想察すべし。此章の終りに臨み特記すべきは、東伏見宮依仁親王殿下の御奮戰なりとす、同殿下は千歳の副長として御乘艦あらせられ、終始熱心に其職務に就かせられたり、又此戰鬪に於て、兩艦共一名の死傷者を出さざりしは眞に天佑と云ふの外なし。此事叡聞に達するや、左の勅語を上村司令長官に賜はりたり

千歳對馬ハ哥爾薩港ニ於テ敵艦ヲ擊破シ長驅追擊ノ目的ヲ達シクリ。朕之ヲ嘉尚ス。

之に付き上村長官の奉答左の如し

千歳對馬ノ哥爾薩港ニ於ケル奏効ハ一ニ　大元帥陛下ノ御稜威ニ依ル然ルニ茲ニ又優渥ナル勅語ヲ賜ハリ恐懼ニ堪ヘズ臣彦之亟誠惶謹ンデ奏ス。

第三十四章　中立國竄入敵艦の處分

第一節　上海竄入二艦の處分

一たび膠州灣に入りたる露國巡洋艦**アスコリッド**及驅逐艦**グロゾヲイ**は、獨逸官憲の爲に退港を命ぜられ、已むを得ずして同港を去り、十二日午後相前後して上流に竄入したり。是れ蓋し清國の意思兵力共に薄弱なるに乘じ、此の地に於て充分修理を加へ、糧食炭水の積込をなし、遠く浦鹽に奔逸すべく期したるものゝ如し。抑も**アスコリッド**は五千九百五噸の巡洋艦にして十二門の重砲を備へ、二十三節の速力を有し、二檣五烟突を備ふ、二等巡洋艦中の傑秀たり。同艦は八月十日の開戰に頗る奮鬪して損傷亦多大なり。即ち艦部にある烟

突は上部より十尺許りの所にて切斷せられ、第一第二の烟突は蜂の巣の如く砲彈を蒙り、第四は全く破碎せられ、右舷艦腹水線下二尺の所に八吋砲彈命中し、石炭庫に止まり、右舷中央甲板上にも十二吋砲彈破裂し、其破片は端艇四隻を殆ど全く破壞し盡したり、又十二吋砲彈は右舷後部にも命中し、左舷將校室に至りて破裂す、其最も甚しきは水雷の一個水線下に命中し、石炭庫を破壞せり。同艦の受けたる彈丸は凡そ百八十にして、前後檣、石炭庫防禦網、探海燈、司令塔、將校室等、何れも砲彈の爲に見る影もなく、破壞せられたるも要部を外れしため、辛ふじて上海まで逃げ延ぶる事を得たるなり、又驅逐艦**グロゾヲイ**(三百十二噸、二十六節)は多少の損害を受けざるにあらずと雖、航海には毫も支障なく、外面殆んど疵所の認むべき者なし。

初め露艦の上海に竄入するや、同地滯在の有力なる外人等は、之を以て商業の安寧を妨害する事甚しとなし、陰に道臺に迫りて速かに退去を命ずべきを請ひたるを以て、道臺は已むを得ず二十四時間内に出港の事を二艦に命じたり、然るに**アスコリッド**艦長は同艦の損傷甚しくして航海に堪へざるを辭とし、切に修理の爲に入渠を請ふて已まず、依て道臺は**アスコリッド**に限り或る時日を限りて修理を加ふるを許すべきも、**グロゾヲイ**は格別の損傷なきを以て速に出港すべく、否らざれば武裝を解除せよと通達したり、既にして**アスコリッド**は十四日午前二時を以て修理の爲め船渠に入り、**グロゾヲイ**は同五時頃江を遡りて佛蘭西租界の前に投錨したり。此際北京に於ては清國政府と露國公使との間に交渉あり、清國政府の希望は二十四時間内に露艦の出港若しくは武裝解除を終ゆるにありと雖、露國公使容易に肯んぜざりしを以て、清廷は遂に讓歩し、外務部は十五日附を以て上海道臺に訓電を發し、兩艦の上海に於て修理を加ふるを許したり。但し其修理の程度は航海力の回復に限り、且つ其期日を五日とし、期間滿了後二十四時間内に退去せしむべしと命じたり。此處分たる**アスコリッド**に限りては、强ち不當の處置と云ふべきに非ずと雖、當時航海力に些の支障なき**グロゾヲイ**に對し、同一の許可を與ふるが如き、蓋し不當の措置なり。矧んや兩艦は修理の許可を得ざる以前に早く已に修理に着手し、命令と同時に支那官憲の臨檢したる時は十中の二三を竣へたるを見る、且つ**アスコリッド**は航海力回復の程度まで修理を施すを以て足れりとせず、尙ほ進んで戰鬪力を回復し、修理完成の上は出港して再び戰鬪に從はん事を期する者の如く、又**グロゾヲイ**は本來修理を加ふるの要なきを以て、唯徒らに埠頭に繫留して**アスコリッド**の修理完成を待つものなるを確めたり。道臺は此報告を得て大に驚き、直に其成行を外務部及び南京總督に報告し、一方露國總領事に迫りて兩艦の修理完成期間何日なりやを質したるに總領事は『兩艦修理完成期は船渠會社の技師

すら確實に之を豫知する能はず、其道にあらざる我等固より之を知るに由なし、要は兩艦修理完く成るの後を俟て之を知るべきのみ』と、橫暴極まれる答をなせりと云ふ。

第二節　日本政府の抗議と武裝解除

先是我帝國政府は、上海竄入露艦の處置に關して累次清國政府に交渉する處ありしも由來清國政府の優柔不斷なる容易に要領を得ず。由て更に十八日附を以て我總領事をして上海道臺に對して嚴正なる公文を發せしむ、我主張の條目は左の如し

第一條　露國驅逐艦**グロゾヲイ**號が上海に入港せる時は必要ある修繕を爲すか又は規定の時間内に出港するかの目的を以て來りしものなり然るに六日を經過したる今日該軍艦は依然として上海にあり又何等の修繕をも爲せる兆候なし同軍艦は事實明瞭なる種々なる口實の下に故らに時日を遷延しつゝあり是れ明かに露國が清國の中立を無視したるものなり。

第二條　交戰國の一方の軍艦が中立港に入港して航海に堪ゆべき修繕を爲さんと欲する時は其艦に對して一定の時日を制定して其停船を許可すべき者なり然るに露艦**グロゾヲイ**は六日間を經過するも修繕を爲す事なし是れ清國自ら中立國の義務を破棄したるものなり。

第三條　**グロゾヲイ**號は入港以來六日間を經過したるが故に其中に必要修繕を施すに充分なる時日ありしに拘はらず更に之に着手する事なく今に及んで修繕を開始せん事を請求す是れ實に不都合なり、若しも清國にして此の不條理極れる露艦の請求に承諾を與ふるに於ては日本帝國は清國を以て露國に援助を與ふる者と認めざるを得ず而して其結果は清國に取りて容易ならざる災害を釀すべく而して清國は自ら其責任を負ふべき者とす

日本政府は以上の通告を清國政府に提出すると共に更に我決心を表明せり、曰く『清國の

義務は直に露艦に命じて一切の武裝を解かしめ、戰鬪及び航海に要する一切の器械を取外して、之を清國官憲の監督の下に保管し、該艦をして一定の繫留場に碇泊せしむるにあり、清國若し之を肯んぜざれば、日本政府は即刻相當の處置を取り速に此問題を解決せざるべからず、而して之より起る一切の事變に對しては、日本政府は毫も責任を負はざる者にして上海道臺の責任に在り、故に一刻も早く處決せられん事を望む』云々、即ち帝國政府は曩に芝罘竄入の**レシテリヌイ**號に對して執りたる手段を以て上海竄入の露艦に臨まんと擬する者なり。

是に於て同道臺は十八日を以て更に露國總領事に對して通牒を發し、兩艦の擧措頗る當を失するを語り、速に武裝解除の決行を迫りたり、其通牒の要旨に曰く

『巡洋艦**アスコリツド**號は嘗に清國政府の許可により、航海に堪ゆる程度に修繕を施す爲め、五日間の猶豫を與へたり、然るに既に六日を經過したる今日に於ても猶其修繕を終へず、反つて戰鬪力回復の工事を施し、竣成の上は再び戰鬪に參加し得るの準備を爲しつゝあるは、上海稅關官吏の臨檢に依て明かなり、是れ即ち國際公法の規定に違背したる者なり、又驅逐艦**グロゾヲイ**號は修繕の必要なき者なれば最早や港内に碇泊するの理由なし、故に兩艦は彼の青島に於ける露國軍艦が、獨逸官憲の監督の下に其武裝を解除し其水兵は再び此戰爭に從事せざるの宣誓を爲さしめたる實例に倣りて速に處決する事を要す、然らざれば清國は日本海軍の取るべき如何なる處置に對しても一切責任なき者なり、云々

是れ極めて有理正當の主張なり、道臺は此通牒を發したると同時に、一方に於ては露艦の修繕工事を請負ひたる船渠會社(英國ファー！ナム、ボイド會社)に命じて指定期間後の工事

を禁止したり、然るに露艦は依然船渠に止まりて武裝を解かず、又出港の模樣もなし、此を以て道臺は武裝解除を督促したるに、彼は頑然峻拒して曰く『修繕期間は宜しく專門技師の意見を徴し、露清兩國政府の合意を以て之を決定すべく。上海道臺の任意を以て定むべき限りにあらず』と。何ぞ其言の暴戾なる、事茲に至る。道臺は到底頑冥なる露國領事と交渉するの無益なるを認め、在上海領事團に依て之を解決せん事を決心し詳かに事情を具して露國の中立違背を領事團に訴へ、清國は今後の出來事に就て其責に任せざるべきを通告したり、次いで二十二日領事團は會議を開き。此問題に關し審議を凝らせり。結局本件は日清露三國を以て之を決すべく他國は之に干與すべき者にあらずと決定したり。

是に於て帝國政府は敢然優勢なる軍艦を吳淞港外に進めたり、續て列國も亦各々其軍艦を同港内外に集中し、今後の變如何によりては自ら適當の手段を取りて、自國居住民の生命財産を保護すべく備へたるを以て、形勢急に危殆に迫り人心亦恟々たり、當時露國は種々の辭柄を設けて清國官憲の要求を拒絶したりと雖、四圍の事情は到底我意を貫徹するに便ならず、矧んや兩艦の修理完成すると雖、再び出港して堂々たる日本艦隊に對抗するの不可能なるを覺り、俄に屈服して兩艦の武裝を解くに決意せり、仍て在北京レッサー公使は二十四日夜中を以て此旨を上海なる領事及び兩艦長に命じ、同領事より之を上海道臺に傳へたり。是を以て道臺と艦長との間に武裝解除に關する協定を遂げ、大要左の如く決定したり。

(一)、兩艦は凡ての艦旗を引卸すべし。(二)、兵器彈藥及び凡ての必要なる機械は之を取外して清國官憲之を保管すべし。(三)、解裝完結後兩艦は戰役終るまで清國官憲の保護の下に在るべく其以前にありては如何なる事情あるに拘はらず、清國政府は兩艦の港外に出で又は兵器彈藥及び必要機械を取戻す事を許さず。(四)、兩艦乘組員は陸上の或る地點に限り居住すべく恣に其地境以外に居住往來するを許さず其歸國の時日は追て道臺と協定すべし。(五)、兩艦の艦長は兩艦乘組員が戰役に加らざる旨の誓書を入るべし、此誓書は道臺に於て保管し、南京總督及び北京政府に其寫を送致すべし。(六)、解裝完結後露國總領事は海關長と共に之を檢分し其完結を確めたる後共同に一の報告書を作成すべし。

協定の成立して後數日。露艦は尚ほ容易に解除に着手せず、頗る逡巡する者の如くなりしが、事已に茲に至る、如何に狂暴なる露艦長と雖、亦如何ともする能はず、遂に二十九日より澁々解裝に着手し數日にして完了したり、其一切の處分方法等に至つては、凡て協定通り行はる、是に於て日清露三國間の大問題となりし上海竄入露艦處分の件は、總に全く解決を告ぐるに至れり。

第三節　西頁竄入露艦の處分

敵巡洋艦デヤナも同じく十日の海戰に敗走し、一時行衛不明なりしが、其後十餘日を經て、

突然同船は佛領西貢に竄入したることを、倫敦電信により報じ來れり、然れども西貢は交趾支那の首府にして、佛國總督の駐在地たり。旅順よりは約二千二百餘海里の航程なれば、始め多少の疑惑を存し、其事實として確信するに至りたるは尙ほ數日の後にあり。抑も同艦は六千六百三十噸の巡洋艦にして、千九百二年の竣工に繫り、速力は二十節を出し、載炭量は九百噸以上、總て**パルラダ**と同型の構造にして、露國巡洋艦中の最新式なる者なり、而して同艦が此長途の航路を如何にして達したるかは頗る疑問なりしも今同艦長の談話によれば聊か之を知るを得たり曰く、『黃海々戰の終りに臨み時に信號あり、司令長官の命を傳へて曰く、巡洋艦は南に逃走せよと、抑も我艦隊の旅順口にあるや、戰艦は其巨砲を以て要塞を助け一方面の防禦に任すと雖、巨砲を有せざる者は然る能はず、故に巡洋艦は旅順に還るよりは、寧ろ逃れて他日の計を爲すに若かざるなり、夜に及んで戰艦は旅順口に向つて執針し、巡洋艦は命令に從つて逃走を計れり、**アスコリッド**は南芝罘の方向に走り、**ノーウ井ック**之れに從へり、偶々舊式の敵巡洋艦二三隻火災に罹れるあり、我艦は其方向に進みしに彼退き去れり、我艦が敵に發見せらるゝ事なく逃走するを得たるは之が爲なり、即ち我艦は全速力にて山東角に向ひ疾走せり、時に夜色暗然たり、折しも水雷艇の小隊數個及び老朽巡洋艦二隻に出會したりと雖、攻擊を受けず、其後敵艦に遭遇せし事凡て十九隻、水雷を發射する事八個に及びしも、我艦の全速力にて疾走したると且暗夜の事とて一も命中せず、恁くて山東角の陰に入るに及びて南に轉針し、終日全速力にて走り、上海を過ぎて始めて經濟速力を用ひ、廣州灣にては極めて少量の外石炭を取る事能はざりしを以て、ホンガイに寄港し、石炭を積入れて西貢に入れり、我艦の被害は、十日の夕刻一榴彈甲板上に炸裂し、通風筒の頭及び煙筒に孔を穿ち、將校一人、卒三人を殪し、數人を傷けたり、又一彈水線下にて前部病室附近に貫通したるも死傷なし、孔は直に塡塞したり、人員の損失は凡て即死將校一、卒三、負傷二十三にして、內重傷四人は死亡せり云々』、如上により同艦の奔竄したる經過は詳かに知るを得べし、即ち同艦は、十日の海戰に多大の損害を受けたるも、其快速力を利用して、遠く西貢に落ち延びたるものなり。而して同艦は其後數十日を經て佛國政府より武裝を解除したる旨帝國政府に通牒し來れり。

第四節　威海衛竄入の敵驅逐艦

黃海々戰に敗走したる敵艦の處分に就ては前各節に於て、已に其重なる者を盡したり、然るに尙ほ外に驅逐艦二隻あり、此二隻は日本艦隊の水雷攻擊を冒して南航し、山東角西北方の地點に於て暗礁に觸れ、頗る進退に窮しつゝある折しも、偶々英國水雷艇通り合せ同

艇に救助曳行せられて威海衛に入りたるなり、是れ即ち八月十二日の事にして、英國官憲は翌十三日を以て直に武裝解除を命じ、之を威海衛に抑留し、其乘員は之を香港に送致したり、斯くの如く此兩艦の處分は、英國官憲の斷乎たる措置により、些の澁滯を見る事なく、極めて迅速に結了せり、英國官憲の此公明正義の措置に對しては、我國民の擧つて多とする所なりき、是に於て黃海々戰の敗走敵艦の處分は悉く終了したるなり。

第三十五章　封鎖後彼我の災厄

第一節　旅順殘艦益々窮す

旅順の敵艦隊は八月十日の黃海大海戰後は空しく港內に蟄伏せしが、其損害は各艦共に極めて大なるを以て、何れも之が修理に夜を晝に繼ぎて從事せりと雖も、其材料の窮乏と手腕ある職工を傭聘するの途なく、僅に清國勞働者を雇入れ、辛ふじて應急の修理を爲すのみにして到底完全なる能はず、殊に其の竣成は遲々として進まず、剩さへ我攻圍軍の攻擊は日を追ふて益々急となり、多數の清國人も今は逃走して如何ともする能はざるの非境に陷れり、之に於て敗殘艦より重砲を陸上防禦に轉用するに至り、自ら武裝解除の奇觀を呈するに至れり。然るに驅逐艦に於ては他の戰鬪艦、巡洋艦に比して損傷割合に尠く、又水雷艇は殆ど完全に存留するを以て、敵は八月十日の海戰後も屢々此等の小型艦艇を港外に出動せしめ、海岸防禦線を辿りて、我攻圍軍の作業を妨ぐるに努めたり。されば黃海々戰の翌日即ち八月十一日小平島附近を警戒せる摩耶、赤城の二砲艦は、午前十時頃、敵の砲艦**ギリヤーグ**、及**オトワズヌイ**の二隻、鮮生角附近に出で來りて、我陸軍の占領地區を砲擊するを認め、直に進みて龍王塘附近に至り、之を砲擊せしに、赤城の一彈**ギリヤーグ**に命中し、敵は愴惶狼狽して直に旅順港內に退却せり。此時嶗嵘嘴附近の敵は頻りに我二艦を砲擊したるも、我に一の損傷なかりき。而して又此日烏海以下の砲艦隊は驅逐隊と共に、朝來、前日の海戰より敗走して歸り來れる敵艦の旅順に入るを追躡して、併て敵狀偵察に努め、大に利する所ありたりと云ふ。又十八日午後七時五十二分敵敵**グレミヤシチー**は自軍掃海隊掩護中、老鐵山より南方一千米突の海面に於て、機械水雷に罹り沈沒したり。尋で二十三日に至り、敵は嶗嵘嘴附近の砲臺より頻りに我攻圍軍を砲擊し、又戰鬪艦**セバストポリ**港外に出でゝ牽制運動を試みたり。是より先八月十六日、司令官乃木陸軍大將は軍使參謀山岡少佐を遣はして旅順守備主將ステッセルに降伏勸告と共に旅順非戰鬪員避難に關する、聖旨を齎さしめたるに、敵は頑然として之を拒絕したるを以て、十九日より第一回本線總攻擊を開始し、二十二日には、既に盤龍山東西砲臺を占領し二十三日更に進んで强行

大襲撃を擧行したるに、我軍頗る不利の形勢なりしを以て、我艦隊にては、間接射撃に適せる日進、春日の兩艦をして敵砲臺の牽制運動を爲さしむる事となれり。此日午前十時、龍王塘西方の沖合に赴き、陸岸に近きつゝ、間接射撃を以て嶗嵂嘴砲臺を牽制す、敵は俄に砲身の方向を變じ、我二艦に向て盛んに砲火を送れり。然れども其照準悉く誤り、砲彈は皆海中に落つ。之に反して我二艦の巨彈は着々敵砲臺に達し、其附近に爆烈する音響は手に取る如く聞ゆ、斯る急迫を望見したる黄金山の敵砲臺は、其窮狀を救はんとし、應援して我二艦を砲撃したるも、距離の遠きために更に其効なかりき。交戰一時間餘にして、敵砲臺は遂に沈默せり。由て日進、春日は龍王塘附近より鮮生角附近に遊弋しつゝ時々緩徐なる間接射撃を行ひたり、又朝來港外に出で、我攻圍軍を砲撃しつゝありし敵の戰艦**セバストポリ**は、此日午後一時頃、機械水雷に罹り、著しく、右舷に傾き、艦首を水中に沒し大形小蒸汽船に曳かれて、旅順港内に遁入したり。又其翌二十四日午後六時二十分、老鐵山の東約二海里の地點に於て、敵の三本煙突なる驅逐艦一隻は、機械水雷に罹りて沈沒しぬ。引續き同二十分、他の四本煙突を有せる一隻の敵驅逐艦も亦た機械水雷に罹り、僚艦に助けられて僅かに港内に入るを得たり。此遭難と同時に、今朝來港外に出でゝ掃海に從事しつゝありたる、敵の掃海艇五隻、及び驅逐艦三隻は、皆愴惶として港内に逃げ入りぬ。斯て封鎖監視の任務にありし細谷戰隊は二十八日、二十九日の兩日、圓島及南三山島附近に於て去る二十五日威海衛を發し、旅順口に向ひ、大膽不敵にも我監視の眼を掠めて、多量の糧食を輸送せんと企てたる露國軍用「ジャンク」二十六隻を拿捕し、青泥窪に回送して取調たる結果、船舶及び載貨は悉皆之を沒收し、乘員は清國帆船三隻に分乘せしめて解放したり。次いで同月三十一日朝來、敵は小蒸氣船四隻、艦載水雷艇三隻、特殊掃海艇四隻、端舟數隻を旅順口外に出して掃海作業を爲さしめ居りしが、午後二時二十五分、其特殊掃海艇一隻は、城頭山下約一海里の地點に於て、機械水雷に罹り沈沒せり。斯の如く敵は頻々機械水雷の爲に艦艇を失ひ、且つ我封鎖監視の極めて嚴なるを以て漸次に掃海作業の念を絶ち、從つて密輸入等も全く望みなきに至れり。

第二節　帝國海軍の不幸（其一）（速鳥、平遠、愛宕、濟遠の沈沒）

敵艦艇が掃海作業の爲に、觸雷爆沈するもの頻々たると共に、此不幸は屢々我海軍をも見舞ひたり。封鎖監視、掃海作業の爲に其艦艇を喪ひしもの幾何ぞや、曩に五月には六艦、一艇を沈沒せしめ、今又秋風渤海の海原を拂ふの時、續々として此災禍を演出す。即ち第一回大連灣偵察以來、連戰偉功を奏したる驅逐艦速鳥（三百七十五噸）は、九月三日、夜色黝暗の裡に

旅順口封鎖に從事し居りしに、不幸、敵の機械水雷に罹りて沈沒す。死傷其他詳かならず。尋いで、同月十八日、砲艦平遠は、陸軍掩護の爲め、鳩灣方面に遊弋中行衛不明となりしを以て、細谷司令官は濟遠をして搜索せしめたるに、搜索の結果、礁脈島にて平遠乘組の下士二人、卒二人を發見し、漸く其事情を知るを得たり。即ち平遠は十八日哨艦の任に當りしに、薄暮に至り、天候險惡となり、風雨强盛となりしかば、歸航せんと航行の途中、敵の浮流機械水雷忽然同艦の右舷中央部に觸れて爆發し、四邊暗憺たる夜色裡に、僅々四五分間に沈沒し畢れり。此時淺羽艦長、飯山航海長及び當直將校は、艦橋上に在りて全員を指揮し、乘員は概ね二隻の端艇を準備すべく着手せしも、孰れも、覆沒したれば、衆皆意を決して、自から海中に投せしも、其多くは遂に强風怒濤に卷込れ悲慘なる戰死を遂げたり。乘員百九十六人の內前記四名の生存者を除き、艦長以下悉く此難に殉す。今其准士官以上の氏名を留めて、國民永久の崇表たらしむ。

大佐　淺羽金三郎
大尉　飯山仁三郎
大尉　毛利陽二
大尉　原　城
大機關士　香山直一
大軍醫　西田條綱

大主計　佐藤陸象
中尉　石田　平
中機關士　齋田都彥
少尉　中川次郎
少機關士　牧之瀨金藏
機關兵曹長　成瀨兼吉

上等兵曹　長瀨佐平
上等兵曹　渡部彌一郎
船匠師　兼尾喜之助
上等機關兵曹　四元　仲左衛門
以下　下士卒百七十六名

平遠は一等砲艦、排水量二千百五十噸、明治二十年進水、二十七、八年の役、清國より拿捕したるものにして、日露戰役に際しては、專ら陸兵輸送掩護の任務に從事し、其功績尠からざりしが、遂に斯る無慘の終を告げぬ、惜むべきなり。

越へて十一月六日、二等砲艦愛宕（六百十二噸）は旅順口封鎖に從事して渤海灣口を警戒中、直隸海峽に於て、急潮の際、暗礁に乘り揚げ、船底に大破を生じ瞬時にして沈沒したりと雖、事情不明にして之を知るに由なし。愛宕の沈沒に引續きて又も同月三十日、海防艦濟遠觸雷沈沒の厄に逢ひぬ。昊天何ぞ夫れ我艦隊に禍するの甚だしき。乃ち山田海軍少將（彥八）の麾下となりし濟遠支隊（艦長但馬惟孝）は赤城等の砲艦と共に旅順口要塞に接近して、我攻圍軍に應援して要塞砲擊を爲し、並に封鎖强行中、三十日、濟遠は俄然敵の機械水雷に罹り、轟然たる爆聲と共に艦隊黑烟に包まれたり。此時陸上を砲擊しつゝありし赤城は、直に之を中止して濟遠の方に向ひしに、忽にして同艦沈沒す。依て赤城は其附近に投錨し、他の砲艦及び瀛艇と共に、極力遭難者の收容に務め、副長を始め准士官以上十五名、下士卒百七十五名を救助したるが、艦長中佐但馬惟孝、機關長大機關士中根金太郎、乘組少尉柏木辰生、同森田寬一、兵曹長山本庄藏、同島田戶市、上等兵曹都志見浦次以下、下士卒三十名、此難に死しぬ。濟遠は三等海防艦にして、明治十六年獨逸に於て進水せし老朽艦の一なれども、排水量

二千四百四十噸、速力猶ほ十五節を出だす、日清戰役の分捕艦の一なり。今次戰役に際しては、多く陸兵輸送掩護封鎖任務等に從事し、殊に永く同支隊の指揮を司り屢々危險の地域を往來して、克く其功を奏しつゝありしに、今や此奇禍に罹る眞に痛惜すべきなり。

第三節　帝國海軍の不幸（其二。巡洋艦高砂の沈沒）

三十七年の末期、即ち我聯合艦隊第一期作戰の終末に際し、災禍は頻々として、我海軍に來り、曩に速鳥、平遠、愛宕、濟遠の諸艦を喪ひたるに更に十二月十二日に至り、我巡洋艦中には新造快速を以て其名高き高砂亦觸雷爆沈す、事は當時秘密の裡に隱されたりしを以て、多く世人の注視傾聽する所なかりしも、日本海大海戰後、敵艦隊の全滅してより彼の不幸なる八島等と共に、始て世に公にせらるゝに至れり。今其當時の光景を叙すれば、時しも十二月十二日、渤海灣頭、怒濤山を爲し、朔北の寒風、六花を交へて紛繚亂たるの頃、巡洋艦高砂は、旅順港口を南東二十四五海里の洋海に在りて、封鎖監視の任務を續行しつゝありしが、夜に入り十三日、午前零時二分、轟然なる爆音は艦の左舷に起り、同時に艦體動搖し始め、鯨波昇騰狂奔す。之れ敵の浮流機械水雷に觸れたるものにして、爆裂は左舷中央部水準線に方一間大の破口を作り、海水直に浸入し、艦體は左舷に傾斜す。此時艦長石橋大佐（甫）は早く既に前艦橋に在り、副長中山中佐（鋌次郎）も亦た傍にあり、共に部下を指揮して「コルションマット」を覆ひ、端艇出し方を令し、左舷に積載せし石炭、彈藥等の重量物を投棄して、艦の傾斜を回復し、其沈沒を避けんと努めたり。斯くて觸雷してより約十五分、必死に防水作業と避難準備に從事せる途端電流悉く停止し、電燈全く滅して、艦内は四圍の黯暗なると異ならず、而して艦の傾斜は右舷の端艇を卸す能はず、漸くにして「ライフボート」一隻「カッター」一隻傳馬船一隻を卸したるも、配置の定員以外に多く乘艇する能はず、さればとて單獨行動の折なれば僚艦の來援を待つも協はず、午前零時四十二分、無線電信にて危急を我艦隊に通せし後は、最早百計盡き、万事休し、唯だ運を天に任せて、沈沒の時を刻一刻に待つのみ、此時石橋大佐の最後の命令は暗を破りて全艦に渡れり『總員は各自浮力を有するものを身に用意すべし、而して何れも艦と運命を俱にすべし、艦の沈沒せざる限りは、一人たりとも本艦を離るゝ勿れ』と、滿艦の將卒、肅として命を奉せり、斯くて此瀕死の境に在りながら、艦長は命じて喇叭を吹奏せしめ、將卒皆上甲板に整列して『君が代』を歌ひ且、艦長の發聲にて一同　天皇陛下萬歳、聯合艦隊萬歳を三唱し終つて、樂しき最後の喫煙を許されしが、六七分時を費して後、最早沈沒は刹那に迫る、將卒皆檣上、艦橋、上甲板等の高所に集り終焉を待つ、四面暗黑、怒濤雪に和し、艦橋一片の燈光は哀痛を弔ふが如し、滿艦語なく、瞬一瞬、運命は

弱れり。午前一時十分、益々右舷に傾斜せし艦隊は、忽ち艦底を水面に現はし横さまに沈没しぬ。石橋艦長以下、五百の健兒は艦に殉じて海中に投じたり是に於て曩に海面に浮べたる小艇三隻は艦長以下を救助すべく其の地點に來りしも、風濤高く、寒威亦強く、四面暗ふして發見に苦む。而も右操左漕必死となりて收容に盡力したり。會ま艦の沈没と殆んど同時に、遙に東南方より天來の救主とも云ふべき、我巡洋艦音羽は怒濤を蹴り「サーチライト」に闇冥を照破しつゝ馳せ來れり。直に三隻の端艇を出だし、探海燈下に先の三隻の小艇と共に機敏に救助に努めたるが漸やく石橋艦長以下百三十三名を收容す、されど十餘名の收容者は激浪に漂ひ、寒威に惱まされ遂に死亡す。副長中山中佐(後ち大佐に進む)以下二百六十餘名は惜むべし渤海々底の藻屑となりぬ。今其殉難者の准士官以上の氏名を列記すれば左の如し。

大佐 中山鋌次郎　少佐 深柄彦熊　大尉 木村昌二　大尉 川副正治　大尉 森永尹　大尉 大塚林八　大尉 管野桂三郎　下士卒百三十八名

大機關士 三井昌尾　大機關士 松尾三平　大軍醫 稻垣久逸　中尉 細山田敬二　中尉 松原管太郎　中尉 伊東綱丸　中機關士 志摩龜吉

少尉 伊藤長重　少尉 增田薫　少尉 嵯峨璋助　少尉 後藤彌七郎　兵曹長 杉中利太郎　兵曹長 登平次郎　船匠長 島田秀四郎

高砂は二等巡洋艦、艦質鋼、吉野の姉妹艦として造られ、明治三十年五月英國にて進水し、排水量四千百五十五噸、速力二十三節、備砲二十八門、今次戰役に際し、第三戰隊に屬し、屢々交戰に從事して功績ありしが、今や此災厄に遭ふ、實に惜みても餘ありと云ふべし。

第四節　敵驅逐艦の逃亡自爆

是より先、十一月に入るに及んで、敵勢益窮す、彼等は如何にもして外洋との交通を得んことを圖り、百方計劃を運らして機の到るを待つ。同月十五日朝來、大に雪降り、天地瞑濛として咫尺を辨せず、豫てより脱走の工夫を凝したる、敵驅逐艦ラストロプヌイ(二百四十噸速方二十七節)は、同夜十一時半頃暗夜降雪に乘じて陰かに旅順を出で、途中我追躡を受けたるも、巧に之を遁れ。十六日午前七時を以て芝罘港に達したり、而して艦長は直に露國領事館に赴きたりとの報あり。東郷司令長官は此日正午第一驅逐隊司令藤本中佐(秀四郎)に命じ、即刻同港に急航して之が處分を爲さしむ。由て藤本司令は朝潮其他の麾下各艦を率ゐて同日午後七時芝罘港外に至る。此時敵艦は「ジャンク」及び多數商船の間に投錨せり。既にして軍艦明石も亦た來りて碇泊中の米國軍艦と禮砲を交換す、此時我商船の來りて明石に告くる處によれば、敵驅逐艦は十六日午前七時四十五分、入港したり依て警備中の清國

軍艦海容艦長は、敵艦長に對ひ、二十四時間以上碇泊すべからざる旨を告知したるに、敵艦長は日沒後迄何分の答辯を爲べしと答へ、午前八時、商船錨地に移りぬ。而して敵艦長は秘關に對し、旅順より來りたるを告げたる外、何事も語らず、直に領事館に赴きたりと。恁くて午後一時半、芝罘道臺は秘書官をして我領事に、正式の通告を受けたる旨を報じ來れり、『露國驅逐艦は風浪の爲め芝罘に入港し、而して同艦長は同艦の武裝を解除して、清國海軍官憲の管掌の下に置くことに決せり、午後八時乘員殆ど全部、手荷物を携へ、露國領事館に赴けり、午後八時十分、同領事館にて、日本驅逐艦隊の來りたるを認め、又信號をなしつゝあるを見、十七日午前一時三十分、自ら爆沈したり』と、されども芝罘道臺は一たび露國が武裝解除を約したるに、我艦隊の來りたればとて、其約を破りて自から爆沈すべきの理由なしとて、之を追窮すべきを强て爲さず、唯只露艦乘組員の携帶せる彈藥武器を受取り、將校一切兵員を海容號に留置し、且つ之をして常規の誓約を爲さしめて事件を終結せり、是を以て、敢てレシテリヌイ號に對せしが如き手續を施すに及ばずして、引揚げたり。敵艦が露國領事館に齎したる秘密書類の內容は、固より之を知るべからざるも、强て風雪を冒し、封鎖を破り、日本艦隊の追跡を免れて、遂に斯る始末に終るに至りし衷情に至つては、敵が窮迫の情狀想察するに餘りありと云ふべし。

第三十六章　旅順口總攻擊と重砲隊大活動

第一節　攻圍軍第一回總攻擊

旅順攻圍軍の總攻擊準備は漸く完結を告げたれば愈々之を開始せんとするに當り、八月十六日軍參謀山岡砲兵中佐を軍使として先づ敵軍に降伏を勸告したり、然るに敵は翌十七日之を拒絕したるを以て軍は十九日を以て總攻擊に着手したり。此の攻擊の包圍線は左翼鹽廠より、右翼双島灣に至り、戰線實に十有餘里に亘り、前線の遠きは一千米突近きは五六百米突の距離を隔てゝ敵の要塞兵と相對峙す、全線を通じ彼我の砲數約一千門と稱せらる、盛なりと云べし。此の攻擊又大に重砲隊の力に待たざるべからず、是より先重砲隊は十七日を以て其司令部を土城子より火石嶺子の東方千二百米突の高地に進め、部下各砲臺と十分に氣脉を通じたり。而して此前夜攻擊命令は各隊に下れり。かくて十九日未明より各重砲隊は一齊に砲門を開きたり、敵が最も防禦に勉むるは二龍山、松樹山の兩砲臺にして我砲彈も自ら此兩砲臺に集中せり。敵克く應戰し彼我の砲火猛烈にして頗る壯觀を呈したり。我重砲隊は午後八時砲擊中止に至るまで一門の發彈三百を超たりと云ふ。然るに敵の防禦極めて嚴にして未だ歩兵突擊の道を開くに至らず翌二十日更に砲門を開

きぬ。此日は攻撃目標を少しく左方に轉じ、陸軍の重砲野砲と協力して、二龍山より盤龍山東砲臺、東鷄冠山北砲臺及其中間砲臺を砲撃す。茲に於て其の効果漸く現はれ、前面の砲撃點は翌二十一日拂曉に至り、歩兵の突撃を決行し多大の犧牲を生じて午前六時三十分一時東鷄冠山砲臺を占領したるも、敵の優勢なる逆襲を受け遂に之を放棄して退却せり。翌二十二日更に熾んなる砲火を敵壘に加へたりしが午前九時五十分に至り、盤龍山舊西砲臺稍や有望の曙光を呈したれば、中央縱隊は一氣進で之を占領し、勢に乘じ同北砲臺をも占頗したり。茲に於て中央左翼の兩縱隊は東鷄冠山北砲臺及ひ望臺を占領せんとし果然猛烈なる突撃を行ひ、海軍砲隊は陸軍諸砲隊と戮力して、十分の掩護を與へたりと雖、敵機關砲の威力頗る強大にして、我は多大の損害を蒙り遂に目的を達する能はずして止みたり。之を要するに旅順要塞第一回の總攻撃は不幸にして無効に終り、多くの犧牲を拂ふて唯僅かに盤龍山舊北西兩砲臺を得たるのみ。

第二節　重砲隊の敵艦砲撃

海軍重砲隊の任務は攻圍軍を援助すると共に、又敵艦隊撃攘の大任あり、是より先八月八日攻圍軍左縱隊の大孤山を攻略するや、重砲隊の第四中隊は此方面に配備しありしが、敵が、此大孤山逆襲を企つると同時に數隻の敵驅逐艦は鹽廠附近に現はれ、背面より盛に我軍を砲撃し、爲に頗る苦戰の境に在りしを以て重砲隊は陸兵に充分の掩護を與へ遂に敵艦を撃退したり。次で八月十九日より攻圍軍の總攻撃を開始するや、二十三日午前三隻の敵驅逐艦は鮮生角方面に進み來り、我軍の左翼を猛射したるを以て郭家溝にありし海軍重砲隊は一撃、之を退けたり。其後幾干くもなく敵**セバストポリ**型の戰艦は九隻の驅逐艦を率ひ再び同位置に現はれたれば、重砲隊は又直ちに砲火を開きしに敵又之に應戰し一時劇烈を極めたり、敵は到底抗すべからざるを知り急ぎ港内に遁走せり。次で我重砲隊は彼の八月十日の海戰に一大打撃を受けて、港内に蟄伏し居れる殘艦に對しても絶へず尚砲撃を加へたるに敵は常に錨地を換へて砲火を避けたり。

第三節　第二回總攻撃の重砲隊

第一回の要塞總攻撃は、豫期の成果を收め得ずして終れり、故に軍は正攻法に則り、鋭意對壕作業に着手したりと雖、砲臺の攻撃と、歩兵の夜襲は絶る時なし、而して我重砲隊は我對壕作業を終始掩護して、敵の防禦工事を妨げ、且つ港内蟄伏の敵艦攻撃等殆ど砲門を閉づるの暇なし、其の効果は極めて良好にして港内の敗艦は造船所附近を破壊せられし爲め、

此等の修理を施すの術なく、頗る困憊せるものゝ如かりき。廿五日偶々風雨甚し、此夜好機逸すべからずとなし、我中央軍の右翼は大夜襲を試みしが、敵は不意の襲撃に機先を制せられ大狼狽を極め終に死屍三百を殘して敗走す、我軍は椅子山の直下まで包圍線を進ることを得たり。翌二十六日重砲隊の十二斤砲は松樹山を砲撃しつゝありしが、乙砲隊の高崎大尉は敵彈の爲め壯烈なる即死を遂げたり。かくて九月五日に至れば、重砲隊第五中隊の三門と、第七中隊の二門とを以て獨立砲隊と爲し、同七日軍の右翼第一師團の戰線に向ひ出發したり。抑も此の地線は軍の右翼たる一師團が第一回の總攻撃に非常の苦戰を以て占領確守したる要地にして、即ち砲列を布くべき陣地は曲家屯を去る一里、高標二〇三高地に對するものにして、後方双島灣を扣ゆる相家屯の海岸なり、越へて、十八日早くも發砲準備を終へたり、旅順の運命は二〇三高地にあり。故を以て第一回總攻撃に於ても、我攻撃の中心たりしと雖容易に奪取し能はざりしなり、然れども旅順の命脈を制縛せんには必ず、この高地を攻略せざるべからざるなり、故に今回の總攻撃は此方面に對せる第一師團其の主力となり、他の方面の攻撃は之に對する牽制運動たるに過ぎざるなり。

されば攻圍軍の戰機更に熟するに及んで、陸戰重砲隊の擴張となり、即ち第二回總攻撃に活動せしむべく、更に配備を定められ筒井大尉は後夾子山前面間接射撃砲臺に、田代少佐は火石嶺子西側砲臺に、園田大尉はその甲分隊に、黑瀨大尉はその乙分隊に、山口少佐は火石嶺子東側砲臺に、細木大尉はその甲分隊に、古加大尉はその乙分隊に、十川大尉は二百十一米突司令塔山前面砲臺に、永野中尉は東北溝北方高地砲臺に、澁谷大尉は碾盤溝方面砲臺に、柳原大尉は隨家屯方面砲臺に向ひ、其他主力砲臺の位置は前に異るなし、今回來援せる永野、澁谷、柳原の三大尉は第一師團の請求に依り、專ら二〇三高地に直接砲火を開かんとするとなれり。又曩に劉士茂に設けたる砲臺は、第一回總攻撃を終ると仝時に、團山子附近に陣地を轉進し、郭家屯の砲臺は舊陣地にありて專ら東方海面警戒の任に當りたり。

第四節　第二回總攻撃の開始

第二回の總攻撃は十九日午後一時を以て愈々開始せられたり、而して右縱隊は二〇三高地、及水師營南方高地の敵壘を、中央縱隊は龍眼北方高地の敵壘を、左縱隊は全面の諸堡壘を目標として何れも一齊に砲火を開きたり。然れども左縱隊は未だ對壕作業充分ならざれば牽制運動のみにして攻撃參加の程度に至らず、但し軍の活動は右縱隊にありて、攻撃目的の主腦は二〇三高地なり、茲に於て各突撃隊は工兵を先頭とし爆藥携帶の歩兵之に次ぎて進發し、砲火の威力を待つて猛然突進せんとす。海軍重砲隊は陸軍の各砲隊と共に

各々豫定の目標に向ひ、全線に亘る重砲野砲一齊に火蓋を切りたることとて、殷々の響きは天地を震動せしめ絶大の壯觀を出現したり。須臾にして砲撃の効果現はれ、各突撃隊は突進す。然れども敵の機關砲甚だ猛烈にして、容易に近くを得ず、此の日の攻撃は各方面ともに得る所なく、翌二十日苦戰惡鬪の結果は稍や見るべきものあり。即ち、「クロパトキン」砲臺、及び水師營の南方四個の砲堡を占領し、進で標高百七十四高地の東南に在る二個の堡壘を占領したり、然れども獨り二〇三高地は其頂巔の西北角に攻め登るも、敵は其堡壘を死守し頑强に抵抗したるを以て、遂に目的を達する能はずして二十二日午後六時攻撃を中止し舊陣地に引返せり。重砲隊を始め陸軍の各砲隊も死力を盡して掩護を與へたりと雖、第二回の總攻撃は二三敵壘の占領を得たるのみにして、其の目的たる二〇三高地の奪取は遂に能はずして止みぬ。

是時に當り波羅的艦隊東航の風説は將に事實となれり。旅順艦隊は既に敗頽したりと雖波羅的艦隊にして東航し之と相策應せんか、又侮るべからざるものあり。故に彼が未だ來着せざるの以前に於て旅順艦隊を殲滅せざるべからず。然れども攻圍軍現下の形勢を以てしては、遺憾ながら之を遂行する能はざるなり。我聯合艦隊將卒は焦心に堪へず、茲に於て聯合艦隊は重砲隊をして專ら敵艦撃滅に勉むべく命を同隊に傳へたり。重砲隊は此の命に接するや、攻圍軍の掩護は其必要の程度に止め、一意敵艦砲撃に其全力を傾注したり、

第五節　陸海軍砲隊の敵艦砲撃

波羅的艦隊の東航に就ては、攻圍軍に於ても、亦た等しく職合艦隊と共に苦慮する處なり、然れども攻圍軍現下の砲力は、海軍に援助を與へて旅順艦隊の撃滅を決行するの餘力あらざるのみか、却て海軍の力を假りて政圍作業を爲すの現狀なり、故に重砲隊に於ても陸軍掩護に其一部の力を割かざるを得ず、故に專心港内の敵艦砲撃に任ずる能はざるなり。此に於て攻圍軍は種々謀議の末、大に攻城砲兵部隊を擴張し此に徑、重砲の内地より到着するを待つこととなれり、かくて十月初旬を以て東房身附近に陣地を撰定し其据付を結了す。此に至りて海軍重砲と匹敵する巨砲を得、前面の敵壘を砲撃すると共に海の重砲隊隊と協力して港内敵艦の撃滅に努むることとなれり。

先きには有力なる海軍の重砲あり、今又陸軍の巨砲を加ふ、其威力や既に大なり、港内の敵艦それ果して如何、重砲隊が港内攻撃を開始したるは第二回總攻撃の數日後なり。陸軍の重砲は其後十有餘日にして海軍重砲と共に益々敵艦を猛撃し殆んど起つ能はざるに至らしめたり。左に最も觀察の詳細なる攻圍軍の報告を假り其効果の情況を擧ぐ、九月二十

八日午前十時より午後五時迄に至る海軍砲の間接射撃は、敵艦に命中したるもの八彈にして爲に一艦は大火災を起し、敵は頻りにその消防に努めつゝあるを認む。三十日海軍砲の港内砲撃は、**ペレスウイット**、及**ポベーダ**に各六七發を命中せしめ、**セバストポーリ**は爲めに東港に避難す。十月二日陸軍大口徑砲及び海軍重砲の協同砲撃は、**ペレスウイット**に大損害を與へ、艦砲一門を破壞し他の敵艦何れも大破す。十月四日の協同砲撃は**ポルタワ**、**ポベーダ**、**ペレスウイット**等に數發命中せり。十月五日陸軍砲は**ポルタワ**に數發命中し、海軍砲は老虎尾半島にある、大建築物を破壞し三棟燒失せしむ。十月六日の協同砲撃は又**ポルタワ**、**レトウ井ザン**に各二發を命中せしめ、又其の一發は老虎尾半島にある倉庫に命中して大火炎を起さしむ。以上を綜合するに**ポルタワ**、**ペレスウイット**、**レトウ井ザン**の三艦は既に運動力を有せざるに至るべし、果せるかな六七の兩日は此等乘込の水兵多數上陸せり。同十二日の砲撃には又た二三の敵艦火炎を起し、何れも十二三分間火煙を揚げたり。爾來引續ぎ協同砲撃を勵行しつゝありしが、敵艦艇を始め松樹山砲臺、器機局等に幾多の命中彈は多大の損害を與へたり。而して二十五日午后二時海軍砲は、白玉山右方に在りし千餘噸の滊船を撃沈したり。以上は第二回總攻撃後より第三回總攻撃に至るまでの敵艦砲撃なるが、我砲火の力偉大にして敵艦に多大の損傷を蒙らしめたる此の如し敵の困憊苦境察知するに餘りあり。

第六節　第三回總攻撃と旅順艦隊

港内協同砲撃の間に於て攻圍軍は鋭意對壕作業に勉めたりしが、漸く十月下旬に至りて完成したれば、二十六日を以て愈々第三回總攻撃の決行を見るに至れり。先是、重砲隊は其幕營を碾盤溝西方に移し、于大山前方に砲臺を轉ずる等、多少其の攻撃地を變更せり、又陸軍の大口徑砲は碾盤溝、姜家屯、團山子、王家甸、鞠家屯の各要地に配列したり、而して攻圍軍の一般方略は、右縱隊は松樹山を、中央縱隊は二龍山を、左縱隊は東鷄冠山以東の砲臺を、何れも其前面の散兵壕を占領し、次で砲撃の効果を待ちて砲臺に突進すべく豫定の目標を定むと雖、從來の如く直ちに突撃に移るを避け、砲火の威力充分に現はるゝを待つことゝしたり。此に於て各砲隊の任務は益々重大となれり。即ち今回總攻撃の成績如何は各砲隊の責任なり、故に攻城砲兵隊司令官豐島少將は、砲撃開始に先だちて、各砲の射撃計畫案を立て、其攻撃法を三期に分ち、砲撃開始より歩兵の突撃に移るまでを第一期とし、專ら目標の敵砲壘を撃破することに勉め、次に突撃を開始して敵壘に迫り之を確實に占領する迄を第二期とし、其間は歩兵突撃を掩護するを以て砲隊の任務と爲し、突撃隊が更に進んで

圍廓内に迫るの時を三期とし、此期間亦援助砲撃を與ふることゝ定め、之を各砲隊に示し茲に第三回の總攻撃の準備は完結したり。

總攻撃開始の日は來れり。即ち十月廿六日午前七時陸軍大口徑砲、及海軍重砲は一齊に砲門を開けり。殷々轟々の響は天地を震撼せしめ、耳爲に聾せんとす。誠に空前の壯觀を呈したり。前節に述べたる攻撃目標の諸砲壘は爲に砲彈に埋められんとす、我砲火の威力既に如斯、結果亦良好にして、二龍山、松樹山、東鷄冠山等の砲臺に多大の損害を與へたるも、爰には只海軍重砲の効果のみを記せんとす。此日重砲隊は以上の諸砲臺を攻撃せしが、概ね港内及び器機局を目標とし尠からざる損害を與へたり。二十七日の砲撃は海軍重砲は、東鷄冠山、松樹山、椅子山、案子山、白玉山、二龍山、造船所及び敵艦を砲撃せり。就中其効果の著大なるものを擧ぐれば、東鷄冠山砲臺に於ては、一の砲車を破壞し、二龍山砲臺の北正面東端より中央に至る間の歩兵踏架を破壞し、掩蓋を粉碎し、輕砲二門を毀損し、東正面の砲一門を破壞す、又其東南角の掩蓋を破壞し、其附近の機關砲二門を粉碎せり。次に松樹山砲臺に於ては、凸角部の砲臺を傾斜せしめ、左翼面中央部に在る十二珊砲一門を毀損し掩蓋を破壞したり。二十八日更に砲撃を續行し海軍砲は、西大陽溝、椅子山、案子山の各砲臺、東港内の軍艦及び西市街を砲撃せしが、其重なるものは椅子山砲臺に於ては十二珊加農砲一門を顚覆し、掩蓋を破壞せしめ、西大陽溝北砲臺に於ては備砲其他築構物を破損し、西市街に於ては火災を起さしめたり。二十九日益々砲撃を勵行し成果頗る良好にして、我軍の命中彈數三百五十に達したり。此日海軍砲は西大陽溝、椅子山、案子山、毅前軍左營、白玉山、松樹山等の各砲臺を猛撃し、西大陽溝の火藥庫を爆發せしめ、西港内に繫留せる掃海艇五隻を砲撃し内三隻に大損害を與へ、二隻に火災を起さしめたり。三十日午后一時、四日間に亙る砲火の威力漸く現はれたるを以て各縱隊は齊く攻撃を開始し、連續以て翌三十一日に及び、苦戰惡鬪の限りを盡したりしも、不幸にして、豫定の効果を收むる能はずして、僅かに一戸砲壘及東鷄冠山の西北敵壘を得るに過ぎずして、茲に攻撃を中止するの已むを得ざるに至れり。此攻撃中止後より十一月二日に至る間に於て、海陸兩砲隊は協力して、港内及造船所附近を砲撃したるに、**ギリヤーク**に數彈を命中せしめ、三千噸内外の汽船五隻を撃沈し埠頭附近に火災を起さしめたり。

既にして十一月三日となれり。炎熱燃ゆるが如き遼東の野に活動を始めたる我海軍重砲隊は、早くも白雪皚々たる天地を迎へ、此に天長の佳節を、旅順の港頭に於て祝せんとす、此間敵の砲壘に、艦船に、幾多の損害を與へ、効果著々揚りて、旅順艦隊の運命は既に我手中に握ると雖、攻圍軍の作戰計畫は不幸にして幾度か事、豫期と違ひ比較的多くの犧牲を供し

前途亦豫期すべからざるものあり攻圍軍將卒の心事眞に察するに難からず

茲に十一月三日午前九時海軍重砲隊は遙拜の式を終ると共に里井指揮官最も趣味ある考案を立て、部下各砲隊に命じて天長節の祝砲に擬し百一發の實彈を敵の砲壘及市街に放たしむることとしたり。其發射地點は左右中央の三區に分ち、右翼は碾盤溝附近に設けある三個砲臺をして、東港內敵艦造船所及び元寶房附近の兵營倉庫等に對して、合計百一發、左翼に於ては郭家屯附近に設けたる三砲臺をして、望臺背面の敵集屯地東港內の造船所及び嶗崖嘴砲臺に對して合計百一發、中央方面に在りては火石嶺子附近に設けたる四個砲臺をして、東港及松樹山砲臺に對して合計百一發を、規定の如く正午を以て放たしめたり。此三百三發の祝砲の効果は直ちに現はれ、午後零時十五分頃に及び東港附近に大火災を起し、黑煙濛々として天に沖し、益々延燒せんとす。之を見たる火石嶺子の砲臺は更に二十發を、郭家屯の砲臺は三十發を火災所目蒐けて猛射したれば、其混亂云ふべからざる一種の奇觀を呈したり。重砲隊は此の祝砲了ると共に避難所に到りて祝盃を擧げたりしが、敵は總攻擊とや思ひけん、一時頻りに狼狽して我に應砲したりしも笑止なりき。

既にして波羅的艦隊の東航は愈事實となり、其先發の一部隊は早くも本國を出發せり。是を以て、攻圍軍も第三回總攻擊後は日夜多大の苦心を以て、從來に幾倍する大規模の攻城工事を起して、之が進行を急き、傍ら海軍重砲隊と協力して前面の諸砲臺及港內の敵艦船、造船所、市街等、連日猛烈なる砲擊を加へつゝありしが、十一月中旬我精細なる觀測の示す所によれば、敵の損害は豫想以外にして、諸砲臺の掩蓋等は殆ど損害を受けざるなく、器機局附近の諸建物は見る影もなく破壞せられ、又港內の敵艦は、八月十日の海戰以來其修理に苦心しつゝありしが、間斷なき我砲擊に遇ひ、既記の如き大損害を蒙り、今や全く修理を斷念し朝に東港に移り、夕に西港に隱れ、以て僅かに其命脈を繫くと雖も、其の乘組員の多くは既に陸上の各砲臺に配備せられ、之を操縱するの力なく、運命日一日と逼迫して我軍門に降るの日彌々近きにあるべしと察せらる。

第七節　二〇三高地の占領

第三回總攻擊中止後、新たに着手したる攻城作業は、十一月中旬に至り漸く其完了を告げ、又更に第七師團の來るありて、士氣益々旺盛となり、砲火の威力大に現はれ、此に愈々一大活動を許すの時機となれり。況や波羅的艦隊は既に蘇士運河に入りたる秋なれば、最早旅順に餘命を與ふること能はざるなり、乃ち十一月二十六日午後を以て、松樹山以東の各砲壘に對して、全軍總强襲を開始したり。此日中村少將の特別拔刀決死隊は、松樹山砲臺を乘

越へ比較的防禦の薄弱なる旅順街道を經て、敵の背面に出で、舊市街を混亂せしめんとするの劃策なりしも、事豫期と違ひ、苦戰惡鬪遂に松樹山、附近一帶の地は死屍累々殆ど全滅に近き損害を蒙りて、退却するの已むなきに至れり、其他全線の各突擊隊も非常の苦辛と困難とを以て砲壘外線に肉薄し、其外岸斜堤の如きは占領したりと雖、敵の防禦は、至堅至牢にして、容易に內廓に突入すること能はざりしなり。噫、旅順は實に難攻不落歟、吾人は此節を編むに當り慘憺なる當時の狀況を記せし軍人諸士の日誌を閲して、悲絕慘絕の情、轉た禁ずる能はざるものあり。然れども旅順の陷落は戰局の發展上、甚だ其急を告ぐるの時に於て、多くの犧牲を供するも亦已むを得ざるなり。是を以て特別決死隊の決行を終るや、此の死體收容の爲め彼我の軍使會見し敵も亦た我れに助力を與へ懇に之を運搬し、悉く之を收容するを得たり。然るに敵は此の襲擊に於て、松樹山以東の友軍を援助する爲、二〇三高地附近の守備稍々薄弱となりたるを以て、我軍は好機逸すべからずとし、松樹山以東の攻擊は牽制的に止め、豫て突入の機を窺ひ居たる軍の右翼は、新鋭の第七師團を攻擊主隊とし、第一師團其後援となり、中央軍又力を添へ、二十七日拂曉より猛烈なる砲擊を開始し、續て勇敢なる步兵の突擊を行ふこと、二十九日まで三日に亘り、茲に又空前の悲慘壯烈なる結果を現出したり。當時英國の觀戰將校「ニコルソン」中將をして、「二〇三攻擊ほど猛烈なる戰は、我未だ之を知らず、戰爭と謂はんより、寧ろ彼我の虐殺と謂はん哉、又見るに忍びず」と嘆息せしめたり。然るに三十日午後五時頃、西南部より進みたる一隊は頂巔約三十米突に肉薄し、七時頃增援隊を得、猛烈なる勢を以て頂巔に向ひ、突擊し遂に之を占領す。又東北部より向ひし部隊も相尋で突進し來り、午後八時を以て、茲に全く二〇三高地全部を奪取したり。而して又之れと仝時に、赤坂山一帶の地も遂に我有に歸したり。然るに爾來敵の逆襲絕ゆるなく、爲めに未だ確實なる占領と云ふ能はざりしも、我軍は每次之を擊退し、越て十二月六日に至り、愈々之が占領を確實にするを得たり。

既往數閱月、幾多の犧牲を拂ひ有ゆる辛酸を嘗めて纔に占領し得たる此二〇三高地は、抑も如何の價値をか有する。謂はずもがな、旅順の死命を制すべき唯一の樞要地たり、其の之れ有るが爲に幾度か我が攻圍軍を惱し、又彼の敗殘艦隊も猶餘喘を保ちしなり、今や此金城湯池は遂に我有に歸す、自餘の砲壘遂に保ち難く、艦艇復た隱るゝに處なし、茲に於て從來僅に彼の海鼠山高地の觀測に依りて港內を砲擊しつゝありし海軍重砲隊、及陸軍大口徑砲隊は、直ちに此二〇三高地に觀測所を設け、敵艦全滅に努めたり。而して市街砲擊用としては、其直下なる赤坂山に礮盤溝砲臺を移轉せしむるに至れり。

一望廣濶港內に浮游する敵艦は、悉く我眼界にあり、之を狙擊する亦我意の如くなれり、憐

むへし旅順艦隊の殲滅愈々數日の内に迫れり。

第八節　旅順艦隊の擊滅

黑井海軍重砲隊指揮官は、連日發射の結果を觀測せん爲め、二〇三高地占領の確實となりし十二月六日を以て、頂巔に到り港内を瞰下せしに、其荒凉たる豫想の外にして、敵艦**ポルタワ**は既に沈沒して、老虎尾の尖端二百米突北の海底に膠着し、又**レトウ井ザン**は著しく左舷に傾き、其東方百米突を隔てたる處に在り。而して當日迄の命中彈を算すれば**ギリヤーク**に五發**ポベーダ**に三十四發、**レトウ井ザン**、及**パルラダ**に三十二發、**ポルタワ**に十一發、其他濠船、水雷艇、驅逐艦掃海艇等に命中爆發を認むるもの其數殆ど百に近し。陸には敵の火藥庫を爆發せしめ、或は機器局、造船所倉庫等の建築物を燒失せしむる等、効果着々揚りて士氣又大に振ふに到れり。七日の砲擊に於ては、**ペレスウイット**火災を起し、**ポベーダ**は右舷に傾斜して艦腹を現はし、**ポルタワ**は前日の如し。**ペレスウイット**は沈下の度を增し、海水後部上甲板を沒す**パルラダ**は**レトウ井ザン**と**アムール**の間にありて明ならずと雖も、艦首少しく沈下す、**パヤーン**は前甲板に稍久しく火災を起せり。以上は重砲隊が二〇三高地に在りて親しく觀測したる當時の報告なり。之を案ずるに敵の戰鬪艦四隻は既に全く、戰鬪力を失し遂に沈沒の悲運に迫りたるが如し。而して殘艦は**パルラダ**、**パヤーン**、**セバストポリ**の一戰艦二巡洋艦にして、他は微弱なる小艦艇に過ざるなり。八日砲擊の結果は、**パルラダ**は巨彈八發を蒙り、爲に大火災を起すと同時に、左舷に傾き艦尾より漸次沈下して、遂に戰鬪航海力を喪失したることを確認せられたり。次に**ギリヤーク**は命中十一發にして遂に廢艦に飯せり。又**パヤーン**に命中せし彈數二十二發にして午前十一時三十分より火災を起し、午后四時十五分に至るも鎭火せず、其際未だ沈沒せざりしも遂に敗艦となるに至れり。**アムール**は十四發の命中にて、艦尾漸次沈下して是又廢艦となれり。其他機器局附近の倉庫建築物等に命中せるもの三十六發にして、多大の損害を與へたり。而して僅かに餘命を保ちし**セバストポリ**は翌九日黎明窃かに港外老鐵山下に避泊せしかど、我水雷艇の襲擊により遂に廢艦となるに至れり。

續て十二月十一日を以て、戰鬪艦四隻、巡洋艦二隻、砲艦一隻、及一隻の水雷母艦、合計八隻の命脈を斷ちたり。茲に愈々旅順艦隊を殲滅せしめ、海軍の單局に一大發展を與へたる重砲隊の功蹟又大なりと云ふべし。然れども攻圍軍は未だ攻城作業結了せずして、其後總攻擊を決行する能はざりしを以て、重砲隊は一意攻圍軍に援助し、廿九日總攻擊を以て、遂に二龍山を陷れ、卅一日又松樹山を占領し、疾風迅雷の勢を以て、卅八年元旦、望臺一帶より日砲

臺附近を奪取し、翌二日を以て、愈々旅順市街に突入せんとする時、敵は遂に我軍門に降りたり。

此に於て海軍陸戰隊の任務は愈々終結せり、赫々たる其偉勳は永く沒すべからざるなり、依りて乃木司令官、及び、大山滿洲軍總司令官は左の感狀を與へられたり、

感　狀

海軍陸戰重砲隊

夙ニ當軍ニ屬シ旅順要塞攻圍動作開始以來日夜砲擊ヲ以テ健鬪奮戰シ或ハ堅壘强砦ヲ碎キ或ハ艦船兵厦ヲ破リ一意勇剛軍ノ目的ヲ達成スルニ努力シタルコト玆ニ半歲此間隆暑ニ耐ヘ邪寒ヲ凌ギ屢々猛火ヲ受ケテ士氣愈々熾ナリ其功蹟偉大ナリトス

明治三十八年一月十日

第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵　乃木希典

感　狀

海軍陸戰重砲隊

右ハ十二月二十八日敵の要塞北面ノ重點ト恃ミシ二龍山ノ砲壘ヲ攻擊シ椅子山及ビ案子山ヨリスル敵ノ猛火ヲ犯シテ終日奮鬪劇戰遂ニ頑强ノ敵兵ヲ擊退シ確實ニ此ノ重要ナル堡壘ヲ占領セシハ其功著大ナリト認ム依リテ感狀ヲ附與ス

明治三十七年十二月二十九日

滿洲軍總司令官陸軍大將侯爵　大山巖

而して海軍重砲隊が當初より最後迄に生じたる犧牲者は戰死五十、重傷七十五、輕傷二百一にして合計三百廿六名の死傷者を出せり。其數固より寡少ならざるも、之を其成果の偉大なる殊に攻圍軍の損害の多大なりしに比すれば寧ろ甚だ少數なりしを覺ゆ。而も其の勳績の一半は當然此等殉難將卒の領有すべき所たり。

第三十七章　敗殘戰艦セ號の擊沈

第一節　セバストポリの港外避泊

旅順港內屈强の地點に隱くれて、巧みに我砲彈を避け僅かに餘喘を保ちし一等戰鬪艦、**セバストポリ**も、二〇三高地の我有となりてよりは遂に隱るゝに處なく、八日夜脫港準備を整へ、當時猶ほ殘存せる驅逐艦六隻を促し機に乘じて、遠く中立港に遁れんと企て、翌九日黎明私かに港外に脫出したり。然れども我周到嚴密なる封鎖は、何んぞ敗餘の一艦をして彼の欲するがまゝに逸出せしめんや。而して彼も亦我勢力强大なる封鎖線を脫するの不

可能事なるを悟り、退て自己の安全を保たんことを謀り、茲に城頭山下の崖壁に隱れ砲臺掩護の下に、尙幾何の餘命を保持せんと努めたり。當時旅順艦隊の主腦は既に殲滅して、唯此**セバストポリ**の一隻を餘すのみ、今や我全勝艦隊は其燃るが如き餘威を、此孤獨の敵艦に加へんとす、彼も亦其防禦に盡す處なかるべからざるなり。乃ち一面砲臺の掩護に依り他の一面は水雷艇の襲擊を防がざるを得ざるを以て、仝艦當時の水雷防禦は甚だ周到を極めたり、その艦首には大檣桁を横樣に浮べ、之に防禦網を張り、以て水雷の爆發を防ぎ、尙其先方四十呎許の位置に、直徑三呎内外の角材を鋼索にて繫ぎ、之を「へ」形に浮べ、又防禦網を釣し、以て防禦網切斷の虞れを防げり。彼が我水雷の襲擊防禦に努めたる斯の如し、故に我水雷艇隊が、四日間に互る連續襲擊に多大の苦辛と犧牲を供して、漸くその目的を達するを得たりしは、亦以て敵の防護の周密堅牢なりしを知るべし。

第二節　水雷艇隊の襲擊

當時**セバストポリ**の港外に出るや、間もなく海上不穩となり、小艇の航海意の如くならず爲に**セバストポリ**攻擊も遲延せしが、越て十一日午後に至り、海波漸く靜まりしを以て、其夜午前零時三十分を以て、笠間中佐(直)の指揮せる、第十五水雷艇隊の四隻は、先づ**セバストポリ**に向て、襲擊の端を啓きたり、然れども其効果確實ならず。次で正戸少佐(爲太郎)の指揮する、他の二隻の水雷艇は猛烈なる敵の砲火を冒して、適良の距離に迫り、同艦に數回の發射を遂げ、其爆發震動を感じたるも、翌朝に至りて敵情を見れば、**セバストポリ**は依然として舊位置に在り、翌十三日午前二時三十分、荒川少佐(仲吾)の指揮する第二十水雷艇隊の四隻は、猛烈なる、敵艦及砲臺の砲火を冒し、數回の水雷發射を試みたるも其効果詳ならず。然るに此襲擊に於て、我が一艇は煙突に一彈を蒙り、又他の一艇は瀘罐室に一彈の命中を受け、爲に進退の自由を失ひ、僚艇に曳かれて根據地に歸りたり。但し各艇共乘員に死傷なし、又同日午前六時、關少佐(重孝)の指揮する四隻の水雷艇隊も襲擊を試みしが、探照砲火の爲に遂に其目的を達せず、之と同時に、足立大尉六藏)の指揮する他の二隻の水雷艇は、敵艦に近つき其發射を遂げ、爆發水煙の揚るを認めたれども、効果明瞭ならず、此際二隻とも敵の砲火を蒙り、各一彈を受け、其一隻には下士卒三名の負傷者を出したり。

かくて十四日午前三時三十分、大瀧少佐(道助)及び宮本大尉(松太郎)の指揮する、二水雷艇隊は相提携して、敵艦襲擊に向ひしが、大瀧隊は烈しき降雪に防げられ、機會を失して遂に其目的を果さず、宮本隊は敵探海燈が大瀧隊を照すの隙に乘じて、非常なる降雪を冒して敵に肉薄し、其位置を探索中、互に僚艇を見失たるも、此時恰も敵軍用船を襲擊せんとして來

れる、中牟田大尉(武正)の艇と相會したるを以て、中牟田艇は軍用船に、宮本艇は**セバストポリ**に各發射を遂げ、其爆發を認めて兩艇共に引返へせしが、途上先きに烈しき降雪の爲相失したる、大尉永田武次郎の艇を搜索したれども、遂に相會せず、同艇は其後に至るも其踪跡を失せり。之れ敵彈の爲め擊沈せられ悲慘なる最後を遂げしなるべし。仝艇は「ノルマン」形三等水雷艇にして、乘組員は左の十八名なりしが一名の生存するものなかりき。

五十二號水雷艇乘組員

艇長　海軍大尉　永田武次郎
海軍中尉　山口重造
上等兵曹　水間清次郎
上等機關兵曹　奥島吾市
一等兵曹　上田駿平
一等機關兵曹　大村文吉
二等兵曹　久保國男
二等機關兵曹　吉田宗輔
三等兵曹　德月聖山
三等兵曹　古野今朝夫
三等兵曹　倉橋兼助
三等機關兵曹　高田善龍
一等機關兵　小川長松
一等機關兵　上村清八
二等水兵　堀　湊
二等機關兵　象潟牛次郎
二等機關兵　吉柳　糺
三等機關兵　荒木孫市

仝艇長永田大尉は、去る五月三日第三回閉塞決死隊に選ばれ、江戸丸指揮官附として仝船に乘組み、港口深く闖入し、指揮官高柳少佐戰死せしを以て、之に代り同船を投錨爆沈せしめたる勇士なりしなり。

以上三日に亘る**セバストポリ**攻擊は、未だ著しき効果を見るに至らずと雖、翌十五日望樓及び哨艦の觀測に依れば艦首約三尺計り沈下せるの狀態に至らしめたり。

第三節　水雷艇隊の大擧襲擊

敵艦の防禦甚だ嚴密にして、其抵抗力又意外に頑强なるに由り、襲擊の効果は從て顯著ならざりき。玆に於て我艦隊は、甚だ之を遺憾とし、一氣に擊滅せんことを議し、十四日深夜大擧して勇敢なる水雷襲擊を決行することとなれり、之に與かりしものは六水雷艇隊、及び特殊の水雷艇にして、各艇は十五日の午夜前後旅順港外に達し內田少佐(良隆)の指揮する先頭艇隊は、横尾少尉(敬義)の特殊水雷艇と共に、先づ偵察の目的を兼ねて、深く敵の碇泊地に侵入し、午前一時、敵艦及び要塞の探照砲火の下に襲擊を決行せり。此時一艇(艇長大尉田村誠造)は一彈を蒙り、他の一艇(艇長大尉中牟田武正)は四彈を蒙り、下士卒三名の負傷者を出したり、此より各艇隊攻擊の目標を定め、笠間中佐の指揮する、艇隊は敵艦防禦物の破壞及び其の探海燈光の、射條を目的として、第一に進擊し、次で神宮司少佐(純清)大瀧少佐、關少佐、河瀨少佐(早治)の各艇隊逐次敵艦に接近し、午前二時より同四時に至るの間、各勇敢なる攻擊を決行したり。就中攻擊動作の激烈なりしものは、大瀧道助の第十艇隊にして、即ち四十號、四十一號、四十二號、四十三號の各艇は、敵艦に肉薄して發射を遂げ、順次退却中、中堀大尉(彦吉)の、四十二號艇は、瞬時に敵彈數發を受け、艇長以下下士卒六名戰死、一名負傷し、艇も亦

た進退の自由を失ひたるを以て、後續艇四十三號(艇長大尉中原彌平)は敵彈雨注の下に、百方其救助に努め、辛ふじて曳行中不幸にして曳索敵彈に切斷せられ、曳艇亦一彈を受け、卒一名戰死し、被曳艇も更に敵彈を蒙り、沈沒に垂んとしたるを以て、已を得ず、生存者を收容して、艇體を遺棄したり。又同艇隊中の四十一號(艇長大尉水野廣德)も二彈を受けたり、最後に襲擊せる河瀨艇隊第十九艇隊)も敵の猛射を受け、其一艇(司令兼艇長少佐河瀨早治)の鷗は一彈を受け、卒二名戰死し、中尉高橋武次郎外卒二名負傷す。他の一艇(艇長大尉庄野義雄)も一彈を受け下士一名戰死し、卒五名負傷せり。而して艇も一時運轉の自由を失ひしが、僚艇二隻(艇長大尉邊渡眞吾、同森駿藏)に護衛せられて全きを得たり。其他各艇隊何れも敵の猛烈なる砲火を冒して、寸毫の亂るゝなく、勇敢なる襲擊を行ひ、僚艇又能く相援け、大に我海軍の技倆を發揮したり。又各艇の損傷も比較的僅少にして當夜命中爆發を確認し得たる發射水雷の數少からざりしが、翌朝望樓の觀測したる所によれば、**セバストポリ**は前日よりも更に其艦首を沈め、南々東に向ひ、風潮に依りて方位を變せざるまでに至れり。此襲擊に於て沈沒したる艇長大尉中堀彦吉の四十二號水雷艇は、「ヤーロー」形二等艇にして、同艇乘組戰死及び此襲擊に於ける一般戰死者は左の如し。

海軍大尉　中堀彦吉　　二等機關兵曹　森藤九郎　　一等水兵　富吉龍助

一等機關兵　瀧原乙藏　　一等機關兵　伊藤榮五郎　　二等機關兵　岡本玉造
一等機關兵　矢野球吾　　二等水兵　村田熊吉　　三等機關兵　山崎御吉
一等機關兵　田崎傳八　　二等機關兵　日高政一

第四節　セバストポリの最後

翌十五日夜を以て、三たび水雷の襲擊は決行せられたり。而して今回の攻擊目標は、獨りセバストポリのみならず、同艦と共に逸出したる數隻の驅逐艦、及び砲艦**オトワヌスイ**等も共に最後の始末を遂げんが爲なり。即ち同日午后四時三十分、關重孝の指揮する第一艇隊は降雪を冒して城頭山下に達し、**セバストポリ**と驅逐艦との間に突入し、各艇齊く**セバストポリ**及び**オトワヌスイ**に向ひ、近距離より發射を遂げ、毎回爆發を確認し、敵驅逐艦と百米突以内に砲戰して之に多少の損害を與へぬ。又た第六十七號艇(司令兼艇長少佐關重孝)より發せる水雷は、敵の一驅逐艦に命中す。此大膽なる襲擊中、敵の防禦砲火は頗る猛烈なりしと雖、距離極て近かりし爲め、意外にも各艇一の損害なし。又少佐神宮の指司揮する第二艇隊は、關艇隊に續て進擊し、敵艇に對する數回の發射中、少くも三回の爆發を認め、尙敵驅逐艦と砲火を交へつゝ洋心に出でたり。此襲擊中同隊所屬の二艇は敵彈の爲め三名の死傷者を出せり。江副少佐(武靖)の指揮する二十一艇隊中の一艇は(艇長大尉横地錠二)青泥

窪に在りて船體修理中襲撃命令を受けたるを以て、俄かに工事を急ぎ、江副司令自ら之に乗じ、僚艇に後れて出發したるが、遂に他艇に合同する能はず、單獨**セバストポリ**に肉薄して勇敢なる攻撃を試み、不幸にして司令江副少佐は敵彈に戰死し、卒一名負傷したるも、艇は無事集合地に歸來せり、此攻撃に於て、**セバストポリ**に與へたる損害の程度は頗る多大なりし。敵の驅逐艦一隻は此時又撃破せられて廢艦となれり。かくてその翌朝に至り敵狀を見れば、一隻の驅逐艦は帆檣を折られ海岸に擱坐し干潮に際しては其艦腹及び推進器の水上に露出するを認めたり。而して**セバストポリ**も又多大の損害を蒙りたるは確實にして、此日早朝艦員は非常の混雜を爲し、陸上より大綱を以て曳くを見たり。頻々たる我連夜の水雷攻撃は漸く其目的を遂げたるなり、茲に於て東郷司令長官は此日親しく旅順港口を觀察し、左の如き斷案を下して之を大本營に報告したり、『曩に我水雷艇隊の攻撃を受けたる敵艦**セバストポリ**は、城頭山下の海岸より約四百米突の淺水地に碇繫し、頻りに損傷部より浸水を排出するに努めたるも、今や艦の傾斜少くも十度に及び、艦首少しく沈下し、旅順口現今の狀況の下に、到底腹舊し得るの見込なく、殆んど全く其戰鬪航海力を有せざるものと確認せり、又驅逐艦一隻も確かに我水雷攻撃の爲に破壞せられ居るを認む』と。以て**セバストポリ**の末路知るべし。十五日夜の襲撃に於ける戰死者は、海軍中佐江副武靖三等機關兵曹笠原平吉、一等機關兵鈴木里利、二等機關兵岩田春次郎の四名なりき。

第五節　セバストポリ襲撃の狀況

先是、我艦隊は各艦より選拔せる兵員を、艦載水雷艇に乗組ましめ、之に假裝砲艦を交へて特殊水主艇隊となし、普通水雷艇隊と共に此の攻撃に參加せしめたり、折惡しく飛雪紛々として連日歇まず、寒威益々加はり、各艇の進航するや、甲板を洗ふ海波は乘員の被服を浸すと共に忽ち凍りて身體の自由を失ふ程なりしかど、辛ふじて敵艦に近づかんとするや、黄金山、老鐵山、嶗崖嘴其他の探海燈六條、夜襲隊を照射し、老鐵山腹の小口徑砲機關砲は一齊に我に向て猛射し、容易に近づくべからず。此に於て特殊水雷艇隊は、或る巧妙なる手段を用ひて、敵の射界を脱せんとし、暫時機の到るを俟ちたるも意の如く目的を達する能はず、其間敵彈急雨の如く來るも毫も退却せず。忽に其威力を逞うせしめ、機會の熟するを見るや、襲撃隊は一齊に敵艦目懸けて猛進し、有効距離に近きて、我劣らじと水雷を發射したり。されど敵艦は三重の防禦物を備へて堅固に之を防ぎ、加ふるに我は敵の盛なる探海燈射照の爲め正確なる標準を執る隙なく、其の目的を充分に達する能はざりしも、特殊水雷艇隊は他の特別任務を遂行したり、而も彼尚ほ頑として其の位置を保ち、容易に沈沒の狀

況なきを以て、十四日夜、更に大擧して壯烈なる水雷攻擊を決行したり。當夜攻擊隊の組織及び進航序列は前記の如にして、內田艇隊と小形なる特殊水雷艇隊は、日沒と共に前進を起し、偵察の目的を兼ねて奮進し、射擊を遂げて歸路に就けり。他の五艇隊は未だその報告に接せざるに先ち、早くも襲擊に着手したり。敵は甲乙丙隊の襲擊を爲すまでは、充分の防禦もなさゞりしが、丙隊到るの頃に及び、防禦力非常に强大となり、丙隊が連結して近距離に迫るや、他の艇隊は遠くより之を瞥見し「セ」艦の前面に到る迄は、其艇影を見るを得たるが、軈がて水雷を發射したるに、敵艦より、一種花火の如き火光水煙と共に見へ、此の爆發を聞くや、敵の探海燈は一所に集中し、砲彈又集注して艇の四邊に落下し、水煙の爲に全く艇影を見るを得ず、恐らくは悉く擊沈せられしならんと、一同手に汗を握りて凝視したるに、軈がて探海燈の南に廻る時を以て、其方に視線を注げば、全速力にて駛航する艇影を認めて、はじめて其安全なるを知り得たりと云ふ。斯の如くして、丙隊、丁隊が迫る頃、敵は我艇が廻轉する瞬間を待ちかけて、砲火を集中せり、是れ敵は漸く照準を確めたるならむ。是より各艇は猛然進んで敵艦に迫り、交々水雷を發射し成功を認めたるもの尠からず、然れども如何せん敵の砲火强烈にして、我各艇又多少の損害を受けざるはなし。然るに敵は重に先頭に進みたる艇のみに心を奪はれ、之を防禦するに專らにして、後續艇に對しては、探海燈及び砲火を送ること、比較的少なかりしを以て、我は充分に猛威を振ふことを得たり。斯の如く十四日夜の水雷攻擊は若干の成功を收め、次第に敵艦に損傷を加へ、十五日夜陰又た大膽なる襲擊を決行したり。此の夜降雪頗る激しく敵砲臺の探海燈は光微に影淡く、進擊艇隊を發見する能はず、我は反て其光を目標に突進するの利あり、急行して將に港口に近づかんとするや、敵は之を悟りしか、俄然探海燈を消し去れり。風益々吼ゑ雪愈々飛び、乾坤暗黑咫尺を辨ぜず、只記憶の方向に指針を置き、微速を以て探航しつゝありしが、俄然數百米突の前方に「セ」艦の形を發見したれば、直ちに正面隊の各艇は、各三發の水雷を發射し、確かに爆發の水煙を認めたり。此時敵は先に消したる探海燈を悉く點じ、一時に我各艇に注射したり。時に午前三時十分なりき、今や左舷に回轉せんとせし我艇隊は前方僅か二百五十米突の間に、敵の驅逐艦あるを以て、茲に砲火を開き驅逐艦と砲戰すること約七分間、敵の大小彈丸は近距離に過るを以て、反て我頭上を通過し一も命中せず、我は三艦を目標とせし爲空彈なく、殊に二三發は要部に命中して爆聲を揚ぐるを聞けり。此際敵は最も熾んに砲火を浴せたるも、我は僅かに下士以下數名の死傷ありしのみ、其れより約一時間を經て、側面隊は老鐵山麓より廻りて、敵と陸地との間に突入したり。敵は始めより正面にのみ氣を奪はれ、背面を防備せざりしに我側面隊の水雷を發射するに及んで漸く之を知り、海

岸及び敵艦より大小の砲彈を猛射したれば、茲に江副司令の壯烈なる戰死を見るに至れり。而も同夜の襲擊は多大の成功にして、翌日望樓の報告に由り、一驅逐艦の擱坐せるは、側面隊水雷の奏功せしものなることを確めたり、其後數日を經て我艦隊に收容せる信ずべき捕虜の言に依れば、十三日以來の襲擊に於て我水雷八個**セバストポリ**の防禦網に命中し、又其艦體は少くも水雷一個命中せること確實にして、後者は十五日蒙りたるものゝ如く、其水雷は左舷後部に命中し外鈑繼ぎ目の「リベット」のある部分は、凡八呎計り破損し、目下艦首を港外に向け、艦尾は海底に沈み中甲板の砲口水面に接せん許り右舷に傾き、下甲板の窓は、艦より三番目まで水中に沈めり、右舷艦尾に水雷艇一、左舷艦尾に喞筒一、及び水雷敷設船の如きものを繫留し、喞筒を用ゐて極力排水に力めつゝあるも、航海に堪ふべき程度までは容易に回復し難かるべしと云へり。以て如何に我水雷艇が壯烈の襲擊を決行したる効果と、其辛酸の大なるやを知るを得べし。

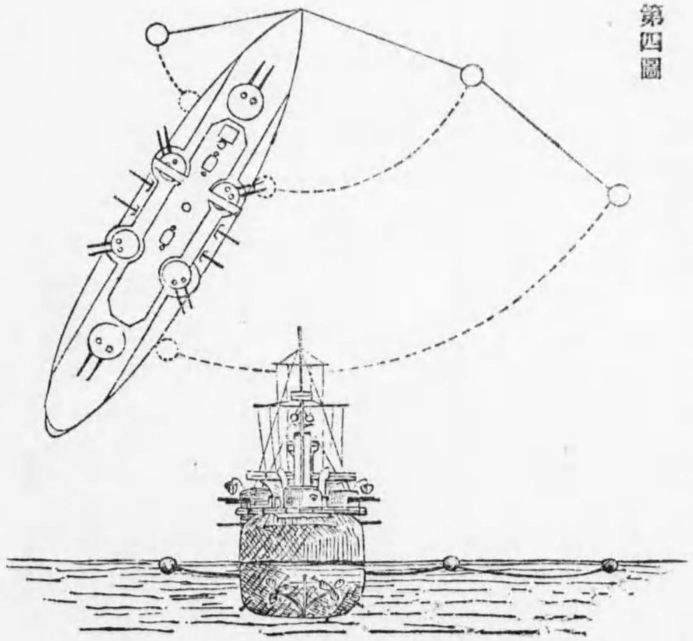
第六節　敵艦修理の眞相

開戰以來我聯合艦隊の强烈なる攻擊を受け、幾度か多大の損傷を蒙り、爆裂、火災、殆ど艦體の要部を破壞せられ、最早戰鬪、航海の力を喪失したりと想定せられし敵艦は、常に機敏にして巧妙なる修理を遂げ、屢々旅順港外に出動して能く勇武を振ひたるは、我聯合艦隊の將士を始め、列强專門家の驚歎に價ひせし所なり、殊に六月二十三日、八月十日の脫出奮戰の如きは、寧ろ敵軍以外の不思議としたる所なり、今や彼等は我攻圍軍の重砲の猛烈なる威力により全く擊沈破壞せられ、僅に餘命を港外の避泊によりて保ち得たりし戰艦**セバストポリ**の最後も、上記の如く執拗熱心なる我水雷艇襲擊の結果既に敗滅に歸せしと雖、其如何にして不完全なる船渠にありて、而も材料空乏の間に於て、能く大修理を完成し、以て幾度か我艦隊の鋭鋒を受くるに至りしか、其修理の方法に就て、今**セバストポリ**艦長海軍大佐エヌ、オー、プオン、エッツセンの語りし要項を摘載し併せて水雷の威力、及砲火の威力が、如何に彼等を窘めたりしか圖解を加へて詳記すべし。

『二月八日の夜、魚形水雷の爲めに傷きたる**バルラダ**は間もなく辛ふじて、自己の機關を以て船渠に入り、**ツエザレウ**・**チ**・**レトウイザン**は內港に曳き入れられ、木匣（ケーソン）を用ゐて修理を行いしが**バルラダ**は四月初旬に他の二艦は六月二十日頃に工事竣成せり。又戰艦**ポベーダ**は四月十三日**ペトロパウロスク**の沈沒の不幸を見たる際、將に港に入らんとして觸發水雷に罹り、非常なる損傷を被りしも、是亦木匣（ケーソン）を用ゐて巧に修理し、八月十日の海戰に參加するを得たり。

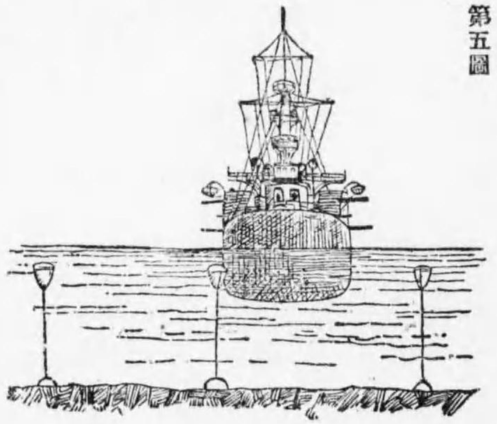
六月二十三日の海戰に我**セバストポリ**は、不幸にして、日本の敷設水雷に罹り、右舷、前檣の後方、水線下約七呎の處を四百平方呎許り爆發せられたり。破孔は幅七呎、乃至十呎長サ三十五呎乃至四十呎にして、肋材の折れ、若しくは内方に曲れるもの總て十本、外鈑は内に向て吹き破られしが、是亦内港に曳き入れ、堅固なる木匣を破孔に當てゝ之を修理したり。木匣は九吋角の材木に或は柄を造り、或は溝を穿ち、鳩尾接合法に由て組立てたるものにして、長さ約二十五呎、底の幅十七呎乃至二十二呎、匣の外側と、舷側との間隔約十呎、深さ三十二呎乃至三十五呎、底の内端より外側に斜に太き支柱を渡し、又對角鉸釘を用

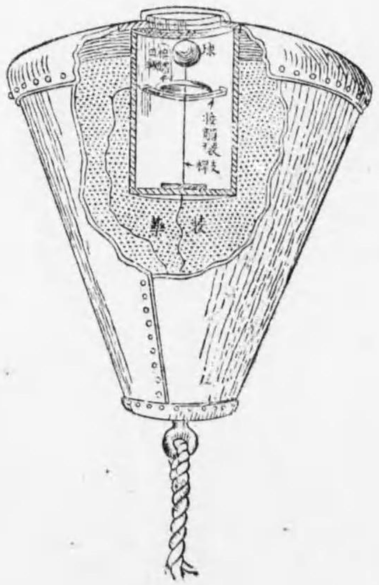
第四圖



ゐて外側と底とを緊結して、益々構造を丈夫にし匣の外部は帆布にて包被し、其上に瀝青を流して水漏を防ぎたり、斯くて此匣を破孔の處に運び數條の索を用ゐて、底の内端を副龍骨の上に置き之を支點として、舷側に密着せしむ、索は或は其一端を匣の上端に結着して、他端を甲板上の「スティーム、ウヰチン」に取り、或は艦底の下を通じて左舷に取り匣を艦體に緊結す、匣と舷側と接着する所には帆布にて裏める麻衝帶（パッキング）を用ゐて之を水密にし、匣内の水を排出すれば外部の水壓匣を舷側に壓着し、相離るゝの虞なし、それより工事を始め破れたる外鈑は

第五圖





鉸釘を切りて之を除き、肋材は役に立たざる部を切り取り、新規の肋材、外鈑一方に於て木匣製造、外鈑、肋材の切取り工事中一方に於ては工場に於て適當なる肋材外鈑を製造す)を取付け、舊狀に復せしめたり、竣工期間は六週日なりしが、此間に新しき肋材を造り、而も彈丸の下に工事を行へることを思へば、其功績賞揚に値す。

然るに同艦は、九月廿日、港外に出動中不幸にして再び敷設水雷に罹り、不思議にも前きの創痕を爆破せられしが、其水雷非常に大にして、裝藥量確に四百斤に上れるものなりしが如く、爆破力劇烈にして破孔七百平方呎に及び

第二圖

「セヴストーポリ」ノ破孔ト木匣正面圖

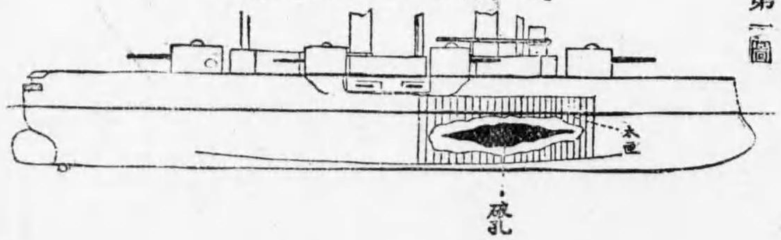
旅順艦隊ノ行動「セヴストーポリ」艦長及副長ノ談ニ據ル

漏水甚しく船體大に傾斜せしを以て、左舷の「キングストン」弁を開き水を入れて船體を起し復もや木匣を當てゝ之を修理したり、時恰も日本軍の十一吋臼砲威力を逞うし、或時は同榴彈一發木匣の上部に位する艦橋に中りて炸裂し、破片飛散して、甚しく匣の外側を破壞し、海水盛に漏入して、大に工事を妨げたる等のことありしも、約二ヶ月半にして竣工し、航海力を回復せり。

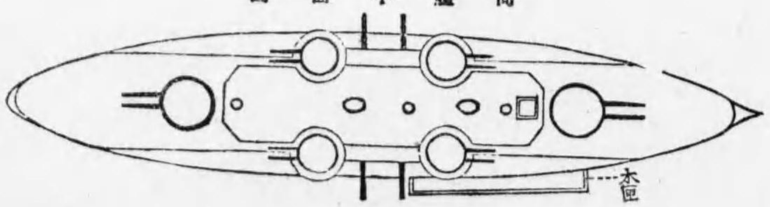
かくして、旅順艦隊は忍び難き逆境に立ちて、屈せず、撓まず頽勢を換回せんと黽勉努力至らざる所なく、十一ヶ月に亘れる包圍中に前記の五大修理工事を爲し遂げたる外、水線下に受けたる重砲彈の損傷を修理すること十數度に及べり、是等修理工事は或は木匣を用

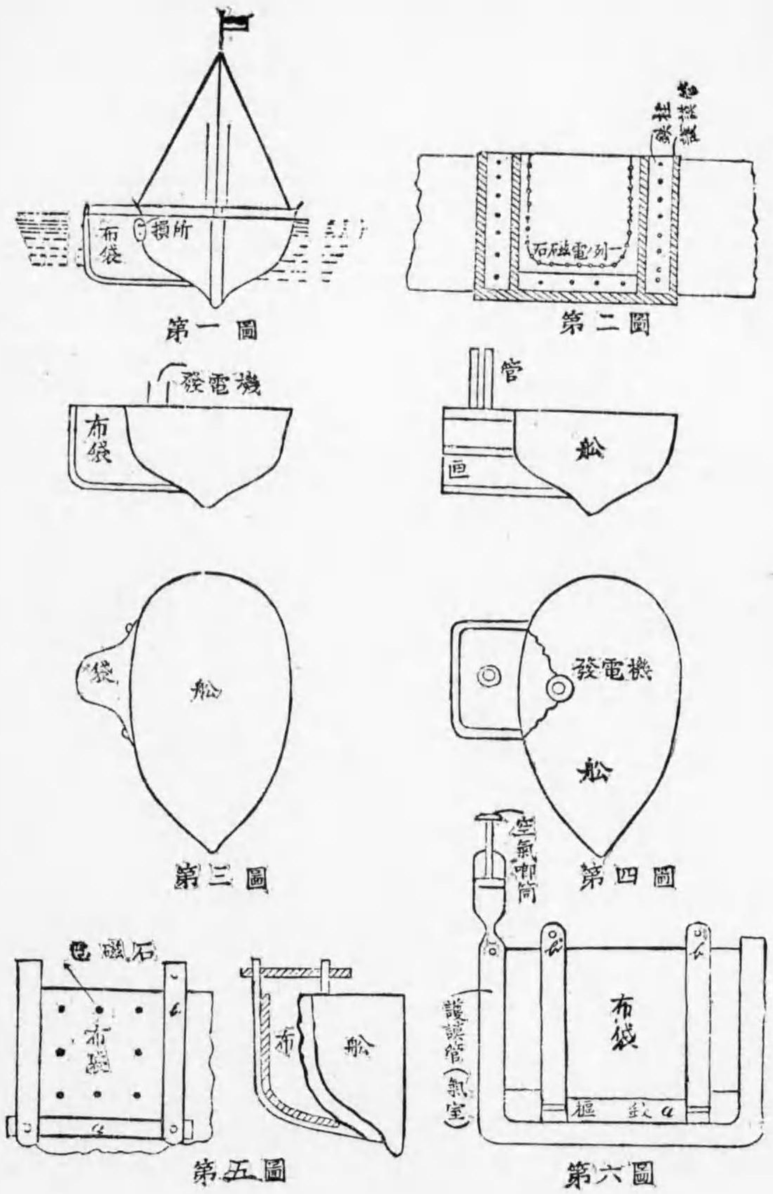
第一圖

「セヴストーポリ」ノ側面圖



艦橋平面圖





ゐて行いしが概ね彈丸雨飛の中に行へることゝて困難一方ならず、軍艦を狙へる榴彈の外れて、船渠の石壁に中り炸裂して職工を傷けたること一再にして止まらざりしも、露人は能く最後まで工事に服したり。』云云

第三十八章　戰勢確定の大報告

第一節　聯合艦隊の警戒及經過狀況

交戰十閱月、連戰連勝の我聯合艦隊は、正攻、奇襲、勇猛にして敏捷なる、殆ど端倪すべからざらしむ、縱令、幾千の人命、拾餘隻の艦艇を喪ひたりと雖、敵は我に幾倍加せる損失を蒙り、殊に第一太平洋艦隊即ち旅順艦隊は既に全く殲滅に歸し、最早其餘力を貽さず、僅に敗殘の浦鹽支隊ありと雖、曩に一艦を蔚山沖に擊沈せられ、二艦は殆ど廢物に歸するまでに大破を受け、後ち沈置水雷に傷けりとさへ傳へらる、既に久しく海上權を把握したりし我聯合艦隊は、愈よ制海の實權を占有するに至りぬ。此時に當り、長途東航しつゝある敵の第二、第三の太平洋艦隊來るあらんも、我艦隊は最早旅順、浦鹽の敵艦隊を顧念するの要なきに至りしを以て、全力を傾注して遠來の好敵を邀ふるを得べし、是を以て、東鄕司令長官は、過去十ヶ月の間に於ける、努力の結果によりて收得したる所の戰果を報告すべきの機會とな

れり、即ち是れ戰勢を確定したるの大報告にして、雄渾絶大の文字、萬古に傳ふるに足る、武勇絶倫なる攻圍軍の猛烈不撓の攻擊に依り、旅順口の死命を制すべき、二〇三高地が我軍の有に歸せしより、港内敵艦隊に對し、攻城重砲の擲射、益々其威力を逞し、**ポルタワ**、**レトウ井サン**は勿論沈沒し、**ポベーダ**、**ペレスウイツト**、**パルラダ**、**パヤーン**相次で擊沈せられたり、**セバストポリ**のみ去る九日朝、背面よりの砲火を遁れて、港外城頭山下に逸し碇泊せしも是亦我水雷艇隊の連續果敢なる襲擊に傷き、今や殆ど全く戰鬪航海力を失ふに至れり、旅順敵艦隊の主力は、事實上、茲に全く滅亡に歸し、只殘存せるは、無勢力なる砲艦**オトワズヌイ**及び驅逐艦數隻に過ぎず、此に於て聯合艦隊は、去る五月一日以來强行したる封鎖配備中、不必要なる一部を撤すると同時に、益々旅順口及び港外よりの破封鎖船の監視を密にし、且つ殘存の敵艦艇に對する警戒を嚴にせんとす、

此長日月の封鎖戰中、敵の敷設及び浮流水雷の危害、風濤濃霧の險難等常に絶へず、前に宮古、吉野、初瀬及び海門の災厄あり、後に平遠、濟遠の遭難起り、忠死の將卒、亦た少きにあらずと雖、幸にして終始封鎖を維持することを得、時に敵の脱出することありしも、毎に其企圖を破り、終に攻圍軍の至大なる協力に因り、茲に殆ど當方面敵艦隊全滅の成果を見るに及び、又浦鹽方面の敵艦隊も先に我第二艦隊のために大打擊を受けて、今後再び出動するの氣勢なきに至り、只益々大元帥陛下御威德の及ぶ所の洪大なるに感激するの外なきなり。而して此間又麾下各部隊が、各々其能力に應じて、終始能く其任務を遂行したるのみならず、死を決して敵港を閉塞したる閉塞船隊、連續倦まずして、敵前に機械水雷を沈置したる艦艇、危險を冒して敵海の掃除に從事したる特別掃海隊、並に敵彈に曝露して敵艦を監視したる前進望樓員等の特別勤務が、當方面の封鎖上に、至大の效力ありしことを具報するは、本職の上下に對する職責と信ずる所なり。

右の報告中に、本書の前章『帝國海軍の災禍』及び『帝國海軍の不幸』なる章中各節に記述したる、戰艦八島、驅逐艦曉、砲艦大島、驅逐艦速鳥、砲艦愛宕、巡洋艦高砂の諸艦が、沈沒せしことを記されざるは、右諸艦の喪失發表が該報告より後るゝ數月に及びしを以てなり。

第二節　東郷長官の復命

我聯合艦隊は、攻圍軍の背面壓迫と相俟て、遂に敵の第一太平洋艦隊を全滅し、茲に光輝ある、作戰の一段落を見るに至る。當時波羅的艦隊は尚ほ東航を繼續しつゝありと雖、我第二期の作戰計畫線内に來るは、寧ろ待遠きの感あらしめり。此に於て聯合艦隊司令長官は、

大元帥陛下の御意をも畏み、一先づ凱旋參内の上、具さに戰況を奏上することゝなれるを以て、聯合艦隊の指揮權を片岡第三艦隊司令長官に委ね、十二月下旬、上村第二艦隊司令長官と共に其の幕僚を隨へ根據地を出發して歸京の途に就けり。開戰以來殆ど一星霜、風雨波浪に暴露して、日夜制海の任務に始終し、傍ら陸上作戰に至大の援助を與へて、絶大の偉功を樹てたる我聯合艦隊司令長官は、蔚山沖の勇將たる第二艦隊司令長官上村中將等と共に、今や凱旋の途に就けり。當時國民は如何にして此一行を迎へたりしか、吾人又固より此快事を等閑に附するを得ず。此に海戰史中の一項として、其壯況を詳記し、以て後世子孫に傳へんとす。

東郷聯合艦隊司令長官上村第二艦隊司令長官及其一行は三十七年十二月三十日九時三十分新橋に着す。先是、勅使井上侍從武官、皇后陛下の御使山内皇后宮亮、及東伏見宮、伏見若宮兩殿下を始め、朝野の貴顯紳士は、新橋停車場に集まりて一行の着車を待受けたり、かくて定刻に至れば偉勳赫々たる將士を載せたる列車は、軋聲ゆるやかに萬歳聲裡に到着す、東郷大將以下は先づ御出迎の兩宮殿下に對し擧手の禮をなし、更に握手して感謝の意を表し、次に山本海軍大臣及松田衆議院議長と握手の禮を行ひ、井上侍從武官、山内皇后宮亮に御挨拶を申上げ、次で德川貴族院議長、桂、寺内、芳川、清浦、大浦、小村、波多野、久保田、曾禰の各大臣及海陸軍將校、外國使臣、貴衆兩院議員、樞密顧問官其他出迎員の重なるものと握手の禮をなし終るや、直ちに出迎の群集に擁せられて停車場を出で、豫て宮内省より差廻されたる馬車に駕するや、場外に待ち受けたる各團體の樂隊各所に奏樂す。之と同時に東京市民數萬の群集は一齊に萬歳を唱へ歡呼の聲暫時止まず。かくて大將の一行は擧手の禮を以て之に酬ひつゝ、馬車は同胞堵列の間を進行し、幸橋を渡り日比谷公園に沿ひ、途次海軍省に立寄りて少憩せり、茲に山本海軍大臣は、出征以來の慰勞の辭を叙べ、懇ろに將卒の功勞を謝し、三鞭酒を擧げて兩陛下の萬歳を三唱し、次で陸海軍の萬歳を唱ふ、午前十一時、東郷大將は參謀長島村少將、參謀秋山中佐と同乘し、上村中將は參謀長加藤少將、副官船越少佐と同乘、山本海軍大臣及伊藤軍令部長同伴して宮中に參内し、具に戰況を伏奏し奉りたるに御感斜ならず、深く嘉納し給ひ、厚く勞を慰め給へり。大將以下皆優旨に感泣して退出したりと云ふ。

當時國民が大將一行に對せし歡迎は殆ど狂せんばかりにして、其世界的大偉人としての尊敬と、至大なる帝國海軍の偉勳とに對し、如何に歡迎の誠意を表せしかは、左の國民後援會の代表者たる千家男爵より贈呈したる頌辭に徵して推知し得べし。

『征露の役は端を本年二月八日の海戰に發し、而して其勝敗の機も亦略此の一擧に決す。

爾後連戰連勝遂に旅順艦隊を全滅し、東洋方面に敵國海軍の勢力を失はしむ、嗚呼此聯合艦隊の大勳偉功長く青史を照輝すべし、其間旅順を閉塞し、水雷を沈設し、或は襲撃應戰し、或は掃海觀測し、各般の任務を盡して、着々旅順艦隊を制し、又風浪濃霧の危險を冒し、浦鹽艦隊を擊破す、其勢の多大なること、其功の顯赫と相匹す、國民が聯合艦隊に對する感謝の情は、言語文章の能くすべきにあらず、我海軍が此偉功を奏し國威之に依りて伸び、國民之に依りて安きを得る所以のものは、我　天皇陛下の稜威と、海軍々人の忠勇とに依ると雖、抑も又將軍の統率指揮其の宜きを得て、能く戰機を制し、將士をして其能力を盡さしめたるに依らずんばあらず、國民久しく將軍の危險を冒して心力を勞さるゝを想見し、其或は健康を損せん事を恐れたり、今や東洋に於て敵艦隊を殄滅し、其任務の一段落を告ぐるに際し、大命を奉じて還旋せらる、國民は將軍が健康の狀を見て感喜する至情例ふるにものなし、嗚呼前途の事將軍の力に俟つ事極めて多し、抑々將軍を頌するは、我海軍を頌する所以にして、將軍に感謝するは、我聯合艦隊に感謝する所以なり、此に蕪辭を呈して、將軍及一行將校の勤勞を謝し、謹んで其健康を祈る』

と。斯くて大將等は、前途尚ほ遼遠任務重大なるもの之れあるを辭とし、謙讓して、切願せる市民の歡迎慰勞の催會を辞退せらる。然れども都下百五十萬の士女は、寧ろ催會に優るの誠意を以て、其凱旋の事を喜悅したり。又以て一般國民の心情を測知するに足れりと云ふべし。

第三十九章　旅順開城と敵艦殄滅

第一節　旅順の開城

旅順の敵軍は、遂に明治卅八年一月一日を以て降伏せり、無比の天險と多年の人力とを以て、難攻不落と世界に歌はれ、敵國の誇負したる、スエズ以東第一の要塞は、我壯烈なる陸海軍勇將猛卒の手に依て陷落せしめたり、想起すれば、客年末に於ける二〇三高地の奪取は、實に旅順要塞に對する大打擊にてありし也、彼の高地一度落ちて、敵艦隊の砲擊に至大の便利を與へたると共に、攻圍軍の作戰も亦た大發展をなしたり。即ち港內敵艦の擊滅に次で、港外の水雷奇襲となり、陸には二龍山、松樹山を占領し、勢に乘じて猛進突擊能く盤龍山、及東鷄冠山砲臺を落し、破竹の勢を以て將に市街に突入せんとするの際、敵は百戰力盡き、敵將遂に我軍門に降りて自ら開城を請ふに至れり。我軍司令官乃木大將は之を許容し、攻圍軍參謀長陸軍少將伊地知幸介、及ひ參謀陸軍中佐岩村國次郎を委員として差遣せり。翌二日兩委員は水師營に於て、開城の規約を議し、同日午后四時三十分結了したるを以て、茲

に兩軍の戰鬪行爲を停止し、逐次一切の物件を受了して、十三日午前十時我軍は壯嚴なる入城式を擧行したり。

是より先一月一日我聯合艦隊は、旅順開城に先ち、敵艦隊の主力は早くも擊破して光輝ある海戰の一段落を告げたり。然れども尙ほ敗殘の小艦艇あるを以て、聊かも懈怠する所なかりき。是に於て從來封鎖配備中なる不必要の一部を撤して、港口の封鎖監視を嚴密ならしむると共に、殘存艦艇の警戒に努めたり。尋で東鄕司令長官は、封鎖區域一部撤去に關しては左の宣言をなせり。

『本官は帝國政府の命を受け、明治三十七年五月二十六日宣言したる遼東半島封鎖區域を變更し、明治三十八年一月四日より清國盛京省遼東半島口角より楔頭に至る一直線以西の沿岸を、帝國軍艦の充分なる兵力を以て封鎖し、之を維持すること、幷に封鎖を破らむとする一切の船舶に對し、國際法及帝國と他の中立諸國との條約に於て、許容せられたる一切の强制手段を用ふべき事を玆に宣言す。』

明治三十八年一月一日

帝國軍艦三笠に於て

聯合艦隊司令長官　東鄕平八郎

第二節　敗殘艦の處分と生還者

旅順艦隊の主力殄滅したる、三十七年十二月三十一日、我東鄕聯合艦隊司令長官は、大命を畏み、上村第二艦隊司令長官と共に、其幕僚を率ゐて歸朝復命したれば、港口封鎖及び敗殘艦艇處分の任は、之を片岡第三艦隊司令長官に當らしめたり。一月一日敵將の開城降伏を我軍に乞ふや、尙ほ未だ我砲彈を免れて、窃かに蠢動しつゝありし、敗餘の小艦艇は、玆に愈々覺悟を定め、其多數は此夜自ら爆沈したりしが、六隻の驅逐艦は夜陰に乘じ、遠く中立港に向ひ、我封鎖線を脫出したり。乃ち**スコールイ**、**スタートヌイ**、**ウラストヌイ**、**セルチーツイ**の四隻は芝罘に、**ギイキー**及び**スメールイ**の二隻は膠州灣に向へり。玆に於て我哨艦艇は直ちに之を追躡したるも、彼は畢生の速力を出して、遂に目的地に遁入せり。依て第六戰隊司令官東鄕正路は、千代田、龍田、及び驅逐艦不知火を率ゐて、膠州灣に到り、獨逸官憲の手を經て、之が武裝の解除をなさしめたり。又芝罘に向ひし秋津洲、及び朝潮も、等しく之が武裝を解除したるを確めて同地を引揚げたり。玆に至りて敵艦隊主力殲滅後の處分も悉く結了したれば、此任に當りたる片岡第三艦隊司令長官は其報告に附記して曰く、『遁逃の殘艦を追躡し、遂に武裝解除を確かめ、敵艦隊の全部を殲滅し得たるは、一に　大元帥陛下の御

稜威に因るものにして、又勇敢忠烈なる陸軍の攻撃、敵艦隊をして蟄伏する所なからしめたるもの與つて大に力ありたるを信じ、本職は茲に當方面に於ける最も光輝ある作戰の一段落を告ぐるに至りたるを報告す』と

されば此時に當り旅順開城を歡呼すると共に、我五千萬の同胞が、齊しく知らんと待ち設けしは、勇敢なる我海軍閉塞決死隊員が、第三回の閉塞を決行せし始末なりき。之れ當時多數の生死不明の諸勇士の消息に就ては更に聞く所なかりしを以てなり。此に愈々開城となるに及び、其決死隊員の生死不明者中、僅に左の十一名のみ生存して敵軍に俘虜となり居りしを以て、直に收容して我病院に移したり。

嚴島 相模丸	上等機關兵曹	佐野 廣太	朝日 相模丸	三等兵曹	森 金作
嚴島 相模丸	一等兵曹	河野 精藏	千代田 小樽丸	三等機關兵曹	前原貞之助
平遠 相模丸	一等兵曹	岩石善三郎	須摩 相模丸	三等機關兵曹	多田佐太郎
筑紫 小樽丸	一等信號兵曹	中野 耕作	愛宕 小樽丸	一等機關兵	米倉 貢
朝日 相模丸	二等兵曹	石川莊三郎	嚴島 相模丸	二等機關兵	竹內 夏次
明石 小樽丸	二等機關兵曹	能登原多三郎			

當時敵手に收容せられたるもの多數ありしも、多くは重傷を負へるものにして、皆旅順病院裡の怨鬼と化し、何れも悲慘なる最期を遂げたること明らかとなれり。

第三節　海軍作戰第一期の終了

百戰力盡き、旅順の守將遂に降を乞ひ、陸には其要害無双の堅壘我有に歸し、海には精鋭稀なる太平洋艦隊全滅し了る、此に於て我海軍は從來の封鎖を解除し、新たに此に鎮守府を設け、軍政を布きて此新占領地を治むる事となれり。此に至りて　陛下は深く此攻擊に從事したる海陸將卒の功勞を嘉みし、優渥なる勅語を賜ひ、皇后、皇嗣又共に令旨を賜はりたり、茲に謹みて其勅語と令旨を記し、敢て區々の賛詞を載せず。

勅　語

旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎭ナリ、第三軍及聯合艦隊ハ協心戮力久シク寒暑ヲ冒シ、苦難ヲ凌ギ、勇戰奮鬪克ク其鐵壘ヲ奪取シ、堅艦ヲ殲滅シ、敵ヲシテ遂ニ城ヲ開キ、降ヲ乞フニ至ラシム。

朕深ク爾將卒ノ、克ク其重任ヲ全フシ偉大ノ功蹟ヲ奏シタルヲ嘉ス。

皇后陛下令旨

第三軍並ニ聯合艦隊ハ水陸協戮、旅順ヲ重圍スルコト數閱月、激戰數百回、堅ヲ破リ鋭ヲ

碎キ、辛酸壯烈、防備無比ノ天堅ヲ冐シ、頑硬不屈ノ勁敵ヲ剿シ、遂ニ彼ヲシテ城ヲ開キ、降ヲ乞フニ至ラシメタル趣キ、皇后陛下ノ懿聞ニ達シ、我將校下士卒ノ忠誠義勇克ク、偉大ノ勳功ヲ奏シタルヲ、深ク御感賞アラセラル

皇太子殿下令旨

封鎖數月ニ亘リ、萬難ヲ排シテ、能ク其任務ヲ遂行シ、攻圍軍ト協力シテ、遂ニ旅順方面敵艦隊ヲ全滅シタル聯合艦隊ノ偉大ナル奏効ヲ歎尚ス、

東郷聯合艦隊司令長官は一月六日を以て左の奉答文を伏奏せり、

聖代ノ佳辰ニ當リ、勇武ナル第三軍ト與ニ、旅順一局ノ敵ニ對スル作戰ノ目的ヲ達シ得タルハ、洵ニ洪大ナル

大元帥陛下御稜威ノ然ラシムル處ナリ、而カルニ臣等犬馬ノ勞ニ對シ、更ニ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ、感激言フ處ヲ知ラズ臣等唯益々奮勵努力、以テ聖恩ノ深キニ報ヒ奉ランコトヲ期ス、

皇后陛下ノ令旨ニ對シ奉リ(七日奉答)

大元帥陛下ノ洪大ナル御稜威ニ據リ、第三軍ト與ニ旅順ノ敵ニ對スル作戰ノ目的ヲ達シ得タル聯合艦隊ノ與力ニ對シ、更ニ優渥ナル令旨ヲ賜ハリ感激措ク能ハズ、尚益々奮勵努力以テ令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス、

皇太子殿下ノ令旨ニ對シ奉リ(七日奉答)

大元帥陛下ノ御稜威ニ據リ、攻圍軍ト協力シテ、旅順ノ敵艦隊ヲ擊滅スルニ至リタル犬馬ノ勞ニ對シ、茲ニ亦優渥ナル令旨ヲ賜ハリ感激ノ至リニ耐ヘズ、尚愈々精勵奮勉シテ、作戰終局ノ目的ヲ達センコトヲ期ス、謹デ奉答ス、

斯くて新占領地たる、旅順軍港の防備及び、遼東半島警備上、茲に旅順鎮守府を新設すの必要を生じたるを以て、此年一月七日早くも之が經營の任に當らしむる司令長官以下幕僚等重なる職員は、左の如く任命せられたり。

補旅順口鎮守府司令長官海軍中將從三位勳二等功三級　柴山矢八
補旅順口鎮守府港務部長海軍少將正五位勳三等功四級　植村永孚
補旅順口鎮守府參謀長海軍大佐從五位勳三等　玉利親覽
補旅順口鎮守府軍醫部長海軍々醫總監醫學博士　鈴木孝之助
補旅順口鎮守府主計部長海軍主計大監　富田慶二
補旅順口鎮守府副官海軍少佐　廣瀨弘毅

第四節　第一期中の拿捕船舶

聯合艦隊の第一期作戰は一段落を告げたるを以て、爰に同期中に於ける拿捕船舶の一班を叙すべし、こは海戰と相伴ふて、間接に戰捷の幇助たりしは勿論にして、而も同期中に於ける拿捕船二十五隻の多きに及ぶ。實質上の價値に至りては、更に著大なるものあり、然れども斯る記事は戰記中に於て最も趣味に乏しきものなるを以て、今は唯其要項を摘載するに止む。三十七年二月六日、軍艦濟遠は、韓國釜山沖に於て(一)露船**エカテリノスラフ**號露國義勇艦隊會社船を、又同日軍艦平遠は、對馬水道に於て(二)露船**ムクデン**號、東清鐵道會社船を拿捕す、(一)は通貨千六百留、兵器其他音樂器等を積みて浦鹽よりオデッサに、又(二)は通貨一万留、米、密柑等六十九廉を積みて、長崎より浦鹽に向はんとしたるものにして、之れ開戰劈頭の所得なり。

翌七日、我聯合艦隊が征途に上れる際、軍艦臺中丸韓國九針岩附近に於て(三)**ロシヤ**號(露國ルース會社船)を拿捕す。同船は旅順港より石炭を積載せんため、唐津港に向はんとしたるなり、之れ實に我艦隊首途の好獲物として戰役の前途を卜知すべく、滿艦の將卒を狂喜せしめたるなり。(第二章第五節參照)此日又軍艦吾妻は、八口浦の附近に(四)**アルグン**號(東清鐵道會社滊船)を捕ふ。同船は青泥窪より長崎に向ひしものにして、露貨三百十一留及び種々の家財を積載したりしものなり。

九月九日、(五)**マンチユリア**號(露國東亞汽船會社船)が兵器、彈藥、糧食、飲用品等二百四十六廉を滿載し、客年冬露都を發して將に旅順口に入らんとして、旅順口の東南十八里の沖合に於て、哨艦龍田の爲に拿捕せられぬ。

同月十日(六)**アレキサンダー**號(露國太平洋捕鯨及漁業會社船)が、嚴原港に碇泊中、第十七艇隊の爲に、又(七)**レスニツク**號(露國捕鯨會社船)が、長崎港碇泊中、警備艦葛城の爲に拿捕せられ、又(八)**ニコライ**號(露國太平洋捕鯨及漁業會社船)(九)**ミハイル**號(同上)の二滊船は、韓國長箭洞沖に於て軍艦宮古に、又(十)**コチック**號(露國東察加商工業會社船)の横濱港碇泊中、警備艦天城の爲に拿捕せられたるが、載貨は何れも多く價値あるもの無かりき。又(十一)諸國船**ヘルムス**號は日本塊炭四千餘噸を積載して、門司より旅順に向はんとして、旅順沖にて帝國軍艦に誰何の後、長崎に廻航せられ開戰の事實を知らざるの事由によりて解放せられたり。

同月十七日、(十二)**ジユリアデ**號露人ギンスボルク所有船長崎碇泊中、又東清鐵道會社汽船(十三)**マンチユリア**號は長崎三菱造船所船渠に入りて修理中、共に葛城の爲に拿捕せられ、此日又軍艦高雄は函館港に於て(十四)**ホープリック**號(露國東察加商工業會社)(十五)**ナデージ**

ダ號(露人ニコリスキー所管船)の二隻を拿捕す。兩船共に載貨無し。

四月十三日(十六)タリア號(露國東察加商工業會社船)が、函館船渠に入りて修理中、高雄の爲に拿捕せられ、六月七日、カーチフ炭四千數百噸を搭載して上海より長崎に入港したる(十七)アツギー號(諾國船)は、警備艦葛城に捕へられしも、敵國に行くものと認むべからずとの理由にて解放せられたり。七月十四日、食料、飲料品、其他三百六十餘廉の貨物を滿載して、牛莊に向はんとし、山東岬角の沖合を航行中の(十八)西平號(上海英國開平公司船)を、同月十七日食料、飲料品其他百二十三廉を積みて同じく牛莊に向はんと威海衛の東北凡そ十海里の沖合にて(十九)北平號(同上)を、軍艦香港丸の爲に拿捕せられたり。

八月十九日、佛國人所有船(二十)ジヨルチユ號が、我が封鎖監視の間隙を偷みて、糧食品を旅順口に輸入して、將に塘沽に歸航せんとし、老鐵山沖合五海里の地點に於て、水雷艇第六十五號の爲に拿捕せられたり。

十月七日(廿一)英國船西山號は牛、羊、犢、米、藁、馬鈴薯、鹽漬肉、酒類等の飲食料品を滿載して、香港より牛莊に入港したるを、軍艦筑紫拿捕したるも、審檢の結果解放せられたり。同月十三日、(廿二)富平號(天津獨逸人所有船)は兵器、彈藥、糧食等五千餘個を積みて、旅順に向ふべく、老鐵山沖を通過中、北煌城島の北方約十海里の地點に於て、水雷艇白鷹の爲に拿捕せらる。同船中には露國陸軍大尉エツガルト乘船し居りたるを以て俘虜となれり。十一月十九日、(廿三)ウウエテラン號(青島獨逸人所有船)は被服、藥品、食料品等を積み、旅順口に向ひしものなるが、封鎖犯として圓島の南三十二海里の地點に於て、龍田に拿捕せられたり。

尋いで十二月十九日に至り(二十四)英船ニグレシヤ號が、石油七万箱を積みて浦鹽に航行中、蔚山沖に於て、軍艦對馬の爲に拿捕せられたるが、同船には露國海軍大尉ブレン、同少尉シエウリヨフ、乘組居りしを以て俘虜となれり。同月廿一日、軍艦音羽が芝罘沖警備中、英船(二十五)キングアー!サー號が旅順に麥粉を輸入し我封鎖を破りて將に孟買に歸航すべく航行中なるを拿捕す。

斯くて旅順要塞の運命日々に蹙まり、餘命殆ど盡く、此時に當り、我艦隊の封鎖愈々嚴密を加ふるに至りしを以て、密輸船の出入も全く絶へたり。尋いで三十八年一月一日、旅順遂に陷り、我艦隊は第二期の作戰に移りたるを以て、茲に以上の第一期中の船舶にて、審檢の結果、捕獲確定したるもの、及び其命名、原名、噸數等を一覽に供すべく、表示すれば左の如し。

船籍	原名	總數		
(露國汽船)	エカテリノスラウ號	五、六二七	韓崎丸	
(露國汽船)	ムクデン號	一、五六七	奉天丸	

ロシア號	露國汽船	二、三一二	濟州丸	三十八年九月遞信省ノ管理ニ移ス
アルグン號	露國汽船	二、四五八	羅州丸	
マンチユリア號	露國汽船	六、一九三	關東丸	
アレキサンダー號	露國汽船	二六一	歷山丸	
レスニク號	露國汽船	八七		三十七年八月十七日農商務省ノ管理ニ移ス
ニコライ號	露國汽船	一二三	二河川丸	三十八年二月二十六日農商務省ノ管理ニ移ス
ミハイル號	露國汽船	三、四六一		三十八年二月二十六日農商務省ノ管理ニ移ス
コチック號	露國汽船	三九九	北洋丸	
ジユリアテ號	露國汽船	一〇		
マンチユリア號	露國汽船	二、九八一	滿州丸	
ボーブリック號	露國帆船	一二五		
ナデージダ號	露國帆船	六八		三十八年一月二十一日農商務省ノ管理ニ移ス 三十七年六月廿日農商務省ノ管理ニ移ス
タリア號	露國外蒸汽船	長二八呎九吋、巾八呎一吋、深五呎六吋		
ジヨルヂユ號	佛國汽船	一七九	老鐵丸	
富平號	獨國汽船	一、三九三	長山丸	
ヴエテラン號	獨國汽船	一、一九九	八浦丸	
ニグレシア號	英國汽船	二、三六八		
キングアーサー號	英國汽船	一、四一六	蔚山丸	

第二編　戰勝決定時代（第二期）

第一章　第二期の聯合艦隊

第一節　旅順艦隊全滅後の我艦隊

曩に露國第一太平洋艦隊の極東に在るもの、其噸數に於て、將た隻數に於て殆ど我艦隊と伯仲す、故に海外の評論往々にして勝を露國艦隊に擬する者ありしも、氣運一轉、彼我砲火の裡に相見ゆるに方りてや、彼は脆くも開戰の初頭に敗衂し、尋で我艦隊の港口閉塞となり、海上封鎖となり、强行偵察となり、終に敵の艦隊は、港内深く蟄伏して、漫に退嬰を事とせり、而して其間彼我小部隊の屢衝突するありしも、毎回我の勝利に歸し、逐次彼は彼が最後の死力を盡して交戰したるに拘はらず、我艦隊は極めて少許の損害を以て、敵艦隊を壞滅せしめたり、當時敵艦隊は殆んど其全艦隊を破壞若しくは轟沈せられ、其然らざる者も僅に中立港に遁竄して武裝を解き、辛うじて旅順に引還へしたるもの數隻に過ぎず、而も此等の敗殘艦艇は、其の損害極めて、多大にして容易に戰鬪力を回復すべくもあらず、空しく港内に蟄伏して餘喘を保つに過ぎず、遮莫、陸上よりする我攻圍軍の壓迫は此時大に進捗

し、加之、我艦隊の攻擊日を趁ふて益々激烈を加へ、敵艦艇は去就兩つながら其活路を得ざるに至りぬ、此を以て遂に三十八年一月一日旅順開城と共に、敗殘艦艇の全部を擧げて、自爆若くは遁竄の已むなきに至らしめたり、爾後自爆艦艇は多く我の戰利に歸し、遁竄艦艇は孰れも中立港に於て武裝を解除し、爰に旅順艦隊は全部を擧げて殄滅せり、顧みれば開戰以來旅順艦隊の全滅に至るまで約十閱月、其間敵艦隊は險要無比の軍港を根據とし、銳意防禦に努めたるに拘はらず、我艦隊の勇敢なる、終に當初の目的を達したり、蓋し我聯合艦隊の第一期作戰計劃は、旅順艦隊の殄滅を以て終期とし、進んで第二期に入るべき豫定なりしなり、果せる哉、今や第一期の目的を遂行し、徐ろに第二期の作戰行動に移らんとす。蓋し我海軍の勳功偉大なる者あると同時に、前途尙ほ遼遠なるを思はずんばあらざるなり。

茲に旅順艦隊の全滅するや、我海軍は少數の艦艇を割きて旅順警備の任に當らしめ、他は悉く根據地に集中し、第二期作戰行動の第一着手として新に聯合艦隊を編制せり、而して其編制は第一期の聯合艦隊と趣を異にし、全艦隊を三艦隊七ヶ戰隊に區分す、即ち左の如し。

第一艦隊　第一戰隊三笠、朝日、富士、敷島、春日、日進、　第三戰隊笠置、千歲、音羽、新高、龍田、第二艦隊　第二戰隊出雲、吾妻、淺間、常盤、八雲、盤手、　第四戰隊浪速、高千穗、對島、明石、千早、第三艦隊　第五戰隊嚴島、橋立、鎭遠、松嶋、　第六戰隊須磨、秋津洲、和泉、千代田、　第七戰隊扶桑、高雄、摩耶、鳥海、筑紫、宇治、八重山、

假裝巡洋艦隊　日本丸、香港丸、亞米利加丸、八幡丸、信濃丸、備後丸、佐渡丸、滿洲丸、

特務隊（水雷母艦）臺中丸、臺南丸、春日丸、日光丸、熊野丸、　假裝砲艦一號より十四號に至る、　工作船　關東丸、三池丸、（病院船）神戶丸、西京丸、

第一艦隊附屬驅逐隊艇隊　第一驅逐隊春雨、有明、吹雪、霰、　第二驅逐隊　雷、電、曙、朧、　第三驅逐隊　薄雲、東雲、漣、霞、　第十四艇隊　千鳥、隼、眞鶴、鵲、

第二艦隊附屬驅逐隊艇隊　第四驅逐隊　村雨、朝潮、朝霧、白雲、　第五驅逐隊　叢雲、夕霧、不知火、陽炎、　第十艇隊　雁、蒼鷹、鴿、燕、　第十九艇隊　鴻、鷗、雉、

第三艦隊附屬艦隊　第十五艇隊　雲雀、鷺、鷂、鶉、　第一艇隊　六七、六八、六九、七〇、　第十艇隊三九、四〇、四一、四三、　第十一艇隊　七二、七三、七四、七五、　第二十艇隊　六二、六三、六四、六六、其他の艇隊は常に各軍港要港、及び內海岸警備の任にあり。

尙ほ艦隊の各長官、各司令官、及び乘組旗艦は左の如し。

聯合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官は、東鄕大將にして旗艦三笠に坐乘。

第二艦隊司令長官は、上村中將にして旗艦出雲に坐乘。
第三艦隊司令長官は、片岡中將にして旗艦嚴島に坐乘。
第一艦隊第一戰隊司令官は、三須中將にして旗艦日進に坐乘。
第一艦隊第三戰隊司令官は、出羽中將にして旗艦笠置に坐乘。
第二艦隊第四戰隊司令官は瓜生中將にして旗艦浪速に坐乘。
第二艦隊第二戰隊司令官は、島村少將にして旗艦磐手に坐乘。
第三艦隊第五戰隊司令官は、山田少將にして旗艦橋立に坐乘。
第三艦隊第六戰隊司令官は、東郷(正路)少將にして旗艦須磨に坐乘。
第三艦隊第七戰隊司令官は、武富少將にして旗艦扶桑に坐乘。
特務司令官は、小倉少將にして、臺中丸に坐乘。

先是、我海軍は第一期の作戰行動中、戰鬪艦に於て初瀨、八島の兩艦、巡洋艦に於て高砂、吉野の兩艦、海防艦に於て濟遠、海門の兩艦、砲艦に於て平遠、大島、愛宕の三艦、通報艦に於て宮古の一艦、驅逐艦に於て、曉、速鳥の兩艦、及び水雷艇に於て第四十八號の一隻を喪失したりと雖、猶且つ如上の大艦隊を保持し、其戰鬪力に於て甚しき徑庭なきのみならず、我將士の意氣益々振ふ者あるに至つては、眞に國家の慶事と謂はざるべからず。

第二節　浦鹽及北韓の偵察

此時に方り、敵の第二、第三太平洋艦隊は猶東航の途中に在り、而して極東にある敵艦隊は、既に敗殘したるロシヤ、グロムボイの二巡洋艦、及び數隻の驅逐艦の浦鹽斯德に潛めるあるのみ、是に由て我が第一、第二、第三戰隊、幷に特務船隊は鎭海灣に集合して、開戰已前の訓練を復習し、傍ら北海に航して浦鹽の敵を偵察し、及び水雷沈置に從事せり、又第四、第五、第六、第七戰隊は、尾崎灣にありて浦鹽敗殘艦隊の脫出を警戒し、旁々密輸入船舶の監視に當り、各艦亦交替して常に對馬海峽の警備に任せり、爾來斯の如くにして數日に亘り、將士皆肉躍り骨鳴るの嘆あらざるはなく、荐りに東航敵艦隊の來着を待てり、恁くて四月十三日午前八時、我第二戰隊の出雲、常磐、第一戰隊の春日、第三戰隊の笠置、新高、音羽及び第六戰隊の千代田は、旗艦出雲を先頭に鎭海灣を發し、別に通報艦千早は、第四、第五の兩驅逐隊を率ゐ、旅順丸、平壤丸、京城丸、大仁丸、臺布丸、日光丸、春日丸、嚴島丸を警衛して、水雷沈置の爲め浦鹽に向ふ、同艦隊は十五日午前十一時五分を以て、浦鹽近海に到着し、直に音羽をして敵狀を偵察せしめたり、已にして同日午後七時、全艦隊はガモバ岬の南方八分の五海里、西二十七海里四分の一の地點に集合し、此處にて本隊と水雷沈置隊との訣別を行へり、此時本隊

の乗員は總て登舷禮式を行ひ、掩護艦新高、音羽の率ゆる沈置船隊を目送したり、恁くて同船隊は浦鹽港口に向ひて直航し、深夜機敏に水雷沈置を決行せしに、敵は毫も知らざる者の如く、天明に及びて無事作業を終了して翌日午後三時二十八分本隊に合し、威風堂々として根據地に引揚げたり。

第三節　敵艦隊の東航と我艦隊

露國は新に第二、第三太平洋艦隊を東航せしめんとし、今其途中にあり、蓋し露國の東遣艦隊を編成するや、第一太平洋艦隊應援の目的に外ならず、亦同時に旅順艦隊と聯合して、而して日本艦隊を掩擊せんことを期したるものゝ如し、若し此の目的にして達せられんか、我が聯合艦隊は腹背敵を受くるに至り、頗る困難の地位に立つべかりしならん、然るに事茲に到らず、我聯合艦隊の勇敢にして籌略に富める、敵艦隊の到來に先だつこと、而も數月已前に於て、旅順艦隊を殄滅したり、此の報一たび敵艦隊に傳はるや、躊躇逡巡の狀ありしと雖も、彼は遂に東航の目的を中絶するに至らずして其の航行を續けたり、是を以て我第三戰隊の司令官出羽海軍中將は、其麾下艦船を率ひ、示威運動幷に敵艦隊偵察の爲め、二月下旬佐世保軍港を發して南洋遠航の途に上れり、而して同艦隊は三月中旬新嘉坡方面に

遊弋し、尙十分の任務を終へ、四月上旬を以て無事根據地に歸着せり、其後幾ばくもなくして敵の第二艦隊はマラッカ海峽を通過し、漸次北行してカムラン灣に入れり、次で五月九日敵の第三艦隊亦來着し、同灣に於て十分の戰鬪準備を整へ、同月中旬愈々北航の途に上れり、蓋し敵艦隊は牢固たる覺悟を以て、浦鹽斯德に邁進すべく企圖し、若し半途にして日本艦隊の攻擊に遭遇する時は、一大決戰を試むべく決心したるなりき、此時に當り、我聯合艦隊の動靜を見るに、一方には浦鹽艦隊の警戒を嚴重にし、而して其脫出を防ぐと共に他方にありては依然戰鬪操練に餘念なく、日夕實彈射擊、航海操練、驅逐隊、水雷艇隊の襲擊演習等あらゆる訓練を續行し、將に來らんとする大海戰の戰鬪準備に努め、而して敵艦隊ボンコーへ灣發航の報あるや、將士皆指を屈して珍客の到來を待ち詫び、荐りに決戰の期の近からん事を希望せざるはなし、此時に當り東鄕大將の神謀奇籌に富める、商船の大なるもの六隻を假裝し、『ファンネル』を增設し、船尾を垂直に形作り、擬砲數十門を備へしめ、宛然たる大戰鬪艦隊の如くに裝はしめて、臺灣の南方に出沒し以て敵の作戰に一大違算を生せしめたり、又當時出羽中將の率ゆる第三戰隊、第四驅逐隊、及び假裝巡洋艦數隻は、再び南方警戒の任に當り、五島列島附近に於て豫定の行動を開始し、屢快速の哨艦を警戒線以南に派して敵狀を偵察せしめたり、此間同艦隊は非常の苦心と、多大の艱難とを嘗め盡して

連續嚴密に警戒中、果然信濃丸によりて、初めて敵艦隊の我近海に近づけるを發見せられたるなり以上記する所は更に別項に於て詳かなり。

第四節　日本海及太平洋方面の拿捕船

開戰以來旅順陷落に至るまでの拿捕船は、總數二十五隻にして、而も其半數以上は我が港灣に碇泊し居たるものなり。直接敵港に密輸入の途上に拿捕したるは、僅々十餘隻に過ぎず、約壹ヶ年に亘る旅順封鎖中に於て、尚且然り、然るに旅順陷落後第二期に入るや、敵の浦鹽方面に物資の密輸入を爲す者續々として現れ來り、乃ち三十八年一月より九月に至るの間、我艦隊の拿捕せしもの四十一隻の多きに及べり、此統計に依て見るも、敵が如何に東航艦隊に重きを置きしかは之を知るに足る、蓋し彼等は第二第三東洋艦隊を相合して、我海峽を通過し、假令東郷艦隊と決戰を爲すあるも、優に半數以上は必ず浦鹽軍港に到着すべきを期待したるなり。此に於て我聯合艦隊は、對馬、津輕、宗谷の三海峽を嚴密に監視し、是等の密輸入船を拿捕せんことに努めたり。而も國民の多くは旅順陷落後日本海海戰に至る迄、我艦隊の如何なる動作をなせしかに至ては、多く之を知らざるものゝ如し、今拿捕船舶に關する記事に依て、其一端を見るへし。

斯くて三十八年一月十一日我哨艦常盤は壹岐高崎山の北方十海里の位置に於て、英船**ローズリー**(高崎丸)を拿捕せり同船はカムブリアン炭を搭載し、客年十一月ベーリーを發し浦鹽へ赴かんとしたるものにして、總噸數四千三百七十の鋼船なり、翌十二日水雷艇七十八號も亦沖の嶋西方十八海里に於て英船**レシントン**(若宮丸四千四百二十一噸)を捕獲したり、同船も六千四百九十噸の石炭を搭載してカーヂフより、浦鹽へ向ひて航行中なりし、同十六日六十五號艇も亦韓國絶影島の東方に於て、蘭國汽船**ウ井ルヘルミナ**(影島丸四二六九噸)を拿捕せり、同船はカーヂフ炭を滿載して上海より同く浦鹽へ赴かんとしたる途中なりき、翌十七日常盤亦英船を韓崎の東方五十海里に於て拿捕したり、同船は號を**ウアウトリー**と云ひ、鐵材食料等を搭載して等しく浦鹽に入らんとしたる途中なりし、翌十八日又もや常盤は英船**オークレー**(鳥帽子丸三七九八噸)を沖の島西北方にて捕獲したり、同船も石炭を積載して客年十一月バーリーを出發し今や漸く目的たる浦鹽へ入港せんとしたる航行中なりしなり、同く一月二十五日水雷艇三十號は鹽首崎の南東十海里に於て墺船**プルア**(恵山丸三〇七一噸)を拿捕したり、同船も等しく石炭四千噸を搭載して客年十一月カブチーを出發して浦鹽へ向ひたるものなり、越へて廿七日軍艦淺間は津輕海峽藏龍崎附近に於て英船**エム、エス、タラー**を拿捕せり。同船は客年十二月桑港を出發して等し

く浦鹽に至らんとせしものにして、搭載物は枯草麥類等にして、四千二百十六噸の鋼船なり、後、龍飛丸と改めらる、此月三十日警備艦武藏も又鹽首崎沖に於て英船**ワイフイールド**(鹽首丸三二二五噸)を捕獲せり、本船亦先きの**グラー**號と搭載物及び發着を同ふせり、而して翌三十一日淺間艦又襟裳岬南西十海里に於て墺國汽船**シヤム**(襟裳丸三一六〇噸)を拿捕せり、該船はカーヂフ炭四千噸を搭載して、客年十一月カーヂフ港を發し浦鹽へ赴かんとせし航行中なりし。

以上一月中に於ける拿捕數は、合計九隻にして、之に對する横須賀並に佐世保捕獲審檢所は、載貨船舶共に悉く之を沒收すべく檢定を與へたり。越へて二月七日軍艦松嶋は、津輕海峽に於て英船**イーストリー**を拿捕したるが同船は夕張炭を搭載して、二月八日室蘭を發し新嘉坡に向ひたるものなりし、同十日假裝巡洋艦香港丸は擇捉海峽に於て、獨國船**バロス**(猿橋丸二三九八噸)を拿捕せり、同船は客年十一月バンブルヒ港を出發して浦鹽に向ひたるものなり、而して又香港丸は十四日午前十一時同所に於て、英船**アポロ**(國後丸三八二九噸)を捕獲せり、同船の搭載物はカーヂフ炭五千七百噸にして、客歲十二月七日バリーを發して等く浦鹽に赴かんとせるものなりき。而して又此日午后六時水雷艇三十號は、矢尻崎附近に在りて英船**スコツマン**(一六七九噸)を拿捕せり、搭載貨物は、米約二千八十五袋にして、一月廿四日西貢を發し、同しく浦鹽に入らんとしたるものなり。同く二月十九日假裝巡洋艦日光丸は五島沖合に於て英船**シルウイアナ**(五島丸四一八七噸)を拿捕したり、同船は六千五百餘噸のマーテル炭を搭載して、卅七年十二月四日カーヂフ港を發し、等しく浦鹽に向ひたるものなり。而して此の日又日光丸は、對島韓崎の北十海里に於て英船**ウラダーハム**(三〇一九)を拿捕せり、同船もカーヂフ炭を搭載して等しく浦鹽に向ひしものにして、二月十九日上海を出發したりしと云ふ。尋で同く二十三日假裝巡洋艦香港丸は、藥取沖に於て獨國船**セベルス**(藥取丸三三〇七噸)を拿捕せり、同船は客年十一月カーヂフを發して等しく浦鹽へ赴かんとしたるのもにして英炭三千八百四十噸を搭載し居たり、同二十六日軍艦磐手は津輕海峽に於て、獨國汽船**ロミユラ**(二六三〇)を拿捕せり。同船も亦英炭を搭載し同しく浦鹽に至る途中なりし。翌二十七日假裝巡洋艦日本丸は、擇捉島附近巡航中客年十二月七日タルボット港を出發して等しく浦鹽へ航せんとする英國汽船**イスビーアツベイー**(磯崎丸二九六三噸)を捕獲せり、同船もカーヂフ炭約四千噸を搭載し居たりき。二月中に於ける密輸船の拿捕數は合計九隻にして、是等の監視に就ては殆んど遺憾なく實施せられたるが如し、然れども彼等は未だ我監視の爾かく周到嚴密なるを知らざるものゝ如く、尙續々として後發せんとす、然れども其多くは遠隔の地より出發するものなる

が故に、旅順陷落の前後に於ける發程なれば、此の如く我艦隊の海峽警戒に集中しあるを知らざるは無理ならずと雖、其一月以降の出發に依るものは、萬一の僥倖を期したるや勿論なるべし、而して以上の九隻に對して、横須賀並に佐世保捕獲審檢所は、松嶋艦の拿捕したる英船**イーストリー**を解放し、他は悉く貨物船舶共に之れを沒收すべく檢定を與へたり。

而して三月三日、我哨艦日光丸は、巨文島附近に於て瑞國汽船**ウエガ**(二五六二噸)の浦鹽へ航せんとしたるを拿捕したり、本船は客年十二月十日バーリーを出發したるものなるが、カーヂフ炭三千六百噸を搭載し居たり。翌四日假裝巡洋艦日本丸は、二月九日新嘉坡を發し等しく浦鹽へ赴かんとする英國汽船**ウエナス**(辨天丸三五五八噸)を拿捕せり、同船も英炭五千二百二十噸を積載し居たり、此月六日日本丸は又英船**アフロダイト**(擇捉丸三九四六噸)を捕獲したり、同船は客年十二月カーヂフを發して浦鹽へ向ひたる航行中、擇捉島背卸崎に於て發見せられたるものなり。同九日軍艦明石は沖島附近に於て英船**ザクソンプリスン**(三四七一噸)を拿捕せり、同船は客歲十二月紐育を出發し、上海を經て北方に針路を取り、前記沖の島附近に於て發見せられたるものなるが、鐵材及び軌條等を搭載し居たり。同十四日軍艦高千穗は色丹沖に於て、米國汽船**タコマ**(二八一一噸)を捕捕せり、同船は本年一月シャートルを發し等しく浦鹽へ航行中のものにして、鹽肉九千樽及び鐵材機械附屬品等を搭載し居たり。同三月十八日軍艦秋津洲は擇捉島背卸崎附近に於て、英國汽船**ハートン**(藥崎丸三二〇六噸)を拿捕せり、同船は客年十一月カーヂフを發して等しく浦鹽へ赴かんとしたるものにして、英炭約五千噸を搭載し居たり。以上六隻に對して横須賀及び佐世保捕獲審檢所は、明石の拿捕せる英國汽船**サクソンプリンス**號を解放し、他は悉く之を沒收すべく檢定を與へたり、

此頃に至りて奸商の迷夢漸く覺破せられ、到底我監視線を偷まんことの不可能たるを諦悟せしならん我哨艦艇の警戒線は杳として密輸船の航跡なきに至れり。茲に於てか西比利亞七千露里の單線鐵道又た多大の違算を生じたるべし、當時波羅的艦隊は春來依然としてマダカスカル島附近に在りて、毫も東航の形勢なしと雖、我海軍が彼等の動靜に就て注意を怠らざりしと共に敵も亦我艦隊の狀態を知らんとして、探索百方勉めたるが如し、即ち三月二十八日午後三時、加德島南二哩の處の於て、我春日艦の拿捕したる獨國汽船**インダストリー**號(一六〇噸)、是れなん敵が我艦隊の動靜と韓國沿岸の狀態とを探らんとしたる敵艦隊の間諜たりしなり。同船は在青島獨逸人ユルゲンブロックの所有にして、船長瑞典人ウッヂーン以下四名、支那人十五名、米國新聞通信員と稱する獨逸人バンニエルな

る者等乗組居たり。斯くて同船は三十八年二月十九日上海を出發し、サットル島を經て、濟洲島の東方より韓國西南岸を偵察して、約二週間の日子を費消し、三月七日一先上海に歸港して、其の狀勢を復命し。更に同月十三日同港を出發して我艦隊の根據地を探知せんとし、再び同沿岸を偵察しつゝありしが、遂に我哨艦春日の爲に捕獲せられたり。

越へて四月七日、假裝巡洋艦熊野丸は、捉擇水道に於て諾國汽船**ヘンリーボルコウ**號を拿捕したり。同船は麥粉約一萬八千九十袋を積載して三月十八日上海を發し、沖永良群島の北を經て、遠く太平洋に出て、捉擇海峽の通過を試み以てコルサコフに向はんとしたるものなりし。越へて五月七日假裝巡洋艦滿州丸は、露國病院船**アリヨール**(楠保丸八一七五噸)の對島三浦灣附近を巡航しつゝありたるを拿捕したるが、同船の如きは、曾に條約に違反せるのみならず、赤十字旗を濫用し、而して我軍狀を偵察せんとしたるものにして、其無線電信を裝置しあるを以てしても尙明亮なりとす、

同十六日我哨艦佐渡丸は、英國汽船**リンクルーデン**の韓國西南方を北航しつゝありたるを拿捕したり、而して此日備後丸は、佛國汽船**クワンナム**を捕獲したるが、同船亦敵艦隊の間諜にして、將に東海に出現せんとする波羅的艦隊の爲に、我軍情を偵察せんとしたるものにして、澎湖列島の虎井島附近に於て、遂に之を拿捕するに至れるものなり。

以上五隻の拿捕船に對して、横須賀並に佐世保審檢所は、五月十六日、佐渡丸の拿捕したる英船**リンクルーデン**號を解放し餘は悉く之を沒收すべく檢定を與へたり。

斯くて波羅的艦隊は、愈々對馬海峽に現はれ、遂に二十七八日の日本海大海戰となり、斯に彼艦隊は脆くも殄滅せられ、我海軍赫々の偉績は實に曠古未曾有の快事とす、此報一度世上に傳はるや、彼のロイドの保險業の如き、非常の驚怖を來し、爲に此種の密輸船の對馬海峽を通過するものなきに至る、而して日本海々戰中に於て、捕獲したる敵軍用船の類は、茲に之を記載せず、更に後章に於て之を明にすべし。

是に至りて日露戰爭は、既に數理の上に於て其勝敗を決したるものにして、我海軍は既に第二期の作戰計畫を終り、更に進んで第三期の作戰に入ると雖、そは畢竟戰勝の餘力を必要事に用ゐたるに過ぎず、殊に其の北遣艦隊行動中に於ける拿捕船の事の如きは、敢て重きを爲さゝるも、追加として別に是を記せんとす。

第五節　敵艦東航と望樓任務

直接戰鬪に從事したる者は多く世に知られ、軍人の名譽として世人之を迎ふ、之れもとより當然なり、而して同じく軍人にして長官の命令により、戰鬪以外の任務に就き、空しく孤

島の忠鬼となり、無限の恨を呑で國家に殉せし「望樓勤務諸士の功勞に至ては、世人未だ之れを知らず。唯望樓の如きは將來の作戰上至大の關係あるを以て、所在を明記する能はざるを遺憾とす。今は聊か其概要を記して、以て望樓勤務の至難なることを世に紹介せんとす。

讀者請ふ之を諒せよ。

國防作戰上望樓の必要は今更論ずるの要なし、戰時の如きは北は千島極端より、南は遙かに琉球、臺灣、澎湖島及韓國沿岸に設置せられたる望樓其數殆ど三百餘に及ぶ。是等各望樓の守備は一望樓に付、大なるものは六七名の人員を以て定數とし、小は通常四人を定員とす。而して其任務は晝夜間斷なく海上を監視し、事故ある毎に旗旒、手旗、發光、球燈、火箭、號火を以てする各信號、及び無線電信に依て信號し、甲より乙に、乙より丙に傳へしめ、僅か分秒時にして、全体の情報を知得すべく設置せらる。若し夫れ是等の情報に於て過誤あらんか、全体の作戰上に如何なる影響を來すべきか亦知るべからず。望樓任務の重要なる蓋し故あるなり、而して是等望樓の勤務は頗る困難なるが、其の最も困難を感ずるは、天候險惡の際なりとす、殊に電氣は暴風雷電の爲め故障を來し易く、往々電信不通となり、或は電氣の感應甚しく信號を誤る如きことあり。かゝる場合に於ける望樓員の苦心は想像するに餘りあり。今一二の實例を揚げて其實況を記さん。明治三十七年五月下旬、韓國西岸の或一孤島（無人島）に望樓を設置するに當り、一汽船に建築材料、機械其他日用品一切を積載し、兵士若干名、人夫、職工數十人、之に士官一名總監督となり、佐世保を出發し該島に向ふ。此日海上靜穩にして、同島に着するや直に荷物の陸揚に着手し、全く之を了りたるは翌日午後三時頃なりき。而して全島悉く巖石より成る無人島なれば、船舶を泊すべき一の港灣なく、少しく風濤高からんか、容易に陸岸に接近する能はず、又た運送船の如きも往々風波に妨げられ、其荷物を揚陸せずして空く引返すが如きことありしと云ふ。而して薪炭飲料水の如きは悉く是を內地より供給せざるを得ず、就中飲料水の如きは樽詰として是を運ぶを例とす。されば同望樓建設員の一行は、着島第一雨露を凌ぐべき假小屋を設け、此內に起居し、晝夜兼行して望樓建築に着手しけるが、茲に最とも悲しむべきは、數十人の生命を繋ぐ飲料水の、濕氣と暑熱との爲に腐敗して、一滴も之を使用すること能はざるに至り、而も當時天候險惡にして、風浪極めて高く、到底運送船の來るべき望みなく、又急を報ずる設備なく、今は全く進退谷まり、運を天に任すの外なしとて、一同は唯天を仰で降雨を祈るの外、如何ともする能はざる情態に陷れり。始めの內こそ監督將校の注意も守りたれど、堪へ難き渴の爲めには、不良の水と知りつゝも、之を飲用して俄かに腹痛を起し苦悶する者あるに至る。前述の如く同島は一の樹木も存せざる禿島なれば、天日に曝され、暑熱酷しく、爲に一層の渴

を覺へ、身體は次第に衰弱し、言語を發するにも力なき程にて、その慘憺たる光景は、筆紙のよくする所にあらず、昨は一人倒れ、今は二人倒れ、已に八人の健兒は、數日の間に於て空しく孤島の忠鬼と化せり。漸くにして海上風風ぎ、運送船來り着きしかば、一同は蘇生の思をなして踊躍禁せざりしと云ふ。是等の慘劇は、數百の望樓中一二に止まらず、今は唯一例を示したるのみ。尙一層悲酸なるは、琉球列島の或る一島に望樓を置れたるが、此の監督守備として、望樓長(准士官)一名、兵士五名を赴任せしむ。是等の望樓員は晝夜各交代して斷へず海上を監視し、事故ある時は直に發信し、感電したる時は之を受信して、漸次聯絡の望樓に傳ふるを以て任務とす、斯る任務は一見閑散の如く思はるゝも、何時如何なる事故の生ずべきかは豫測すべからず、特に敵艦隊即ちバルチック艦隊の東航は愈〻事實となり、ルスン島と臺灣の中間を通過して、太平洋に出でたりとの警報に接したる時の如きは、分秒と雖、望遠鏡を手放す能はず、又一方に於ては各望樓よりの通信も頻繁にして、少數の人員にて一切の事を辨ずるは誠に容易の業にあらず、然るに不幸、此人員の中三名は氣候變化の爲に風土病に罹りて呻吟するに至れり。元より無人島のことなれば、醫師看護人のある筈なく。而も全員健在なる時に於て尙且つ人員の不足を感ず、今や此の災厄に遭遇す、各員の苦心察するに餘りあり。而して某日、望樓長は二人の兵士に監督を嚴命し、行て病者を慰撫し且つ曰く『君等は定めて苦痛に堪へざらん、然りと雖此際の事亦如何ともする能はず、君等既に知れる如く、敵の東航艦隊も、已に臺灣島の南方に在りとの情報を得たれば、何時我視界に現はるゝやも計り難く、余等の任務を果すも正に此時にあり。今は分秒に雖望樓を離るべからず、顧みれば、此孤島に赴任してより殆ど四ヶ月、起居飲食を共にして、兄弟も亦啻ならず、然るに君等茲に病み、病床に苦惱するに、余等は面りに見て看護の勞を取ること能はず、眞に身を寸斷せらるゝ如く覺ゆ、されど如何とも亦詮方なし。君等は定めて余等に對して此の無情を恨みんも、予は甘んじて君等の怨恨を受けん。請ふ、願くは余の心中を察すべしと』言終りて涙潸然たり。此の時一人の病兵は、我を忘れて起ち上り、『望樓長許し玉へ、我等は左程の病氣にもあらず、加ふるに國家の一大事は眼前に迫りつゝある此時、上官の意を煩はせしこと罪深し、今より任務に就て軍人の責務を盡さん』と、顏色蒼白、且つ眼血走りて、異樣の光りを放つは、彼れの心中に無限の感想を起せしものなるべし。彼は屋外に出で、任務に就かんとするものゝ如し。望樓長は病苦を慰めんとせし語句が、却つて彼等に苦痛を與へたるを悔ひ、今迄重體にありし者が、俄かに斯の如き壯快なる言語動作を爲すは只事にあらずと、望樓長も亦續て屋外に出たりしが、無慘、彼の兵士は屋外に倒れ、已に全く絶息し居れり。望樓長は大に驚きて早速服藥せしめ、あらむ限りの手當を盡したるも、彼は最

早現世の人にはあらざりき。是に於てか思はず聲を放て慟哭せりと云ふ、嗚呼何等の悲慘事ぞ、斯る悲話を殘し、慘狀を演ずるまでに苦難を嘗盡したる各望樓員が、將に來らんとする敵の大艦隊と、我聯合艦隊との大決戰に際し、如何に貢献する所ありたるかは、其戰果の著大なりしを以て想到すべきなり。

第二章　南遣艦隊の消息

第壹節　南洋方面派遣の目的

明治三十八年二月六日、東鄕聯合艦隊司令長官は、東京を出發して再征の途に就き、同月十一日佐世保軍港に於て三笠に坐乘し、根據地に到りて、更に聯合艦隊の組織を變更し、以て第二期作戰行動の任務に就かしめたり。當時敵の第二艦隊は、馬島附近の海面に隱顯し、其の進退甚だ疑はしきものあり、或は既にリバウを出發したる第三艦隊を待つが爲なりと云ひ、或は荏苒時日を經過し、內心東航を希望せざるロ提督等は、何等かの事情の下に本國に逆航せんと云ひ、殆んど其眞相を知るに苦ましめたり、若夫れ後者の風說の如く、波羅的艦隊が其本國に逆航するが如き事あらんか、此の珍客を迎へんとしたる我の膳差を如何にすべき、海軍の恨事豈之より大なるものあらんや、此に於て東鄕聯合艦隊司令長官は、特に南遣艦隊を編成し、以て其行動を探ると共に、彼をして送に我近海に來らしめんとし、之を第三戰隊司令官出羽中將に命じたり。

茲に出羽海軍中將は、南洋遠航の準備を爲すべく、其艦隊の笠置、千歲、及び仮裝巡洋艦亞米利加丸、八幡丸の四隻と、御用船彥山丸とを佐世保に集合せしめたり、而して二月二十七日準備全く了りて、司令官出羽中將笠置に乘じ、之を旗艦として、午前七時三十分、一行は威風堂々佐世保を出發して遠く南洋遠航の途に就けり、

當時敵の艦隊は、佛領馬島ノッシベに於て、此月二十三日本支兩艦隊結合し、翌二十四日其第三艦隊はポートサイドに着したりと云ふの時なりき、而して當時尙此の艦隊の動靜に關しては、西電常に絕へずと雖、其後久しく何れも馬島附近に隱顯するを傳ふるに過ぎずして、毫も東航の事を傳へざりしなり、然るに彼は、馬島到着以來同島を以て、公然其碇泊所と爲し、佛國亦た局外中立を宣言し居るにも拘はらず、自國の商船を使用し、幾多の糧食炭水を供給して憚らざるは、掩ふべからざる事實となれり。

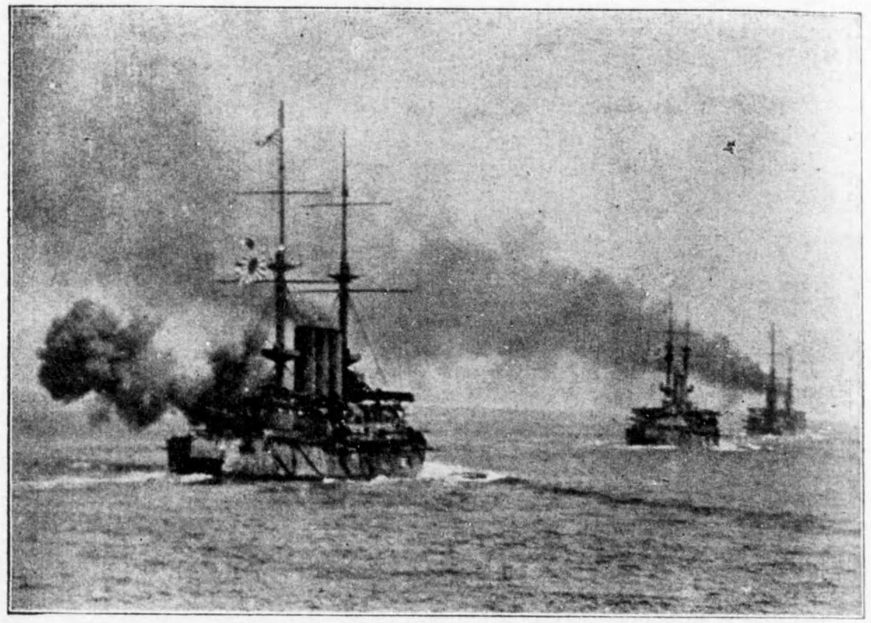
第二節　南遣艦隊の行動

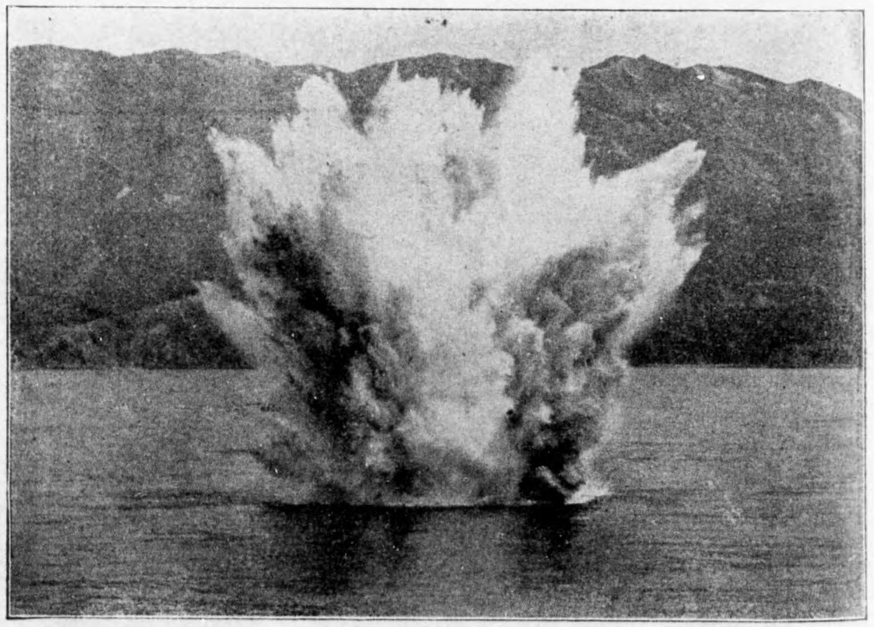
當時波羅的艦隊の動靜に付ては、我海軍の之を知るに頗る苦心せし處にして、此の任に當

りたる出羽司令官の任務は、實に重且大なりと云ふべし、斯る任務を帶びて佐世保を出發したる南遣艦隊は、三月二日午后三時、台灣澎湖島に碇泊して炭水を補給し、越へて四日同島を出發し、七日シャム沿岸を偵察して、翌八日午前六時より艦隊を二分し、千歳及八幡丸は更にシャム沿岸を巡視し、亞米利加丸は別に分れて西貢及其の附近の港灣を偵察し、笠置、彦山丸は他の方面を巡視し、午后六時是等の偵察を了したれば、一行は復た更に南航を繼續し、十一日午前オビー島に投錨して八幡丸より炭水を補給し、而して八幡丸を台灣馬公に歸航せしめ、翌十二日午后一時同地を拔錨し、笠置以下四艦航行列をなして尙南航偵察を繼續したり。此間台灣、香港、海南島を經てアイランド、クラ、オレー、ウアレラ岬、バダラレ岬、チガポイント、サイゴン、コーンドレ、コートロン、アヲル島、フォールズバーグ等の沿岸を偵察したる行程實に三千百哩にして、三月十五日午前八時五十分、英領シンガポールに入港したり。

當時敵の艦隊は、其先發の第二艦隊未だ馬島を去らずして、第三艦隊漸く此月十三日クリート島スダ灣に到着したりし頃なりし。要するに波羅的艦隊東航の目的は、旅順艦隊と合して、旅順の運命を恢復せんとするに在りたるを以て、當初非常の危險と困難とを冒して、航行を急ぎたりしも、今や旅順は陷落して、其艦隊既に殄滅したるを以て、彼等の航行は爾

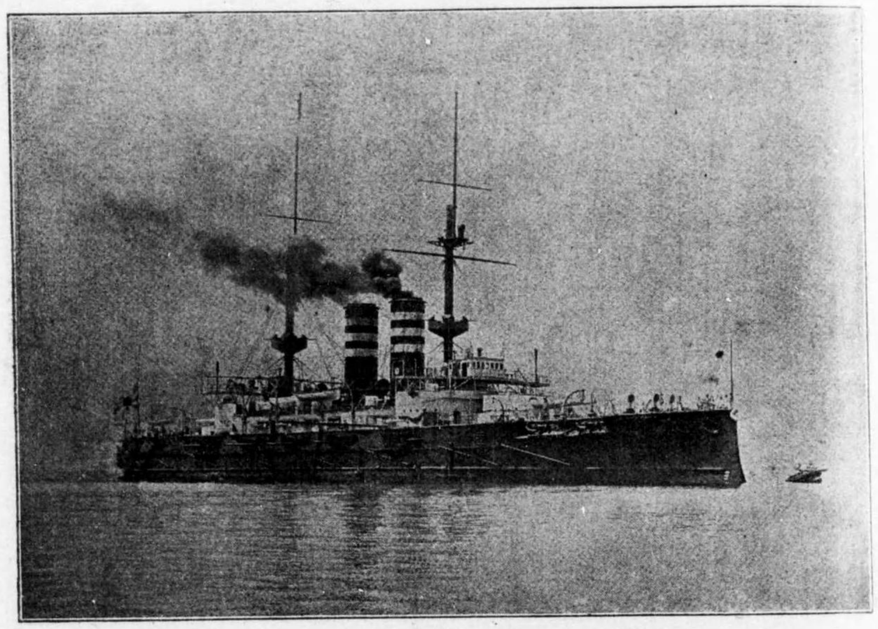
八月十日黃海々戰我艦發砲ノ光景

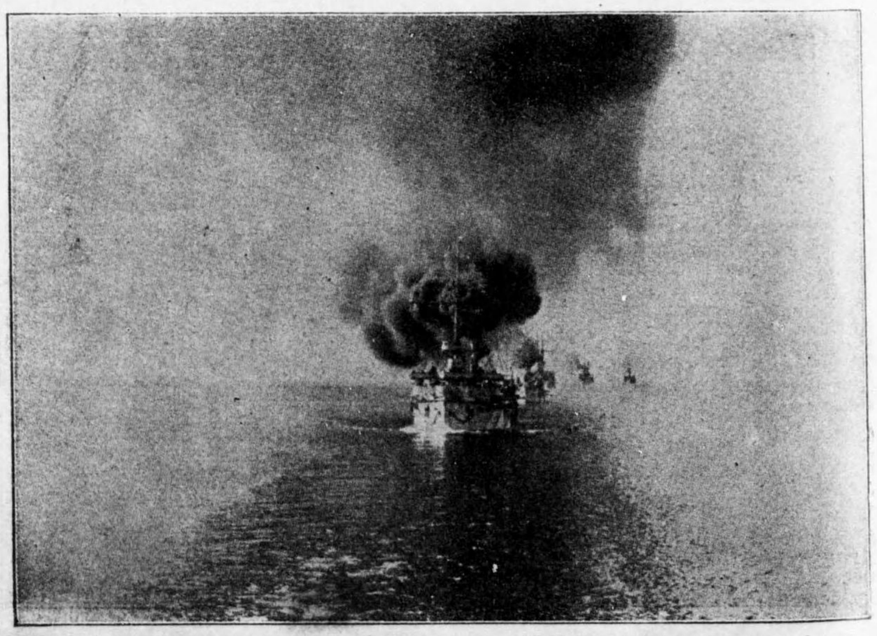




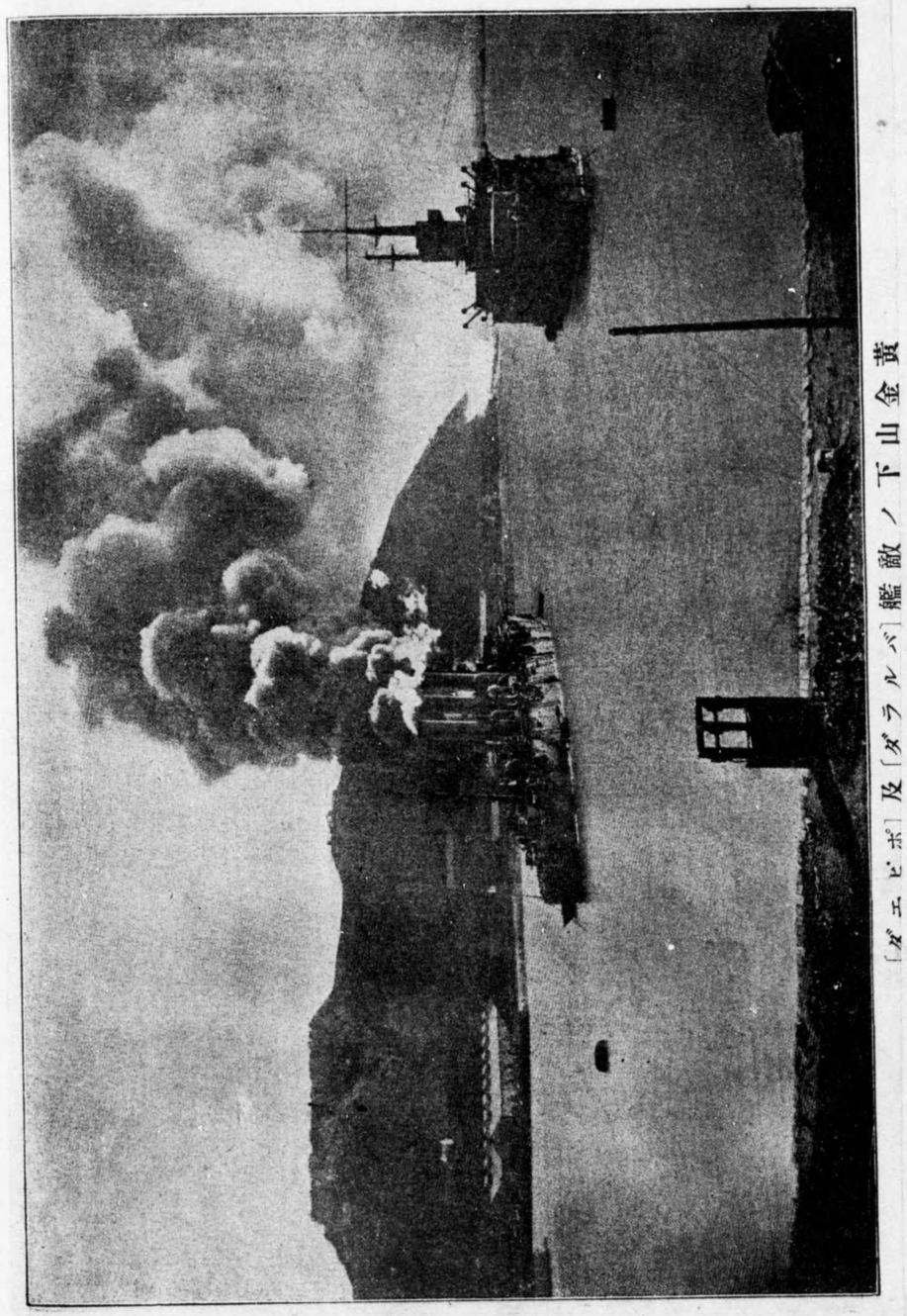
機械水雷爆發ノ光景

我聯合艦隊旗艦三笠

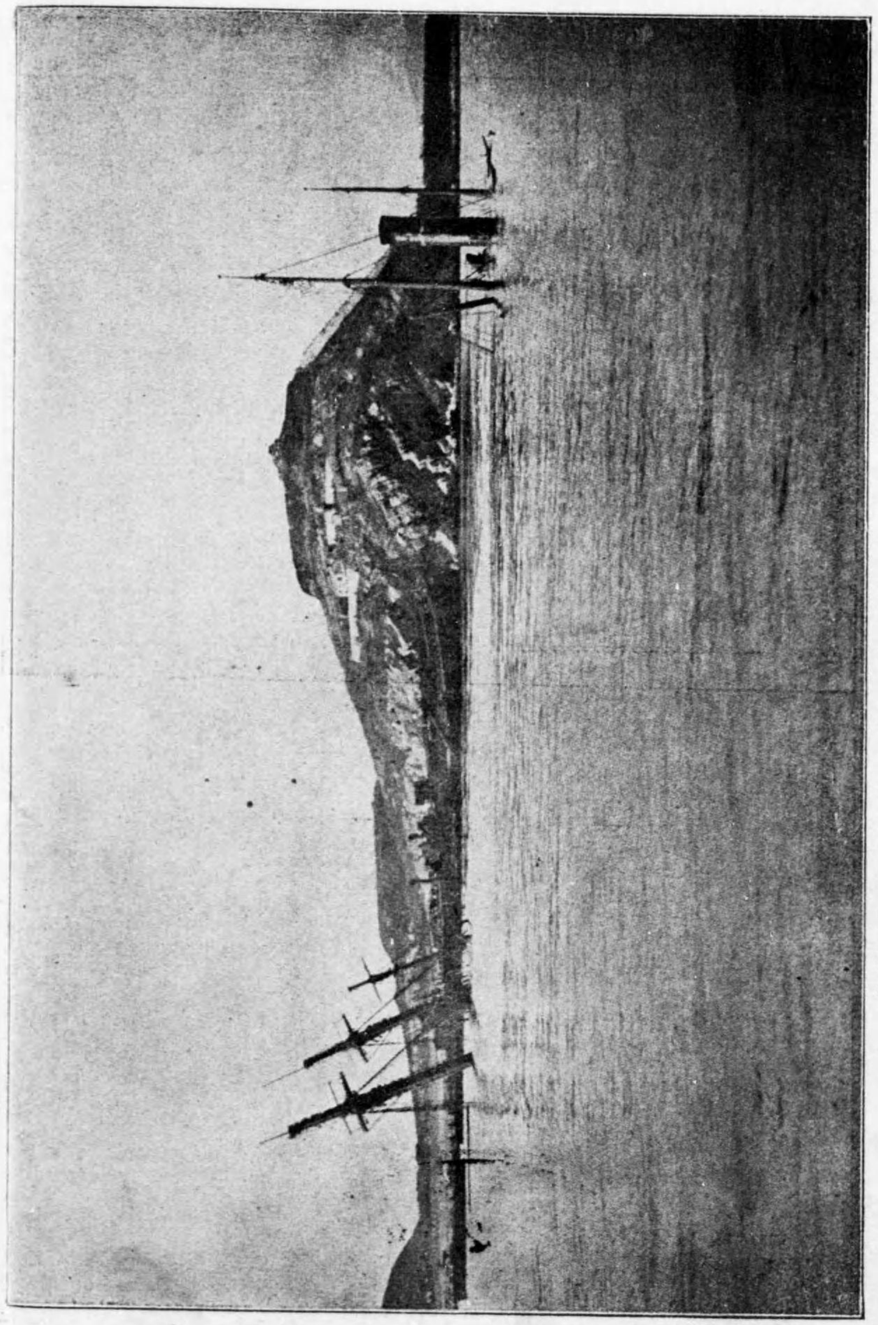




日本海々戰我主力艦隊敵艦ニ向フ



黃金山下ノ敵艦「バルラダ」及「ポピエダ」



旅順口港老虎尾半島前ニ我閉塞船沈没ノ狀態

來頗る遲滯し、爲に世人をして東航し得るや否やを疑惑せしめつゝありしが、奉天に駐りたる敵將クロパトキンの露帝に奏上したる作戰計畫は、端なくも、ロゼストヴエンスキーをして東航の決意をなさしめたるものゝ如し、而して三月十五日英領新嘉坡に入りたる我南遣艦隊は、種々なる情報に依て、敵艦隊は愈三月十六日午后を以て、馬島ノッシベを出發して東航せんとすることを探知するを得たり。

此に於て、出羽司令官は直ちに之を東郷聯合艦隊司令長官に報じ、尙彼を速かに誘致するの策を施し、午后六時三十分同港を拔錨して、直に歸途に就けり。

第三節　南遣艦隊の歸航

久敷疑惑の裡に閉されし波羅的艦隊の動靜を探り、更に之を誘致せんが爲に派遣せられたる出羽艦隊は、今や其の任務を了して歸途に就けり。然れども當時の情況に於ては、敵の第二、第三艦隊の合同は、必ずマラッカ海峽以東にあるが如し、然れば此間敵は何れかの港灣を使用せざるべからざるや明かなり、故に我南遣艦隊は歸途又、ボルネヲ以東の沿岸を偵察するの必要あり、即ち三月十六日午后十一時「セントビール」燈台を左舷に見て東航し、十八日午后七時三十分ボルネヲ島のラビアンに投錨し、翌午后一時同港を出發して尙沿

岸を偵察しつゝ、東に向ひ、二十一日バラベッチ沿岸を偵察し、二十四日マニラ北端の偵察を了し、更に臺灣の南端カバリヤン附近を巡視し、翌二十五日午後馬公島に投錨して、茲に炭水を補給し、二十八日午前同島を出發し越へて四月一日、根據地に歸着したり。最も敏速に此の重任を完ふせし南遣艦隊の効績に付ては各乘員の勞苦亦察するに餘りあり、

第三章　露國東洋艦隊の東航

第一節　出航前露艦の行動

日露開戰の始に當りて、露國の東洋艦隊は、優に日本艦隊に匹敵するの勢力を備へ、加之尙攷々として艦隊を東航せしめつゝあり、現に露國海軍少將ウレニヤスは戰鬪船**オスラービヤ**、巡洋艦**アウロラ**、裝甲巡洋艦**ドミトリ、ドンスコイ**、驅逐艦七隻、水雷艇數隻を率ひ、紅海南端の佛領ソマリランドの首港ジブチーに出動し此處にて炭水を積載し、更に東航を續くべき準備せり、若し此艦隊にして無事東洋に到着し、在東の東洋艦隊に合せんか、噸數に於ては勿論、戰鬪力に於ても、稍々日本艦隊を凌がんとするの觀ありし、然るに戰雲愈々急を告げ該艦隊のジブチーを出航せざるに先だち、俄然開戰の公報同地に達し、同時に露國政府は該艦隊に對し、別に東航中の義勇艦隊と共に、本國に引返す可く電訓したるを以て、

ウイレニヤス艦隊は、二月十八日同港を解纜し歸航するに至れり。同月二十日露國は紅海に於て倫敦より、カルカツタへ航海中の英船**モンバサ**號及びシドニーへ航行中の**モンゴリヤ**號に停船を命じ、間もなく進航を許せりとの報あり。次で二十七日、露國は再び紅海に於て、英船**エツトリツクデール**號及同**フランクレー**號を差押へ、蘇士へ伴ひ行き、二十九日解放し、同日更に英船**パラワン**號及同**ベンアルダー**號に停船を命じ、後間もなく進航を許せりとの報あり。此日埃及政府は、歸航中の**ドミトリ、ドンスコイ**が、艦體修理と稱して、數日前より蘇士に滯泊せるに對し、抗議再三に及び頗る物議を釀せり。越へて四月二日、露國は又々米國「シカコデーリー、ニウス」の雇船**フアウン**號を拿捕し、五日解放したりとの報あり。飜つて我東郷艦隊は開戰の當初より劃策機微を謬らず、仁川に旅順に敵艦隊を擊破して、多大の損害を與へたるを以て、露國大に驚駭し、爲めに增遣艦隊の必要を說くものあるに至れり。而して敵は殆ど朝鮮海以北の海上權を喪失し、之が爲め陸上に於ても著大の打擊を蒙り、連戰連敗の窮狀を極むるに至りしを以て、露國は如何にもして再び東洋艦隊の勢力を回復し、陸上の失敗を挽回せんと欲し苦心焦慮するに至れり。四月七日蘇士より引返したる露國義勇艦隊**スモレンスク**及**アリヨール**は、地中海を巡邏し、戰時禁制品搭載船を監視すとの報あり。此日露國は遂に極東增援艦隊の組織を發表せり、而も該艦隊たるや概

ぬ破羅的舊式老朽艦を以て、辛らくも編成したる者なれば、改造修理を要する箇所極めて多く、晝夜兼行工事を急ぐと雖ども、急遽容易に完整を期すべくもあらず、然るに露國は其の第一回の聲明に於て、七月初旬出發の豫定を發表したり。同月三十日瑞典、及諾威兩國は局外中立を宣言し、其要港に交戰國軍艦の航入を許さずと規定せり。此日露國は在東の太平洋艦隊を露國太平洋第一艦隊と改稱し、新に遣東すべき艦隊を露國太平洋第二艦隊と稱する旨を發表し、次で五月二日ベゾブラゾフ中將を第一艦隊司令長官にロジエストヴエンスキー少將を第二艦隊司令長官に任命せり。五月四日露艦**フラブルー**は、ブリンディンよりポートサイドに向ひ、航行中の英船**オシリス**號に停船を命じ、不法にも日本郵便物引渡を要求し、二間時を經て後之を解放せりとの通報あり。而して又別に露艦**ペテルブルグ**は、其後紅海を巡邏し、七月十二日ジッダー附近に於て英船**グリユーホール**號及び同**メチロース**號を臨檢し四時間抑留し。翌十三日は英船**マラツカ**號を抑留し、十九日蘇士に引致して運河を通過し二十一日アルジールスにて解放せり。而して同艦は引續き外船の監視を怠らず同月十五日には英船**ドラゴマン**號に停船を命じて臨檢を行ひ、後之を解放したり。此日獨船**プリンツ、ハインリツヒ**號は、別に露艦**スモレンスク**の爲に停船を命ぜられ、日本行き郵便物を奪取せられたるが二日の後該郵便物は英船**パーシヤ**により返送し來りたりと。而して十七日は英船**ダルマシヤ**號に十八日は同**セイロン**號に停船を命じて臨檢を行ひ共に解放せり。然るに獨逸政府は此日露國に對し、同國義勇艦の日本行き郵便物差押は不法なりとの抗議を爲し、二十日英國政府も**マラツカ**號拿捕の件に關し抗議を申込めり。而して二十三日英國は更に軍艦四隻を紅海に急派すべく傳へられ、次で**マラツカ**號事件に付き、露國は英國に謝罪せりとの公報ありたり。二十四日土耳古政府は露國の拿捕せる**マラツカ**號海峽通過を拒絶し、頗る紛糾を惹起したり、同日露艦は獨船**スカンデイア**號を差押へ蘇士に引致したるが、船内には日本行き軌條四百噸積載の說ありしに拘はらず、即日之を解放せり。而して尙ほ露艦は二十五日英船**アードワ**を蘇士に引致し、二十六日には同**フオーモサ**を、二十七日には同**ボルサテーア**を、三十一日には同**シテイー、オウアグラ**及**マツシリア**號を引致し、且つ臨檢して後解放せり、此の如く露艦が紅海に於て中立國船舶に對し屢臨檢捕拿を行ひ甚だしきは不法の行爲を敢てするに至りたれば英米の新聞紙は筆を揃へて、非難の聲を高め、物議漸く盛ならんとせり、是を以て露國政府は、八月二日官報を以て紅海事件に關する辯明を公にし、義勇艦隊濠船の臨檢拿捕權を撤退するの意響を洩せり。越へて八月十日露國は第二回の聲明を爲して曰く、露國第二太平洋艦隊は、海軍少將ロジエストヴエンスキー司令長官となり其引率の下に八月六日を以て出航

すべしとせり。然るに尚ほ同月十七日露艦**ウラル**はジブラルター海峽附近に於て、英船**スコテイアン**號に停船を命じ、臨檢を行ひ、更に十九日露國は中立國船舶擊沈權を行使せざる事を聲明せり。次で二十二日露艦**スモレンスク**は南阿海上に於て、英船**コメデイヤン**號に停船を命じ、船舶書類の檢査を行ひしも、即時解放し、其の後世上の物議暫く止むに至れり。

第二節　露國の海軍會議

第一節に記述せるが如く、露國は第二回の聲明を爲し、增遣艦隊の出航を發表せりと雖、未だ艦船の設備充分に整はず、加ふるに露國參謀本部は戰略方針をも確定するに至らず、廟堂の裡、議論區々に別かれ、容易に斷行し得べくもあらず、爲めに海軍大會議を開催する事となり、八月三十日、會々御前會議を開くに至れり。然るに這の大會議たるや主としてバルチック艦隊東航派遣の得失を議する者なりしが、議論百出して容易に決せず、或る反對論者の如きは、我國は陸軍國なるを以て、東洋艦隊の敗滅は敢て意とするに足らず、結局陸軍を以て日本を征伏する事難きに非ずと主張し、荐りにバルチック艦隊の派遣を無謀の極なりと非難するさへあり、其他航路の長遠なるを以て、現在の戰鬪力を保持し、無事極東に到着するは、絶對に不可能なりと辯難する論者もあり、或は又た軍需品の供給を如何にして持續すべきやを論ずるもありたるが、一方贊成論者の側にては有名なるグラッド大佐盛に增遣艦隊の必要を說きつゝ反對說を論破し畢竟戰爭の勝敗は海上權の得喪にありとし、我海軍當局者は、此際大々的決心を以て萬艱を排除し、而して遠に我艦隊の全部を極東に派遣せざれば、啻に日本艦隊に對峙し能はざるのみならず、遂に旅順を失ひ、遼陽に破ぶれ、奉天亦支ふ可からざるに至るは火を睹るよりも明なり、而も艦隊の東方派遣は物質上より見て、反對論者の說の如く、大困難の纏綿するは勿論なりと雖、亦必ずしも爲し能はざる事にあらず、矧んや眞正の苦艱は、戰の起りたる時より始まる、故を以て是等の苦艱は爾后益々加はり來るべきを覺悟せざる可らず假令旅順を救ふ能はずとするも露國は尙活動の餘地を有す云々と述べ、甲論乙駁議場紛然たる者ありしがグラッド大佐は最後に一刻の遲疑を免るす可らず、何となれば一刻の遲疑は頓がて露國千載の恨事を遺す者なればなりと、意氣軒昂として論斷せしかば一座頗る感動せしものゝ如く、終に露帝は艦隊派遣說に贊同せられ、即座に大決心を以て可及的急速に遂行すべく命ぜらる。流石露國に於て當時唯一の重要問題たりし該會議も漸くにして解決せられ、如何なる難關に遭遇するも敢行すべき方針を確定するに至れり。

第三節　東遣艦隊の組織

バルチック艦隊東方派遣問題は、斯の如くにして確定せり、而して露帝は可及的急速に遂行すべき樣命ぜられたる以上は露國海軍當局者にして一刻も猶豫すべきに非ず、當時露國に於て建造中に繫る未成艦の如きは、晝夜兼行にて工事を督勵し、一方バルチック海にある各艦艇には、必要の改造修繕を施すと同時に、彈藥石炭糧食等の準備を急がしめ、黑海方面に遊弋する義勇艦隊の如きは、遽かに商船旗を掲揚してボスポラス海峽を通過し、更に地中海に出で來り、此處に於て各自武裝を施し、其他運送船、特務船、病院船、工作船、等共に準備を急ぎたるが、露國は九月六日更に英艦に托して、南阿洋上に遊弋せる露國假裝巡洋艦ペテルブルグ及びスモレンスクに歸航すべく命じたれば、同艦は同月二十四日蘇士に着し、二十五日ポートサイドに入り、直に增遣艦隊に加はる可く準備に着手せり。是より先き露帝は躬親ら同月九日、バルチック艦隊の檢閲を行はれたりしかば、士氣頓に揮るひ、頗る活氣を帶ふるに至れり。如斯露國は非常の熱心と決意とを以て、諸般の準備を急ぎ、遂に十月上旬一切の設備施工を完整せしめ、茲に一大艦隊を編成する事を得たり、而も露國が始め是等の準備に着手せしは、三月なれば、其期間約八閲月を經過したる者と知るべし、而して露國第二太平洋艦隊の編制を示せば左の如し。

戰鬪艦七隻	ボロヂノ	一三、五一六噸	一八、節	アリヨール	一三、五一六	一七、六
	クニヤージ、スヴロフ（旗艦）	一三、五一六	一七、八	オスラビヤ	一二、六七四	一八、
	インパラートル、アレキサンドル第三世	一三、五一六	一八、	ナワーリン	一〇、二〇六	一五、八
	アドミラル、ナヒモフ	八、五二四噸	一六、節六	シソイ、ウエリーキー	一〇、四〇〇	一五、
巡洋艦六隻	アウローラ	六、七三一	二〇、	スウエートラナ	三、七二七	二〇、二
	ドミトリー、ドンスコイ	六、二〇〇	一七、	アルマーズ	三、二五八	一九、
				ゼムチユーグ	三、一〇三	二四、

假裝巡洋艦四隻　ドン。ウラル。テレック。クバン。

驅逐艦六隻　ポールドルイ。ベズムブレチヌイ。ブレスチヤスヲー。ブイストルイ。ベードヌイ。ブラーブイ。

運送船五隻　キタイ。コレア。マライヤ。アナジール。メテオル。

工作船一隻　カムチヤツカ。病院船一隻アリヨル。

以上三十隻の編制成るや、十月四日各艦共にリバウ港に集合せり。十月九日露帝ニコラス第二世露后の兩陛下には、皇太子アレキセヰ殿下と共に遠くレウエリー軍港に行幸し、親

しく增遣艦隊の檢閲を行はれ、後ち告別の式を擧行せられたり。此日各艦隊は滿艦飾を施して、皇帝の一行を奉迎せり、而して皇帝は始め戰艦**アヂヤ**より、順次各艦を歴訪せられたるが、乘組士官水兵は上甲板に整列して、一齊に登舷禮式を行ひ、而して各商船より起る「ウラー」の聲は海若を駭かしめたり。次で皇帝は旗艦**クニヤージ、スワロフ**に移乘せられ、乘員に一々挨拶せられたるが、去るに臨んで帝嚴かに宣言して曰く、『朕は今此艦隊を東洋に送る、乘組の諸士よ、卿等は誓つて**コレツワリヤーグ**の仇を報じ、敵艦隊を全滅せしむべき者なり、以て上帝の目的を貫徹せしめよ、神は卿等を守護して、必らず幸福を與へん、夫れ能く祖國の爲めに努力せよ』と、而して皇帝は皇艦**ジタンダルー**に還御せられ、同艦の食堂に於て晩餐會を開かれ、太平洋第二艦隊司令長官ロジエストヴエンスキーを初め、各艦長に宴を賜はりたり。爲に司令長官を初め、各艦長以下皇帝の優渥慇懃なる殊遇に感奮し、一同解纜の期を待ち搆ふるに至れり。而して亦當日の壯觀を目擊したる露國民は、口々に祝福して、此の大艦隊東洋に到着するの日は、必らず喜ぶべき快報の來るべき日なりと云あへりき。

第四節　第二太平洋艦隊の出發

大膽なる決意により一萬數千哩の航程を蹴破して、自國友艦の爲に報復し、天晴大帝國の面目を保持すべく企てられたる東洋派遣のバルチック艦隊は、尋で露國民の熱誠なる告別に送られ、而して十月十六日午前一時ウエリー軍港を解纜せり、即ち是が司令長官としてロジエストヴエンスキー提督、旗艦**オスラビヤ**に座乘し、戰鬪艦**クニヤズスワロフ**、**アレキサンダー三世**、**ボロヂノ**、**アルヨール**の四隻、巡洋艦**アドミラル、ナヒモフ**、**ドミトリドンスコイ**、**アウロラ**の四隻之に續き、別に運送船五隻病院船一隻、倉庫船一隻を率ひ、西阿非利加ダカールの佛國貯炭所に向ふ、而して分遣艦隊の司令官にはエンクイスト海軍少將を隨へ、別に義勇艦隊濠船及徵發船等の司令官には、大佐ラドロフあり、堂々海を壓する大艦隊は舳艫相啣んで出發せり、而して同艦隊は翌十七日丁抹ランゲランド水道に入り、此處に於て石炭を積み入れしが數日を經て中立違反の抗議起れり。翌十八日其の一部隊は、ランゲランド水道を通過し、十九日丁抹グレート、ベルトを經て二十日丁抹の北端を距ること遠からざるアルベツ灣スカーゲン港に全部集合碇泊せり、而して同艦隊は同港に一夜を明かし、翌二十一日解纜し、此處より北海に入れり、然るに當時英米の意見は、波羅的艦隊の發航を以て、全然大規模の狂言に過ぎずとなし、孰れも今後の進航を疑ひしが、獨り露國新聞紙は筆を揃へて此擧を賛し、成功疑なき者なりとなせり、蓋し露國民が如何に此艦隊の發

航に囑望しつゝありしかを知るに足るべし

第五節　北海漁船擊沈事件

スカーゲン港を出發したる波羅的艦隊は、二分隊（戰鬪艦隊、巡洋艦隊）に排列して進航し、二十二日午前一時英國東岸スパンヘッドの東北二百海里に位するドッカアバンクの南東海上を航し來るや、折柄英國の漁船四十隻餘が、同海上にありて網曳の最中なりしを、遙かに軍艦の進航せるものと誤認し。且つ同夜は濃霧の爲め視界狹まかりし故に漁夫等は互に狼火、炬火等を點して信號を爲しつゝある內、艦隊は益々接近し來れり、由來是等の漁夫たるや、豫て波羅的艦隊の發航を聞知し居たりしを以て、一見該艦隊ならんと信じ、直に青色燈を點じて艦隊に信號し、其の漁船なるを知らしめたるにも拘はらず、此時艦隊は各艦より探海燈を照射し、俄然漁船に向つて發砲したり、然るに漁夫等は、初め空砲ならんと思ひ居りしに、豈に圖らん一彈は來つてクレーン號に命中し、船長スミス運轉手ロッゴットは慘死を遂げ、爾餘の乘組員は、一少年（船長の子）を除くの外、悉く重輕傷を負はざるはなく而してクレーン號は間もなく沈沒せり、且クレーン號の附近にありたる他の漁船も、數箇所に彈丸を受け、マウルメーン號及ミノ號最も甚だしく殆ど進退の自由を缺くに至れり、

又た小銃彈を受けし者スナイプ號其他數多あり、而も砲擊始まるや、漁船の過半は、其の慘害を免れんとし、全速力を以てせしかば、或は網を失ない、然らざるものは之を破損せり、斯の如くにして各漁船は等しく狼狽を極め、先を爭ひ遁走するに拘はらず、破羅的艦隊は尙も猛烈なる砲擊を行ひ、其間約三十分間に及べり、而して其發射彈三百發中に十二吋砲彈を交へたる證跡あり、此くの如く暴行を逞うしたる上、自ら凄慘光景を目擊しつゝ、而も一隻の救助艇をも派出せず、砲擊を中止するや否や、直に英吉利海峽に向つて駛行し去れり。然るに此報一度英國に傳はるや、官民共に一時は何等かの間違ならんと思惟し、敢て意に介せざる者の如くなりしが、尋で確報の到るに及び、倫敦市中は忽にして驚駭と憤怒とを以て滿たさるゝに至れり、殊に英國「スタンダード」(新聞)の如きは、今や露國艦隊乘組員が、甚だしき神經過敏の狀態にあるを以て、同艦隊の航海は、世界各國民に對し、危險を與ふる者なりとの理由を以て、其航海の續行を禁止するの必要ありと極言するに至れり、而して此事變の英國皇帝の聽聞に達するや、皇帝はバッキングに外務大臣ランスダウン卿を召見せられ、直に閣議を開き、大に露國政府に嚴談すべきを決し、尙、海軍省は萬一の場合に備へん爲め、地中海峽艦隊及內國艦隊に對し、出師準備を命じたり、而して一方にはハル市長に宛て、哀悼の意を表せられ、殊に被害者の遺族に對しては、深厚なる同情を垂れ賜へり、尙又

首相バルフォア氏は、今回の事件に對しては、充分の信用を以て政府の措置に依賴すべしとの訓令を發し、他方に外相は、駐英露國大使に會見を申込みたるも、折惡しく大使は外出して館に非ず、仍て書記官サンソノック氏を召喚して嚴談する處ありたるが、外相は尙ほ露國政府に對し、這回に於ける波羅的艦隊の暴行に就ては、露國政府は英國に對し相當の謝罪を爲し及び被害者の損害を賠償し、又た速に其兇行の責任者を罰せん事を公文を以て請求せり。然るに露國は英帝に對して深く陳謝する處ありたるが、一方露國政府はロジエストウエンスキーに電報を發して回答を迫り、英國に對しては該回答の來るまで猶豫を求めたり。同月二十七日東京市長尾崎行雄は、露國艦隊暴行の爲に生ぜし遭難者及其遺族に對しハル市長に吊電を送れり。斯くして時日を經過するに及ひ、英國の輿論は益々激昂を極む、而も露國が英國の抗議に對する答辯は要領を得ず、全く無責任の遁辭なりとの噂傳はるや、憤激幾んど頂點に達したるものゝ如く、一方英艦隊は行動を開始し英露間の事態愈重大となり、危機一髪に迫れり、此の時ロジエストウエンスキー提督の公報は露都に到達し露國政府直に官報を以て二通の電文を發表したり其文に曰く

「二隻の水雷艇夜陰に乘じ、燈火を點ぜずして艦隊先頭艦を襲擊せり」、「又當時艦隊には全く一隻なも水雷艇を備へず」と、又た魚船に似たる數隻の小蒸汽船は、頑强にも露國艦隊の線列を横斷したるにより、或は異圖あらんかを疑ひ、漁船の被害者を救助するに遑あらず」と、又、其末文に「凡軍艦は斯の如き危急の場合に遭遇せば、戰時は勿論平時に於ても當に然かする（砲擊）の外に策あらざるべし」

と。あり。疑心暗鬼を生じて狼狽周章も此に至りて極まれりと云ふ可し、矧んや英國の上下は如何でか斯る答辯に滿足すべき者ならんや、果然英國政府は駐露英國大使に訓電を發し、最も强硬なる談判を開始すると同時に、一方英國巡洋艦**ランカスタア**は、波羅的艦隊を追跡してヴイゴーに入港し、同艦長は露提督に會見して種々の論難を試み、他の英艦六隻は港外に陣し、及び海峽地中海の兩艦隊は、戰鬪準備を整へて航進し、波羅的艦隊と接觸を保ちつゝあり。又他方に於ては、十一月一日ジブラルタルの守備兵に動員を命じたるなど、間髪を容れざるの危急に迫れり。此日英國外務省は公示して曰く、「露國皇帝は、波羅的艦隊が目下碇泊中なるヴイゴー港を出發するに先だち、同艦隊東航の途中、中立國航海業者に對し、損害又は不便を與ふる事なからしむべき旨の訓令を同艦隊司令官に發せり」と、同日露國政府は英國の要求を容れ、百方苦心の末、ヴイゴー港に四名の露國士官を殘留せしめ、而して該事件は海牙條約に依り、解決せん事を求め漸く英國の憤怒を靜穩に歸せしむるを得たり。妥協の手續成り、遂に巴里に北海事件審査會を開く事に一致せり。此日ヴイゴーに抑留せられたる露國將校四名は巴里に着し、露國公使に會見の上、後巴里を出發せり。然るに其後各種の報導を綜合すれば、露提督の電文中二隻の水雷艇云々とあるは、正しく日本の水雷艇なりと誤認したる結果如上の失態を演じたる者なると判明せり。蓋し波羅的

艦隊が日本の水雷艇を怖れ居りし眞情、亦以て推知するを得べし、試みに當時倫敦に於ける「ロイテル」電報に徵せんか、實に左の如き者ありたり。『漁夫等が露國艦隊の來航せるを觀たると同時に、突然探海燈は光輝を放てり、因て漁夫等は其艦隊が近づき來るを諦視するや、數隻の水雷艇なりしが如く見へたりき、而して其水雷艇は、漁船**アウルメン**に密着せんとして、益々之に接近せんとする者の如くなりしが、少焉して其水雷艇は艦隊に合し、艦隊は之に續いて、砲火を開きたり』と、然るに露國「ノーヴォ、ヴレーミャ」は、之を曲解布衍すべく蛇足を加へて曰く、『當時我艦隊は、全く自國の水雷艇を率ゐ居らざりしを以て、日本人が**アウルメン**船の傍に潛匿し居りて、該船に密着せん事を望みつゝありたるが如く、夫より露國の艦隊に向つて襲擊したり、是に於て露國艦隊も亦其敵に向つて砲火を開きたり』と、而して又是れに對する根據は左の如しと『第一の根據は、九月三十日の發刊に係る米國紐育サン(新聞)の記事なり、曰く世人の言ふ所に依れば、日本の水雷艇は、波羅的艦隊の東航を待ちつゝ、之を要擊するの準備を爲す筈なり。第二の根據は、九月三十一日エベルヂン發の電報是なり、曰く沿岸貿易船**ハガーツ**は、本日當港に入港したるが、或る乘客の言ふ所に依るに、二名の日本士官幷に十名の下士は、倫敦へ向け出發の爲め乘船したるが、今亦**ハガーツ**船に便乘せり、然るに此等の人々は、當港エベルヂンに到着したる後、間もなく小型の船に移乘して、即時に何やら不可思議なる卑舩の乘物に向ひて去りしが、其乘物は豫め一澳内に碇泊しつゝ、彼等日本の士官並に水兵を待設け居れり、然るに此乘物は、乃ち言ふ迄もなく水雷艇にして、其水兵を搭載するや、否や直に拔錨し外海に出で去れり、』云々。而して十一月二十五日、本件に關して、露國駐在英國大使ハーヂンジと、露國外務大臣ラムスドルフ伯との間に、調査協商調印せられ、審査委員會は、五人の委員より成り、英、露、米、佛四國より、各一名の高級海軍武官を出し、殘り一名は右四名にて之を選定し、其選定に付意見一致せざる時は決を墺國皇帝に請ひ、開會は成るべく速に巴里に於て爲すべき事に定めたり、然るに波羅的艦隊は、北海漁船砲擊前に、瑞典及獨逸の滊船にも砲擊を加へたりとの報ありしが、此等は爾來露都に於て交渉の末、十二月二十日、遂に露國は損害賠償を承諾し、大問題とならずして決着せり、次で十二月四日北海事件に付、國際調査委員會は、巴里に於て開會せられたるが、遂に明治三十八年二月二十五日調査斷定を決了せり、而して其條文は、十七箇條より成る者にして、條文中砲火を開きたる行爲及其船舶に對する結果に就ては、ロジエストヴエンスキー提督其責に任ずべき者と決定し、別に露國は六万五千磅の賠償金を英國に仕拂ひ、一時世界の耳目を聳動せしめたる北海事件も、茲に局を結ぶに至れり。

第六節　第二太平洋艦隊の進航

狐疑の極、遂に北海事件を惹起し、世界に神經過敏なりと唄はれたるバルチック艦隊の一部隊は其の後十月二十三日ドーヴァー海峽を西に通過し、一時間約三浬の速力を以て進航を續けたるが、同二十六日西班牙の西北端なるヴイゴ港に投錨し、二十七日同港にて炭水を積載せしに、(後に中立違反の抗議起る)北海事件に關し茲にて本國の訓電に接し、一時淹留する事となれり、然るに該事件に直接關係せざる司令官フエルケルザム少將の率ゐる殘部隊のみは、二十九日に至り同港を出發する事となり、阿非利加西北端の一港タンヂールに向け解纜したり、之より先き本國リバウ港を出發したる殘部隊は、孰れも商船旗を掲ぐる、黑海よりせる六隻の義勇艦隊を合し、戰艦**シリイ**、**ウエリキー**、**ナワリン**の二隻巡洋艦**スウエートラナ**、**ゼムチユーグ**、**アルマーズ**の三隻、驅逐艦八隻、水雷母艦一隻、特務艦二隻、運送船七隻、給炭船三隻より成り、同月三十日タンジールに着す、此日艦隊は本支隊に兩分せられ、ヴイゴ港にある者を喜望峰迂回本隊とし、フエルケルザム少將の率ゆる部隊を、蘇士運河通過支隊と爲せり、次で十一月二日、本隊は北海事件審問關係の將校四名を殘留し、餘は悉くヴイゴーを出發し、三日タンジールに着せり、此日タンジールにありたる支隊は、地中海に入りクリート島に向ひ、先發の驅逐艦三隻は、五日阿弗利加北岸ビゼルタに着せり。同日本隊はタンジールを發し太西洋に向へり、而して支隊の一部は、八日アルヂールに着し、他は東に向け同地を通過し、十日巡洋艦一隻及水雷母艦クリート島に着せり然るに露國政府は九日、支隊の蘇士通過に就き、蘇士通過の協定を開きしに蘇士運河の當局者は遂に兩岸に露國艦隊を集合せしめ、糧食の積入れと、船の進航とを便にする爲め、露艦隊の運河通過中、北方に對する總ての通行を止むべき旨を布令し、且つ其の何者たるを問はず、商船より運河中に投入する事、幷に示威運動の擧動を禁止する等、あらん限りの力を盡せり。十二日支隊の戰艦**ナワリン**は巡洋艦其他と共にクリート島を發しスダ灣に着し、他の一部は尙ほ十三日までクリート嶋にありて物資の供給を受けたり。而して本隊は、十二日佛領亞弗利加の西北岸ゼネガルのダカール港に入り、等しく物資の供給を受けたり。次で十六日ダカールを發し、アックラアーに向ひしが此日、本國にては、後發部隊たる巡洋艦**オレグ**、**イズムルード**、義勇艦隊補助巡洋艦**オン**(前の**ピータースバーク**)**ドニバー**(前の**スモレンスク**)**テレツク**及び驅逐艦五隻、特務船二隻はドブロテンスキー少將を以て司令官とし、同日リバウを出發せり、而して此艦隊は十七日瑞典の南方ボルンホルム沖を通過し、翌十八日丁抹の北端スカウ灣に入れり。二十一日本隊の一部は阿弗利加西岸葡領モッサメデス